
アイロンより熱く、シャツより爽やかに

井口亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイロンより熱く、シャツより爽やかに

【Zコード】

Z7740Y

【作者名】

井口亮

【あらすじ】

青春って何だろ？他愛ない日常に不満と、不安を抱くじいにでもいる高校生、遠藤真一は新任の英語教師に勧められるまま部活動をはじめることにする。だが、その部活は『危険な場所でアイロンをかけるスポーツ』、『エクストリームアイロン』を行う部活だった。友情、恋愛、青春……どれもがアイロンより熱く、シャツより爽やかに。

第12回電撃大賞第三次選考通過作品

プロローグ『この「ひな」の恋の書物』（前書き）

読みやすさよりて改行してあります。
……プロローグを入れ忘れてたので追加しちゃいます。

プロローグ『といづ名の恋じ書』

まず、はじめに言つておかなければならぬ。

よく、勘違いされる方が多数居る。

これから僕こと遠藤真一、十七歳が体験するこのスポーツは決して架空のスポーツではない。

競技人口こそ少ないものの、サッカーも野球と同様に愛されているスポーツだ。

だけど、少なからず僕らがこのスポーツにかけた情熱に共感頂けるだろう。

一緒に感じてください。洗濯し終わった清潔なシャツのような爽やかで、熱したアイロンのような熱い、青春の日々を。

プロローグ『といづなの恋じ書物』（後書き）

投稿を考えてる方の参考になれば幸いです。

この年の『狼と香辛料』は受賞後に読んで『つわー、面白いー』と唸つただけあって、数年後ヒットしましたねえ。

そういうや扉の外の土橋先生は今何やつてるんだらう。あの人も面白かったんだけどねう。

第一章『アイロンと僕』

「真一、せつかくの土曜日だし今日帰りずっと寄つてこい。」

ホームルームが終わり帰ろうとしたところから声をかけられた。

「遠慮しどくよ、金井こそバスケ部の試合近いんだろ？練習に行けよ」

僕は同級生である金井みかの誘いをざんざに断ると、薄っぺらい鞄を取り席を立つた。

僕こと遠藤真一と違い、金井みかは勉強もスポーツもできる絵に描いたようなクラスのアイドルみたいな奴である。

肩のラインで揃えた校則に引っかかる程度の茶髪のショートカット。活発な性格を象徴するような大きな目と、いまどき珍しいヘアバンドが特徴的と言えば特徴的か。

小さい頃からの腐れ縁であり、たまにこうやって声を掛けてくる。

しかし、みかは来月にあるバスケの地区予選にもレギュラーに選出されており、今は僕のようなつまらない人間と関わっている暇はないはずだ。

「たまにはいいんだって。真一最近元気ないじゃん？だから一緒に遊びに行こうっていつてるの」

形のいい眉を潜め、不機嫌な顔をあらわしながらみかは言った。

「ん、ありがとう。でも今日は忙いんだ」

それはウソだ。

今日の午後は何も予定はないし、何もする気は無い。

「何にもやる事なんか無いの?..」

みかもその程度の僕の予定はわかる。

しかし、僕はあえて取り合わない事にした。

僕は答えずに鞄を持って教室を出る。

正直、何をしてもやる気がおきない。

私立北星学園で一年過ごし、今では二年生になるが、僕はこの学園生活を含む全てのものに嫌気がさしていた。

校門を出て、通いなれた道を歩く。

まだ少し寒い春の風を頬に受ながら、学校の周りをランニングする野球部員とすれ違う。

その野球部員は僕も知っている奴で、去年の春から真面目にクラブで練習し、今年晴れてレギュラーになつた奴だ。

僕に目をくれる事もなく、息を弾ませて走り去つていぐ。奴の頭の中はきっと、地区予選で一杯なんだろう。

僕はその後ろ姿を目を細めながら眺めると小さくため息をついた。僕は家につくと、居間で自分の茶飲み友達と電話している母親に、ただいまと一方的に伝えると一階にある自室へ入つた。

カーテンを締め切つた暗い部屋の床に鞄を放り投げると、ベッドに倒れこむ。

僕はブレザーを脱ぎ、ジーンズとトレーナーを着ると、そのまま上からパー カーを羽織った。

下でまだ、友達と電話で話している母親に出掛けてくれる口を止めるとそのまま外に出た。

コンビニでサンドイッチを買うと、家の近くの公園に赴く。土曜日の公園は子連れの主婦が多く集まり、小さな子供が遊具で遊び横でおしゃべりをしていた。

僕はそれを横目で見ながらベンチに腰掛ける。

先ほどコンビニで買ってきたサンドイッチを開きそれを齧る。

隣のベンチでは灰色のコートを着た三十歳くらいのサラリーマン風の男が自分と同じようにサンドイッチを膝の上に開きながら、携帯電話で仕事の話をしていた。

落ち着かない様子でサラリーマンは会社となにやら話し合っている。

僕も来年は受験勉強をし、大学に進み、そしてこの人みたく仕事をするのだろう。

まあ、うまく合格した場合の話であるが。

僕はしばらくその人の様子を見ていた。その男の人は電話を終えた途端、大きくため息をつくとサンドイッチを齧りながら立ち上がった。

それから、不機嫌そうな声で何かを呟きながら立ち去っていく。何か仕事でトラブルでもあったのだろう。大人になれば色々と抱えるものがあるのだろう。

その姿に遠い将来の自分を重ねながら、僕もため息をついた。どれくらいそこに居たのだろうか。

ふと、僕の携帯電話が鳴った。

僕は着信がみかである事を確認し、舌打ちすると一応出る事にした。

「もしもし」

「真一。今どこに居るの?」

「ああ、さくら公園に居るよ」

「あんた、机の中に宿題忘れてつてるよ?今から持つてくから」「バスケの練習しなくていいのか?」

「今日はいいんだって言つてるでしょ?うーー少しそこで待つてなさい」

怒氣をはらんだ声で一方的にまくしたてると、みかは電話を切つ

た。

僕は顔をしかめると、小さくため息をついて携帯電話をポケットにしました。

それから程なく、みかが公園に入ってきた。
学校帰りのままなのだろう、まだ制服のままだった。
みかの表情は誰が見ても怒っていた。

「真一、やっぱり暇なんじやない」

「まあ、そ、うなんだろ?」

僕はみかの棘のある言葉を適当に流すと、そっぽを向く。
みかは鞄から宿題のプリントを出すと、僕に突き出してくる。
僕はそれを受け取ると、折りたたんでポケットにねじ込んだ。

「ありがと?」

「最近、真一、ぱつとしないね?」

みかはため息をつくと僕の隣に腰掛けた。

僕はサンドイッチを齧りながら、みかを眺める。みかは僕の膝の上にあるサンドイッチを取ると齧つた。

「うら」

「これでいいでしょ?」

みかは鞄の中から缶コーヒーを出すと僕に押し付けた。微糖のそのコーヒーは買つたばかりなのだろう、まだ熱かった。

「できれば無糖がよかつた」

「文句言える立場じゃないでしょ?」

みかはもう一本缶コーヒーを取り出し、それを開ける。

みかのコーヒーはしっかりと無糖ブラックである。

僕はコーヒーのフルタブを押し込むと、口をついた。

「そりそり、真一？バスケットボール部の一ノ宮遼つて知ってる？」

「一年生のだろう？お前の後ろにじょりゅうひめじやないか」

「今度、真一と遊びたいんだつてさ？」

「なんで？」

「真一って疎いのねえ」

「疎いんじゃなくて面白くないだろ？僕と居たつて」

僕の口調は少し怒ったものになっていた。

何故だろ？凄くイライラする。

僕はぐつとコーヒーを喉の奥に流すと、遠くのゴミ箱の中になつた缶を放り込む。

からんと乾いた音をたててぐるぐるとゴミ箱の中缶が回る。みかはそんな僕の様子に気づく事もなくけらけらと笑つてくる。

「いいんじゃない？本人さえ樂しければ。そんなもんでしょう？」

「いいねえ、羨ましいよ。樂しいと思えるものがあるのは」

「私は真一の方が羨ましいよ。一田中こうやってのほほんとして何も悩みもなさそうにぼけーっと腰こしていれるなんて」

「そうなの？」

「だつて、今、みんな中間試験やクラブの試合とかで忙しいじやん。真一へらいだよこいつめつてだらだらしてりぐの」

僕は言われようの無い立場を感じつつも、それを胸の奥にしまといこんだ。

「そりそり……」

僕は吐き出すようになつ咳いた。

しばらく、僕とみかはベンチに座つたまま、黙つて公園で遊ぶ子供達を見ていた。

サンディッシュも食べつゝし、ドービーも無くなる。

そういえば昔、みかとここで遊んだ事もあつたつけ。

かくれんぼで、鬼だつたみかを置いてそのままみんなで帰つた事もあるし、今は撤去された回転遊具で遊んでいて、みかに足を掛けられて転ばされ、病院に行つた事もある。

「そういえば昔、ドービーによく遊んだよね。かくれんぼで鬼のとき真一や博之達、私置いて帰つたよね？」

「次の日、地球儀で遊んでた僕の足かけてちゃんとやり返されたじゃないか。病院で四針も縫つたんだぞ」

「おかげで地球儀なくなつたんだつけ」

みかはぐくすくと笑う。

僕はため息をつくとみかに聞いてみた。

「みか、自分の将来つて考えたことある？」

「うーん、まあ、大学行つてそれからまあ、なんとかなるだろ？」「うこには考えた事はあるけど……」

みかはそう言つて一度言葉を切つた。

「でも、今はそんな事考てる暇ないかな？だつて、バスケとか恋とかで忙しいもん」

「誰か好きな人でも居るのか？」

「居ないよ。これから誰かを好きになるの」

「はあ？」

みかの返答に僕は少々面食らつ。

「だつて、高校一年のこの時期は一生の間で一度だつて床つてこないんだよ。だつたらやれるだけの事やりたいじゃん？ 真一はそういうのつて何かないの？」

何か言葉が胸の奥にのしかかつてくるような感じがした。

「無いよ。あればこんな事してねえだろ？」
「まあ、そうでしょうねえ」

答えて僕はまた、イライラしてきた。
イライラの原因は多分自分でもわかってる。
だけど、僕は認めたくないだけだ。

「真一は部活に入らないの？バスケ部とか入れば遙が喜ぶんだけど」

「今更入つたって練習してる奴に迷惑だろ？レギュラーになれる訳でもないし。多分ずっと帰宅部してるんじゃないかな」
「真一だったらそんなものか」

みかはぐすくすと笑つて立ち上がつた。

「行くのか？」

「うん、何か話してたらバスケの練習したくなつた」

「試合、近いしな。頑張れ」

「真一も頑張つてね」

「……何も頑張る物がないけどな」

「遙と付き合えば？恋愛も青春のうちだぞ」

「考えるだけ考えておく

僕は適当にそつ答えると、手を振って立ち去っていくみかの背中を見送った。

僕はその後、公園を後にすると商店街のゲームセンターに足を伸ばした。

帰宅途中の学校の後輩だらり、ゲームの筐体に群がり、がやがやとやっている。

僕も携帯で友人と呼べる友人に連絡してみたが、あいにくどうも出ないか部活で忙しいとの返答だった。

いつもは一人くらいは誘いに乗るのだが、今日は珍しく皆無だった。

僕はため息をつくと一人でゲームをして時間を潰すと、家に帰ることにした。

家に帰ろうとする頃にはあたりも暗くなつていて、家に着いたら既に夕食の準備ができていた。

そのまま食卓につく。

珍しく夕食前に親父が仕事から帰ってきており、妹の麻奈を含め、家族四人で食卓を囲む事になった。

「最近、学校どうなの？」

「何も無いよ

以前にもした事のある受け答えをして僕はいつもと大して変わらない夕食を胃に収める。

「麻奈はどうなの？」

「部活で妙子ちゃんが足くじいて今日病院に運ばれたよ」

「あら……」「

下らない会話を耳の端に留め、僕は食事を終えようとした。

その時、親父が唐突に問い合わせてきた。

「真一は今何かやりたい事はないのか？」

「なんでそんな事聞くんだ？」

「お前部活も何もしてないだろう。かといって友達とつるむ訳でもないし。高校二年だってのに色っぽい話すらないだろう？なら別に何かやりたい事があるんじゃないのかって思つただけだ」

「別にそんなの無いよ」

僕はそう答えるのが少し、腹立たしかった。

僕はさつと自分の部屋に戻るとテレビをつけてゲーム機の電源をつけた。

しばらくはそれで時間を潰し、飽きたらベッドに横になつた。わかっている。

そう、わかっているんだ。

みかも親父の言つことも。

僕のこの時間は昼間見た子供達の時間と一緒に、過ぎ去れば戻る事のできない時間で、いずれはあるサラリーマンのような世の中の煩雜さの中に入らなきゃならない。

その前に、時間のある今のうちにやつしたい事や楽しい事をできるだけしろと言いたいのだろう。

それはわかっている。

だけど、何がやりたいのかがわからない。

今更、みかの言つとおりバスケ部に入部したつてずっと玉磨きで終わるだろうし、好きでもないバスケに時間を費やすのもまたもつたひない。

二ノ宮遙は確かに可愛らしい部類に入るのだろうが僕は彼女の事を知らないし、また好きでもない。

また、向こうだって僕を好きかどうか分からぬし、浮かれて

その気になつたら馬鹿をみるのは中学の時に味わつてゐる。

恋愛に對して臆病になつてゐるものもあるが、今は恋愛をしたいといつ氣にはなれなかつた。

そう、僕は決定的に何かしたいという衝動に欠けていた。

「くそつたれ」

だけど、世の中にどれ程、この時期に思うような何か打ち込めるものを見つけて青春らしい青春を謳歌できる奴がいるのだろう。多分、僕のようにだらだらと過りしへの奴の方がきっと多いはずだ。

きっと、あの時、もっと遊んでおけばよかつたと将来後悔しながら、大半の人は大人の事情という奴にもみくちゃにされるのだろう。僕は寝返りを打つと風呂に入らず寝ようと思つた。

まどろんでゆく意識の中で、所詮人生なんてこんなものだと思い込み、納得しようとした。

漫画や小説みたいな青春なんて、人の作ったありもしない青春像で、こうなればいいなという理想の形なんだ。

それはあくまで理想であり実際に叶つものでは無い。

だから、僕はありふれた高校生活を送る標準的な高校生のままで終わるのだろうと、半ば諦めていた。

だけど、どこかでそんな青春に憧れて、そうありたいと思う自分も居る。

だから、こんなに腹が立つんだろうな。

僕はここで考えるのをやめた。

まどろみに落ちていく意識に身を任せ、その時、今日といつ何も生み出す事の無い一日が終わつていった。

「担任の柴田先生が家庭の事情で急遽辞める事になりました。今度からこのクラスを受け持つ事になつた嶋本一彦です。専門は英語

です。よろしくお願ひします

週を明けて登校したところ、担任の先生が変わっていた。

まあ、担任の柴田は両親の借金だとか何かと実家で色々とあると
いう話を聞いていたのでややもすればこうなるとは感じてはいたが、
まさか本当にこうなるとは思っていなかつた。

新しく取つて変わつた担任の先生は教壇で教鞭を取るより、ベン
チプレスでバーべルを持ち上げている方が絵になるようがつしり
とした体格の男だつた

年の頃なら二十台後半だろう、耳に残る大きな声で大雑把に出欠
を取る。

「そしたら、悪いけど休み時間に出席番号一番から順に面接して
くからな。俺まだみんなの事全然わからないからな」

嶋本先生はホームルームの締めでそう告げると、礼を済ませる。
隣の席のみかが囁く。

「……何か熱そうな先生だね」
「かもしれないな」

僕はどうでもよさげにそう答えた。

だが、僕はこの男との出会いがこれからの中学校生活を変える出会い
だとはまだ、気がついてはいなかつた。

僕の面接の順番が回ってきたのは昼休みの一一番最初だつた。
生徒指導室という名前だけの空き部屋に入り、机を挟まず嶋本先
生と向き合つて椅子に座る。

「ええと、遠藤真一だな？何だ部活動していないじゃないか。さみしい野郎だな」

「……先生失礼ですよ」

「お前こそ青春に対して失礼な奴じゃないか。どのみち、お前、彼女とかもいなさそうだしな」

嶋本先生はげらげらと笑いながら、僕の肩を叩いた。初対面で失礼極まり無い事を言われているが嫌いになれない爽やかさが嶋本先生にはあった。

「で、お前、これからどうする気よ」

「これからって？」

「高校生活だよ。何かやるのか？」

「高校三年になつたら受験勉強して大学行こうと思います」

僕は正直にそう答えた。

嶋本先生は額を押さえながら難しい顔をすると、一人頷いた。

「寂しい奴だなあ……」

「自覚はします」

嶋本先生はひとしきり僕の顔を眺めると、何かを納得したように頷く。

「じゃあ高校一年やつてるつちは暇なんだな？」

僕は頷くしかなかつた。

嶋本先生は生徒指導簿に何かを書き込むと、にやりと笑つた。

「よし、お前、俺が今度顧問する部活に入れ

「は？」

「一度部員になれるそな奴探してんだ。いいだりづっ・暇なん

だから

「確かに暇ですが、やりたくない事までやるのは嫌ですよ

僕は顔をしかめる。

嶋本先生は笑顔のまま頷いた。

「確かにそうだよな。だが、何もやる前から面白くないと決めつけるのもまた良くないだろう。とりあえず一度やってみてから決めてみる」

「はあ」

僕は曖昧な生返事を返す。

嶋本先生はにやりと笑つと、僕の肩を叩き、告げる。

「お前、明日も暇だらう？…だったら放課後俺と付き合へ。そつそく、部活動だ」

何か一方的に流されていいるような気がしないでもないが、僕は頷いた。

「でよっ」これだけは自分で準備してもらいたいものがあるんだ

「はあ」

ジャージでも用意すればいいのだろうか？僕は明日、この新しい先生に何と言つて入部を断るうか考えていた。

嶋本先生は僕の予想を裏切つたものを用意しひと言つた。

「アイロンとアイロンは自分で用意してくれ」

ホームルームが終わり、帰宅準備をしている時に何の出来事をみかに話したところ、みかが怪訝な顔をした。

「はあ？ アイロンとアイロンは？」何の部活なの？
「……聞くの忘れてた」

僕は頭を掻いて難しい顔をする。

「あの体で真一と一緒にして、シャツにアイロンをかけてる姿ってあんまり想像できないんだけど」「僕も想像したくないな」「なら、なんで断らなかつたの？」「断る理由が無かつたから……明日には断るよ」

僕が鞄に教科書を詰めながらそつ答えるオと、教室の入り口に知った女生徒が居た。

みかの後輩の二ノ宮遙で、遙は僕と田が合いつて軽く頭を下げる。僕も彼女に軽く頭を下げ返すと、田の前で唸るみかに顎で合図する。

「ふーん……あ、遙が来た。真一、バスケの練習行くね。もし暇だったら練習見に来る？ 遙も喜ぶよ？」
「いや遠慮しとく。今日は孝とゲーセン寄つて帰る
「そ、じゃあまたね」

僕は軽快に走り去るみかの後ろ姿を見送ると鞄を取り学校を後に

した。

ゲーセンで十分に時間を潰した後、家に帰った。
母親が洗濯物を干している横を通りすぎながら、僕はアイロン台を探す。

「母さん、アイロンとアイロン台あるの？」

「自分でシャツの皺でも伸ばすの？」

「いや、明日部活動で使うんだと」

「あんた部活やるの？」

「体験だけね、まあ、行くつて事になってるから一応持つてかない」と

「何、運動部員の洗ったシャツにアイロンかけるのかい？」「わからないよ。それだったら何か嫌だから辞めてくる」

何か母親が言つた事が本当になりそうで嫌な気がした。

他の運動部員の洗い終わったシャツをアイロンがけするなんて何か屈辱的だ。別に関係ない奴のシャツなんざ知つたこっちゃいない。僕は押入れのすみにあつたアイロンとアイロン台を見つけると引つ張り出す。

「このアイロン」「コードついてないよ？」

「ああ、それ今流行りの充電式コードレスアイロン。充電されてるからスイッチ入れれば使えるわよ」

「いいや。借りる

「ちやんと返しなさいよ」

僕は少し焦げて茶けているアイロン台とアイロンを持って自室に

戻った。

次の日、僕はスポーツバックにアイロン台とアイロンを入れて登校した。

放課後、嶋本先生のところに行くとそこには先客でみかと二ノ宮が居た。

「あれ？なんでみかも居るんだ？」

「マネージャー兼務。今、風邪が流行つて今日バスケ部の練習中止なんだって。だからこっち来てみたら嶋本先生が一緒に行つていいくつて」

みかは楽しそうに笑う。

その横で控えめに二ノ宮が僕に頭を下げる。

「えっと、金井先輩に言われてついてきたんですけど、遠藤先輩何をするんですか？」

二ノ宮にそう言われて僕は嶋本先生を見る。

嶋本先生は足元に置いてあつた、大きなザックを背負うと笑つた。そのザックはまるでアフガンやイラクの戦場でも潜りぬけたかのようにほころんでおり、また、更なる戦場へ向かうのか大量の荷物が入っているようだつた。

「じゃ、遠藤が来たから行くか

「行くつて、先生どこに行くんですか？」

僕が聞くと先生は僕の背中を外に押して行く。

「着けば分かるって」

嶋本先生に連れられ、嶋本先生の車に乗る。

「これから、鳥山八景にいくぞ」

鳥山八景は学校から三十分くらい車で行つたところにある観光客用に設けられた山道だ。

もともとこの地区は扇状地になつていて、山から川が流れている。川の上流は谷になつたり、切り立つた崖になつてしたり、ハツの絶景があることからそう呼ばれているところだ。

だが、実際は極めて認知度の低いローカルな観光名所であり、地元民でもあまり近づくことがない場所である。

嶋本先生の運転する緑色のジープのチャロキーに揺られながら、二ノ宮がみかに囁く。

「遠藤先輩これから何するんですか？」

「さあ？でもアイロン持つて来いつて昨日言われたみたいだよ？」

「アイロン？何に使うんですか？」

「さあ」

それを今一番知りたいのは僕だ。

しばらくしてジープは鳥山八景の駐車場につく、僕らはジープを降りると各自の荷物を持つと先生の後についていった。

「さて、これから山登るからな

先生はさうひととおり言つて、巨大なザックを背負つたまま山道を登つていぐ。

「お、ギョウジャニーンークだ……採つていこひ。多分まだ沢山あるんだろうな」

嶋本先生は足元に生えている山菜をむしり、ザックにねじ込む。

「先生、自然観察クラブか何かですか？」

僕が聞いてみると先生が眉の根を眉間に寄せて人を馬鹿にしたような顔をする。

「お前、アイロンとアイロン台持つて自然観察するツモリか？もうちょっとと考えろ」

なら、せめてアイロン台とアイロンを何に使うのか教えて欲しかったが先生はすたすたと山道を登つていく。

僕の後を二ノ宮とみかがゆっくりと上つてくれる。

しばらく、山道を登ると先生は「危険入るな！この先崖あり」と書かれた古い看板が立てられ黄色いロープの張られた小道に逸れて、そのロープを越えて中に入つていく。

僕とみかと、二ノ宮はそれでお互いの顔を見合わせる。

「おーい、何してる。早く来ーー」

どこか楽しげな声で嶋本先生が僕らを呼ぶ。

僕らは何か釈然としない物を感じながら先生の後を追つた。まだ、春先とはいえ少し寒い。

歩く先で枯れた枝を踏み、靴の下でぱきぱきと音がする。スネまで茂った草を搔き分けながら、先生の後を追つ。

「枝がスカートに引っかかる……」

「……先輩、背中に虫ついてますよ」

みかや二ノ富は虫を払つたり、スカートの裾を気にしながら嫌そ
うな顔をする。

「みか、二ノ富と一緒に車で待つてたらいいんじゃないかな? 制服
じゃ辛いだろ」

「でも、何するか気になるからついてく。遙ももちりん行くよね
?」

みかに詰め寄られ二ノ富は半ば強引に領かされた。

「とりあえず俺、先に先生のところに行つてるから後からゆっくり
追いつきな?」

僕は一人を気遣いながら、もはや森となつた山道を進み、先生の
後を追つ。

しばらくして、道は急に途切れていった。
看板にあつたとおり、崖になっていた。

崖の高さは五十メートルだろうか、下には川が流れしており、その
川を挟んで先程車で走つた道路が走つていた。

道路の脇に立つていた看板からすれば今僕らがいる場所は鳥山八
景の一つ、鳥山絶壁の上に居る事になる。

先生はザックの中からロープやらヘルメットやらを取り出しながら、
何やら準備をしている。

その様子を一部始終眺めながら僕は嫌な予感がした。

「先生、これから崖を降りるツモリですか?」

「途中までな」

先生はそう言つて僕にナイロン製のベルトを投げて渡した。
僕も映画や、ニュースで見たことがある。これはハーネスという奴だ。

「ラペリング用のハーネスだ。それ、とりあえず着けてくれ。あ
あ、制服が汚れるつていうんだつたら、そこに作業服あるからそれ
に着替える。後、ロープで手を焼かないようにグローブもつけるよ
」

「……ロッククライミング部ですか？」

「残念だ。これからするのはロッククライミングみたいなもんだ
が、それは目的を達するための一つの過程でしかない

僕は嶋本先生の隣で、用意された作業服に着替ながら、僕は顔
を難しくする。

いい加減、そろそろ何をするかはつきりさせた方がいい。

ロッククライミングは昔から一度やってみたいとは思つてたから
やってみてもいいが、それでもないとなると何をするのか問いただ
さねばならない。

「先生、そろそろ教えてくださいよー」こんな崖まで来てロックク
ライミングまでして何をするんですか」

嶋本先生は目をぱちくりとさせながらまるで何でわからないのか
不思議な顔をする。

「お前、自分の荷物で何もつて来てるんだ？」

「アイロンとアイロン台です……」

僕はアイロンとアイロン台をバックから取り出すと嶋本先生に見
せた。

「おお、西芝の新型、今流行りのコードレスアイロンじゃないか、一番いいの持ってきてるじゃないか」

「これで何するんですか、断崖絶壁で崖に張り付きながらアイロンでもかけるっていうんですか？」

嶋本先生は僕の肩を叩くと

「わかつてゐるじゃねえか。なら聞くんじゃねえよ」

と笑つて答えた。

断崖絶壁に張り付きながらアイロンをかける？

「冗談ですよね？」

僕が聞き返すが先生は至極真面目な顔で答える。

「冗談なものか。極端なアウトドア活動のスリルを健康なプレス加工されたシャツの満足と結合する最新のデンジャラススポーツ……これが、今からお前のやるスポーツ『エクストリームアイロン』だ。俺とお前はこれから誰も体験したことの無いようなスリルのある生活を体験するぜ？」

嶋本先生はそう言つて親指を立てて不敵に笑う。

今、分かった事がある。

こいつは多分、馬鹿だ。

先生という職業だが、間違ひなく馬鹿だ。

確かに誰も体験しはしないだろう。

誰もそこまでしてアイロンなどかけようとしない。

嶋本先生はハーネスをつけると、ザックの中からコイル状にまか

れたロープを一巻き取り出した。

それを慣れた手つきで手近な木の幹に巻いて固定する。

嶋本先生はロープの片方を崖の下に向かって投げる。ロープはロイルを解きながら緩やかな弧を描いて崖下へと落ちていく。

「先生、アイロンかけるにはこの崖めぢやくけや高いですよ」

「エクストリームアイロンじゃこんなところ常識だつて。まあ、一番最初のうちは人の多い通りだとか、家の庭で逆さづりになつてアイロンが妥当なんだけど、それじゃお前も楽しくないだろ?」

楽しくなくてもいい。とりあえず身の安全を保障してもらいたい。僕が作業着に着替え、ハーネスをつけて木偶人形のように突っ立つていると嶋本先生はザックの中にあつたヘルメットを僕の頭に被せる。

「まあ、落ちたらこんなの役に立たないが、ヘルメットは上からの小石とか落下物に対しても有効だからな。準備ができたらハーネスの金具にロープを通せ……って言つてもやり方わからんねえよな。いい、俺がやる」

嶋本先生は僕の腕を引っ張り、木の幹に固定されたロープの場所まで来ると腰のハーネスの金具にロープを通した。

「うつし、準備はこれでOKだ。アイロン台とアイロン持て。シャツは……さつきまで着てた学校のシャツあるだろ。それも一緒に持つて降りるぞ」

嶋本先生は僕の準備が終わると、自分のハーネスにロープを通してからそう言った。

僕は一応、先生に言われるままアイロンとアイロン台、さつきま

で着ていたシャツを手に持つ。

先生は準備ができると、ザックの中からカメラを取り出し、首にぶら下げる。

「よひじ、じゃあ、行くぞ」

向こうも準備が整ったのだろう。

もう顔が断崖絶壁をロープでラペリングして降りるツモリでいる。僕はもう一度、嶋本先生が降りるツモリでいる絶壁を眺めた。地質についてはよくわからないが、花崗岩とかそんな名前がついてそうな灰色の岩肌がむき出しになつた崖で、高層ビルの屋上から地面を見下ろすくらい高い、やはり最初の目測どおり、五十メートルくらいはあるのだろう。

崖の下を覗きこむと程よく恐怖心を煽る爽やかな風が吹き上げてくる。

足元にあつた小石を蹴つて崖に蹴り落としてみるが、下に落ちるまでにかなりの時間がかかる。石が地面を叩く音は無論、聞こえない。

僕は軽い眩暈を覚えて先生に言つた。

「先生。危ないです」

酷く、端的な言葉で現状を表せたと思う。僕が国語の先生なら間違いなく満点をつける回答だ。

だが、彼は英語の先生だった。

「大丈夫だつて。降り方とか俺が教えてやつから」

「そういう問題じゃなくて、落ちたら死にますよ」「だろ? なんだ、遠藤ビビッてるのか?」

正直、ビビッている。

もし、この場所に僕と嶋本先生しかいないのであれば僕はここで素直に頷いて、辞退したかもしれない。

そうすれば、僕は今まで通りの安穏とした生活をだらだらと送る事ができたかも知れなかつた。

だけど、運命というのは時に残酷なもので、その登場がもう少し、遅ければ別の結果を招いていたのかも知れなかつた。

丁度、その時にみかと二ノ宮が僕に追いついてしまつたのだ。男の尊厳という物がある以上、二人の前で醜態をさらす訳にはいかない。

一人は息を切らしながら、作業服にヘルメット、腰にはハーネスをつけてアイロンとアイロン台、それにシャツを抱える僕を見る。

当然、その姿は僕から見ても滑稽なのだから一人にとつても滑稽なものに映るだろう。

二ノ宮が口元を押さえて笑いをこらえている横で、みかが目をしばたかせて僕に尋ねる。

「あんた何するの？」

「これから崖の途中でアイロンがけするらしい」

「崖の途中でアイロン崖？体張つた新手のギャグ？」

「お前からも先生に言つてやつてくれよ。こんなのは無意味だつて

僕はみかを巻き込んでなんとかこの場をしのげりと思つた。

「確かにねえ……はたから見たビジュアル的には馬鹿で面白そつだけど……ちょっと危険すぎる気がするわ」

「落ちたら死んじゃいますよ」

みかと二ノ宮が崖を見下ろしながら恐る恐る口に出す。

先生は一人の肩を叩くと

「刺激的だろ？」

と笑い飛ばした。

確かに刺激的だが、こんな刺激は要りません。

嶋本先生はみかと二ノ富を面白そうに眺める。

どこか自信のある、そして、いたずらめいた笑みだった。

「金井と二ノ富はバスケ部だよな？」

「はい」

「ところで、バスケットボールってのは高いところにあるゴールにボールをシュートして相手チームよりも多く点数を取るのを競うゲームだよな？」

「ですね」

「それに何か意味なんてあるのか？」

「はあ」

嶋本先生の質問にみかが曖昧に答える。

だが、明らかに納得のいかない顔をしている。そりやそうだろう、一生懸命やってきているバスケに何か意味なんてあるのかなんて言われば僕がみかの立場でも納得がいかない。

みかは少し憮然とした態度で答えた。

「確かにボールをゴールに入れるだけだつたら何の意味も無いかもしれないですけどそんな事言つたらスポーツなんてみんな意味がないじゃないですか？スポーツつてある意味ゲームみたいなものですから楽しめる事に意味があると思います」

嶋本先生がにやりと笑うのが見えた。

「そうだ、スポーツは楽しむ事に意義がある。このアイロンがけも一緒に。アイロンをかけてシャツの皺を伸ばすのが目的じゃない。要はいま、金井が言つたとおり、皺を伸ばすまでの過程を楽しむのが目的だ」

何か言つてる事がわかるようでわからない。
わかつてはいけないような気もする。

みかはまだ難しい顔をしているし、二ノ富も半分納得したような納得しないようなわからない顔をしている。

「ま、いいや。とりあえず行くぞ。いつまでもこんなところでビビついても仕方ないだろ?」

「ビビつてといつ言葉に反応して僕はむつとした。

「二ノ富やみかが居る前では僕は男としての尊厳を保たねばならぬ」。

命の危険と男の尊厳であれば間違いなく命の方をとるべきなのだろうが、女子一名をしてそれができる程僕は人間として成熟されてなかつた。

「真一、危ないよ。やめな?」

「先輩、やめた方が絶対いいです!」

僕は俯き、二人に目を合わせる事なく。

「いや、やる」

と答えた。

本当はやりたくないのだが、そう言わざるを得ない。

だつてそうだろう。やつぱり崖を降りるのが怖いからやめさせてくださいなんてみつともない事、言えるわけがない。

僕は先生に簡単にロープの持ち方や降りるときの足運びを教えてもらひつと、背中にアイロン台を背負つて崖を降りる事にした。まるで地面が九十度傾いたかのような絶壁をゆっくりと交互に足を変えながら降りる。

「遠藤、もうちょっと体を起こせ！ ロープを抱きかかえるように降りろ！ でないと疲れるぞ」

先生が上から叫ぶ。

まだ先生は降りないみたいだ。

僕は先生の言つとおり体を起こして、垂直に立つている地面に対し、体を九十度曲げて、まるで腰の悪い老人みたいな格好でゆっくりと降りた。

「いいぞ！ 初めてにしては上出来じゃないか

僕はそれに答える余裕がなかつた。
どのくらいの時間がたつたのだろう。
多分、まだ、五分も経つていないのである。
だが、僕にとっては一時間以上たつてている気がした。
その時には十五メートルくらいは降りていた。
ロープを握る手がじつとりと汗ばむ。
背筋も嫌な汗が伝わり、僕は心細くなつてロープを抱き寄せる。
吹き上げる風はどんどん強くなるし、下をみると、吸い込まれそ
うなくらいに地面は遠い。

眼下を流れる川は白い水しぶきをあげ、激しい勢いで流れている。
僕が両手を僅かに開けば、僕は全ての物が支配されている自由落下の法則に基づいてそこに落ちる事になるのだろう。

落ちたら時は多分、もの凄く痛いのだろう。

前にバイクの交通事故現場を見た事があるが、そのときはバイクの運転手の太ももの骨が皮ズボンから肉を裂いて剥き出しへなっていた。

ここから落さればそんなものでは済まされないのだらう。

僕はそう思うと、そこから動けなくなた。

怖くなつたのだ。

しばらくそこで蓑虫のようにロープにしがみつき、風に揺られていた。

「遠藤——ビリした——！」

上で先生が叫ぶ。

「真——！」

みかの声だ。

見上げると、三人が心配そうに僕を見つめていた。

さつきまで、僕の心を奮い立たせていた男の尊厳とやらは完全に折れ、今は恥でも何でもいい、とにかく助かりたい気持ちで一杯だつた。

「センセー——！」

自分でもみつともないと思つ。

でも、それでも僕は助かりたかつた。

「やつぱ怖いです！助けてください——！」

みかや二ノ宮に後でなんと思われようが僕はその時、自分の命の

方が大切だった。

二ノ宮やみかは、そんな僕の情けない姿を見てどう思うだろうか。
僕は叫んだ後に恥ずかしく途端に恥ずかしくなった。

「待つてろ！今行くから！」

上から嶋本先生がまるでテレビで見るレスキュー隊員のように軽快に崖を降りてくる。

それに比べて僕はなんてみつともないのだろう。

先生は僕の横まで降りると、片手で僕の肩を握りしつた。

「大丈夫か？遠藤」

心配そうに顔を覗き込んでくるが、僕は恥ずかしくて顔をあげられなかつた。

「怖いのか？」

僕は黙つて頷いた。多分、今日の前に鏡があれば僕の顔は真っ青で今にも泣き出してしまいそうな顔だろつ。

僕は心底後悔した。

先生が何をするのかわからなくて、のこのことアイロンなんか持つてついてきたが、こんな事になるとは思わなかつた。

僕は所詮普通の人間であり、決してドラマや小説みたいな青春は送れない。

何か特別な事なんて何も無い青春を送つてだらだらと大人になればよく、それがどれだけ素晴らしいものか、こうなるまでわからなかつた。

これだつたら、今日も授業が終わつて家に帰つてゲームでもして
いた方がまだ、マシだつた。

僕は目の端に涙を溜めながら、ずっと俯いていた。
そうしたら、隣で、先生が急に叫び出した。

「ウオオオオオオオオオオオオ！」

僕ははつとして、隣に居る先生を見つめる。

「先生？」

先生は僕の顔を覗き込むと、爽やかに笑う。

「なんか、じい、生きてる感じがするな？」

こんな時に何を言つてゐるのかわからなかつた。嶋本先生は楽しそうに続ける。

「俺も最初は怖かつた。けど、そんときは叫んだ。すると怖くなくなつた。遠藤、お前も叫んでみろ」

僕がきょとんとしていると、先生は僕にむけてもう一度叫んだ。

「オオオオオオオオオオオオオオオオ！」

僕は目を細めながら、それを聞いていた。

先生が叫び終わる。

僕は叫び返した。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

上で一ノ富とみかが、まるで僕らが気が触れてしまつたのではな

いかと、心配そうな顔をして、僕らを見つめていた。

「オオオオオオオオオオオオオオ！」

「アアアアアアアアアアアアアアアア！」

僕と先生は交互に何回か叫びを交わした。

「つしゃあ、その気合だ！」

不思議と先ほどまであった怖さは消えていた。

「遠藤、イチ、二、イチ、二で降りるぞ！」

「はい！」

自分でも驚くぐらいの大きな声で先生に答えた。

「ヒクストリーム！アイロオン！イチ、二、イチ、二・

「イチ、二、イチ、二・」

先生がかける号令にあわせて、僕は足を交互に降ろす。

先ほどまでとは違い、自分の中に見えないエネルギーが流れ込んでくるような気がした。

僕と先生はそのまま、ゆっくりと交互に足を下ろしながら崖の半ばまで降りる。

さつきまで「つむなかつた風の音が今では何も聞こえない。

崖から遠くに見える僕が住んでいる町がなんだかとても小さく見えるし、そんなのにも目を向けるだけの余裕もあつた。

崖の半ばまで来ると、僕らはそれ以上降りるのをやめた。

「ハンドオー・

「はい！」

「アイロン台、準備！」

「アイロン台！準備よおし！」

もう、何か吹っ切れた。

僕はやけくそになりながら叫ぶ。

右手で尻にロープを押し付けブレーキをかけると、左手で背中に

背負ったアイロン台を膝の上に乗せる。

「シャツ！アイロン用意！」

「シャツ！アイロン準備よおし！」

ハーネスに引っ掛けていたアイロンとシャツをアイロン台の上に力強く乗つける。

「スイッチオン！」

先生が叫ぶ。

「スイッチオン！」

僕の指がアイロンのスイッチを捻る。

アイロンの鉄が徐々に熱を帯びてくる。

僅かにこぼれたスチームがアイロンの鉄の上で弾け、蒸氣となる。鉄が、熱くなつた。

「ヒクストリーム！アイロン！」

「アイロン！」

僕は熱くなつたアイロンをシャツに押し付けた。

膝に力を居れ、アイロン台一杯に広がつた薄く黄色いシャツにア

アイロンを当てる。

僕がアイロンを押す度に、シャツの皺が一つ、また一つと消えていく。

僕は吹き上げる風を受けながら奇妙な感覚にとらわれていた。

僕がもし、右手のロープを放せば落ちて死ぬのだろう。

死と隣り合わせの状況で僕は今何をしている？

両親に遺言を書くわけでもない、恋人に別れを言っている訳でもない。

シャツにアイロンをかけて皺を取つてているのだ。

僕は急におかしくなった。

だつて、考えてみる。落ちたら死ぬかもしれない崖に張り付いてアイロンかけをしているんだぞ。

多分、日本中のどこを探しても今、この時点でこんな醉狂をしているのは僕しかいないんだ！

体の腹の奥底から、今まで感じた事の無いような熱い感じが溢れてくるのがわかった。

多分、これが生きている事を感じているって事なんだろう。

僕がアイロンをかける横で先生がカメラのファインダーを覗いている。

カメラのレンズは額に汗を浮かべ、必死にアイロンをかけている僕に向けられ、小気味のいい音立ててシャッターが切られる。

僕は腹の奥から湧き上がつてくる衝動を抑えられず、気がつけば叫んでいた。

「オオオオオオオオオオオオオオオオ！」

僕の叫びが世界を包んだ。

目の前が真っ白になつていいくような錯覚を覚えながら僕は叫んだ。

第一章 「アイロンと僕』（後書き）

昔の自分が書いたものを見ると、苦笑しながらも「こんなのが書いたら書けるんだ？」と不思議になることも、しばしば。

第一章『アイロンと風』

「ええ！辞めるの…もつたいない」

「当たり前だろ。あんな部活、命がいくつあっても足りやしない。それに、あんな場所でアイロンかけても意味ないし」

あれから三田が過ぎ、監校し嶋本先生が作ろうとしていた部活を辞める旨をみかに伝えたところ、大仰に驚かれた。

「なんで？結構楽しそうだったじゃん」

「実際やつてみてからそいつ聞いてくれ」

みかは何か不思議なものでも見るよつとに僕を見つめていた。

「真一に絶対合つてゐるあのスポーツ」

アイロンがけがあつているところのも心底馬鹿にされていふよつで腹が立つ。

「冗談じやねえよ。あんなん死んでみる。葬式でみんなに別の意味で泣かれるよ」

「あー、それはあるかも、なんあんなアイロンがけで命かけたんだろ？ 馬鹿馬鹿しくて泣きたくなつてくるつて。うん、約束する。私が一番泣いてあげるよ。笑いながら」

みかは面白そうに笑う。

「でも、今までまたぐダラダラしてゆつかはマシなんじゃない？」

「それでも嫌だ」

僕は不機嫌な顔を隠すことなく、そう突っぱねた。
今日は授業も終わったことだから、これから家に帰つてダラダラする事に決めた。

あんな体験をした後でわかる事だが、安穏とした日常に甘んじるのもまたひとつ的人生の形である。

僕は鞄を持って学校を後にした。

「そんな事言つて、絶対あんたはアイロンしだすわよ」

僕は背中でみかの言葉を受け流しながら、学校を後にした。
僕は家につくとそのまま自分の部屋に引き篠もり、ゲーム機のスイッチをつける。

同級生に借りた、最近出たばかりのロールプレイングゲームでの超大作だ。

これで少なくとも三時間は潰せる。
だが、どうしてだろうか三十分もしないうちに僕は飽きてしまつた。

なんだろう、やっぱり満足しない。

前みたいな、何か胸の奥に轟をしたような、そんな感覚だ。

僕は小腹が空いたので、居間に降り、テーブルの上のみかんを食べる。

その時、たまたま、そう、たまたま和室にあるアイロンとアイロン台が目に入った。

親父のシャツだらけ。

純白のシャツがアイロン台に放り投げられており、その横にアイロンが立てられている。

僕はそのアイロンに手をとつてみる。

スイッチを入れてシャツの上に押し当てる。

アイロンの下のシャツに刻まれた皺が、アイロンを滑らすとまるで魔法にかかつたみたく消えてゆく。

「あんた何やってんの？」

後ろから突如母親に声をかけられ、僕はびっくりしてその場を飛びのいた。

「真一アイロンかけてくれてたの？珍しいね」

「いや、やりかけだつただろ？ちよつと氣になつて」

「ふーん、変なの」

僕は適当に言い繕い、その場を離れた。
どうかしてゐる。外に出よう。

僕はジャージに着替え、ランニングショーツを履くと外に出た。
なんだか無性に走りたくなつた。

体を思いつきり動かしたい。

最初は早歩きくらいのペースで走り出す。

徐々にペースを上げていく。

そのうち息が苦しくなり、肺が激しく酸素を求めて喘ぐ。
僕は公園まで走りきる。

公園につく頃には僕はぜいぜいと息を切らし、そのまま砂場に倒れるように寝転んだ。

しばらくは砂場に寝転んだまま、ぜいぜいと息を切らし、空を見上げていた。

空は憎たらしいまでに遠く、青い。

吸い込まれそうなくらい遠い空を見上げていると僕と空との間に、子供の顔が入った。

自分の繩張りで寝転んでいる変な大人を見て不思議に思つてゐるのだろう。

「なにしてるの？」

「なにしてるんだろうな」

僕は息も切れ切れにそう答えた。

「へんなの」

「へんだな」

そうだ、まったくおかしい。

この三日間、家に帰るとこうなる。

何か、こう、頭の芯から熱くなり、泣きたくなる。

子供はしばらく僕を眺め、僕が砂場からどく事が無いのをわかり、走つて立ち去つた。

僕は何をしているのだろう。

こんなところで大の字になつてたつて仕方ないのに。

その時、空からバスケットボールが降ってきた。

それは僕の鼻の上にまっすぐに落ちると、僕の皿の中に星を降らせた。

遅れて感じる鈍い痛み。

「……いつてえ」

ジンジンと痛む鼻を押さえてよろよろと立ち上がる。

僕は転がるバスケットボールの持ち主を探し辺りを見回すと、制服を着たみかが立っていた。

学校帰りなんだろう。

みかは地面を転がつているバスケットボールを拾い上げるとため息をつく。

「ナイツ シュード。かなり痛かつた

「そりゃどうも」

みかは僕をみて呆れ果てたような顔をしていた。

「何してんの？」

「アイロンかけるように見えるかよ」

「見えないわよ

僕はようようと立ち上がる。

丁度いい。

僕はみかに言った。

「みか、丁度いい。つきあえよ

みかは驚いたように田を見開き、顔を赤らめると少し俯く。

「真一の気持ちは嬉しいけど遙に悪いよ

「馬鹿野郎。違つて、運動すっからけりと付き合えよ」と意味だ

「……あつそ！」

僕がそう言つとみかはバスケットボールを僕に思いつきり投げつける。

僕はそれをかるうじてキャッチするが、思いつきり手が痺れた。腕に走る痛みに顔を歪めるが、僕はそれを地面に叩きつけ、ドリブルを始める。

そして、公園の端に設けられているバスケットボールのハーフコートにドリブルしながら駆け込むと、僕はゴールに向かってシュートする。

ドリブルシュートだ。

ボールは「ゴール板の上でバウンスし、ゴールのリングに弾かれて地面に落ちた。

だが、そのボールはすぐにみかに拾われ、弧を描いてリングの中に吸い込まれるように落ちる。

さん、と網を揺らしボールが落ちる。

僕がみかを見やるとみかは得意そうに笑っていた。

「ナイツシューでしょ？」

その顔がとても、眩しく、また、僕を苛立たせた。

僕は鼻の頭を親指でこすると、ボールを拾い上げるとみかに投げた。

みかはそれを胸の前で受け止めると、地面にタムタムと叩きつけ、ドリブルを始める。

そして、挑戦的に僕を見る。

僕にボールを奪えと言っているようだった。

僕はそのままみかに一直線に走る。

みかは僕の前で体を左右に振り、僕が一瞬怯んだその隙に僕の脇を通り抜け、ゴールに走る。

僕が振り向いた時には、みかはゴールに向かつてジャンプしていた。

みかの手を離れたボールが綺麗にゴールに収まる。

そして、風の中に舞う羽のように軽やかにコートに降りたみかは憎らしいほどに眩しかった。

みかがコートを転がるボールを僕に投げてよこす。

僕はそれを受け止めると同じようにドリブルを始める。

みかが次の瞬間には僕の前に立っていた。

僕は体を半歩さげ、自分の後ろにボールをかばうよこしてみかの横を抜けようとする。

みかは巧みに体をさばいて僕の前に立ちはだかる。僕が必死にみかを抜こうとするが、みかはそれを阻む。

その表情には余裕の笑みがあり、僕はそれが無性に腹立たしかつた。

「……っくそ！」

僕はみかを押しのけて抜く。

だが、その時にバランスを崩し地面に倒れそうになる。

僕は地面に倒れこみながら、やけくそ気味にシュートを放つが、ボールはゴール板の上で弾むと、そのままコートの上に落ちた。僕は地面に転がると、得意げな笑みを浮かべるみかを見上げた。

「真一がバスケで私に勝てるわけないじゃん
「うるせえ」

僕は立ち上がり、再び、みかに挑んだ。

その後、何度も僕はみかに挑んだがことじことく負けさせられた。どれくらい僕は負け続けただろう。

もう、気がつけばあたりは暗くなっていた。

みかはもういい加減呆れたのだろうか、コートの上で倒れている僕を眺めながらボールを地面にタムタムとついている。

「真一、もう帰ろいよ」

公園の街灯が淡く輝く。

蛾がどこからかやってきて、街灯にたかる。

僕は鉛のように重たい体をひきずるように持ち上げ、立ち上がる」とバスケットのゴールに支柱にしがみつく。

靴を脱ぎ、靴下を脱ぐ。

「真一？」

みかが心配そうに僕を見るが、僕は構わずバスケットの「ゴール」の支柱にしがみつくと、それをよじ登り始めた。

「真一！危ないよ

僕はそれに構わらず「ゴール」の上によじ登る。

僕は「ゴール」の頂上まで上りきると、「ゴール板」の上に腰かけ、リングの上に足を乗せた。

そして、僕はそのまま腰を上げる。

直径2センチにも満たない鉄のリングの上に立ち、軋む「ゴール板」に僕は何か落ち着きを感じている。

「真一！降りなつて！壊れたら危ないよ！」
「……そうだな」

僕は地面で心配そうに僕を見上げるみかから田を逸らし、空を見上げた。

今にも壊れそうな「ゴール」の上で空を見上げるとそこには僅かに星が浮かんでいた。

僕はとりあえず、叫んで見た。

「ウオオオオオオオオオオオオオオ！」

みかがびっくりして何かを言っているが僕には聞こえなかつた。僕は何かどうしようもない、憤りを叫ぶ事でしか表す事ができなかつた。

「どうしよう……みか

呟く僕に、みかが心配そうな顔を向ける。

「俺……どうしようもなく、アイロンかけたい」

ふと、こぼれた言葉はどうしようもないまでの僕の本音だった。そう、遠藤真一は、ただ、今、この瞬間ににおいて生きている証が欲しかったんだ。

僕は次の日の放課後、嶋本先生のところに足を運んでいた。

どうしようもない思いが胸の中で渦巻いていた。

それを止める術は僕には無かった。

夕日の差し込む誰も居ない教室。

嶋本先生は一人、明日の授業の用意をしていた。

嶋本先生は何かを決意した僕の目を見て、開いていた教科書を閉じた。

先生は僕の方を見て、全てをわかつたような、そんな目で優しく聞いてきた。

「遠藤、アイロン……好きか?」

僕は泣きそうになりながらも答えた。

「先生、俺、アイロンかけたいっす……」

差し込む夕日の中、先生は優しく笑っていた。

僕には迷いはもう、なかつた。

先生はがつしりと僕の手を握る。

僕はその手を握り返した。

次の日以降、僕の生活は一変した。

「つしゃあつ！」

まず、朝早く起きると早朝のランニングに出る。

一時間、大体十キロ前後走ると今度は公園で筋力トレーニングを始める。

腕立てを五十回、腹筋背筋を五十回、そして、インディアンジャンプを四十回、これを三セット繰り返す。

「真一……もう駄目」

トレーニングに一緒にいてくるみかはいつも途中でギップアップする。

そして、家に戻り体が暖かいうちにプロテインで朝食を探る。軽くシャワーで汗を流すと、登校する。

僕のトレーニングに付き合つみかは、もうこの時点でもうふらふらしているが、僕も最初の頃は結構疲れた。

そして、授業中に少し休み、放課後、今度は嶋本先生と特別メニューをこなす。

グラウンドの隅にあつたプレハブ小屋を改修し、そこを部室として使用し、先生から色々な講義を受ける。

まだ、正式な部として認可されていないアイロン部には立派な部室等無い。

「いいか、遠藤、エクストリームアイロンは危険な場所でやるから意味がある。そして、危険になれば危険になるほど死の可能性が高くなる。だが、正しい技術と体力、そして、万全の計画をもってすればその危険はコントロールできる」

それが嶋本先生の口癖だった。

嶋本先生は聞くところによると先生になる前は消防のレスキュー隊員だつたらしく、ロープを使ったラペリング技術や、スキュー・ダイビングの技術に習熟しており、僕は先生といふときはもっぱらロープの結び方や、ダイビング機材の扱い方を学んだ。

先生が居ないときは、みかが持つてくるバスケ部のユニフォームでアイロン掛けの練習をしたりもした。

そして、夕方、帰宅するとバイクの免許を取るために、教習所に通つた。

親を説得するのは大変だったが、親父と殴りあつた結果、僕の真摯さを認めて通うことを許してくれた。

僕がへとへとになつて家に帰り着くのは、いつも夜九時を過ぎてからだ。

そのまま泥のように眠り、次の日の朝を向かえ、また、同じ事を繰り返す。

それはとても辛かつたが、逆にそれが誇らしかった。

それだけの事をできている自分が、また、着実に体ができていく自分が物凄く充実しているように思えた。

僕が嶋本先生の下でアイロン部として活動するよつになつて二週間が過ぎた頃、僕はバイクの免許を取得し、先生が昔乗っていたCB400を貸してもらい、エクストリームアイロン部となつて初のエクストリームアイロンを実施する事になつた。

誰もいない教室で先生が黒板にバイクと車の絵を書いて説明する。

「いいか遠藤、今回のHクストリームアイロンは走る車の上にアイロン台を置き、そこにシャツを固定する。そして、バイクで併走するアイロナーがアイロンをかける。この時、気をつけなければならぬのがスピードの調整だ。今回は時速四十キロで固定する。時速四十キロで進行すると秒速約一一メートルになる」

先生が黒板の上に数字を並べる。
僕はその数字を眺めながら答えた。

「となると、この実施予定地にある五百メートルの直線道路ではアイロンをかける時間は四一秒しかない」

「そうだ、だが、実際には加速や写真撮影も含めるとアイロンを当てられる時間は一十秒あればいい方だと考えた方がいい」

「しかし、先生、僕がアイロナーを担当するとして車の運転は先生が実施する事になりますよね？ そうすると、写真撮影は誰がする事になるんですか？」

「うむ、非常に頼みづらいのだが……」

僕と先生の視線がたまたま廊下を通りすがつたみかに向けられた。僕に教室の中に引きずり込まれ、事情を説明されたみかは驚く。

「えええ！ 私があ？」

「大丈夫だ。オートフォーカス式のデジタルカメラだ。横の緑色のランプが点滅したらシャッターを落とせばいい」

「でもバスケ部で忙しいし」

なんとか断りつとするみかに対して僕が食い下がる。

「みか、お前アイロン部のマネージャーだろう？ いつも僕がバスケ部のユニフォーム洗濯してアイロンかけてやつてるじゃないか」

「もう辞めます！」

叫んで、みかが困ったような顔をする。

「あんたもどうかしてるわよ！何で急にこんな馬鹿な事に夢中になってんの。信じられない。バカじやん！」

「馬鹿な事なもんか。みかもやつてみればアイロンの素晴らしさに気づく」

「ほんとうに信じられない」

みかは首を左右に振り、必死に断ろうとしたが、僕がしつこく頼み込んだら折れた。

「……ただ、カメラのシャッターを押すだけだからね」

憮然とするみかを放つて置き僕は先生と計画を煮詰める。

「……先生、シャツは何色のを用意したらいいですか？」

「一般的には白のシャツが多いが茶色系のカラーシャツの方が実は写真映りはいいんだ。できればカラーシャツの方がいいが、無い場合は白で大丈夫だ」

僕と先生は再び、細部の調整にまつわる話を再開する。

そうして、今現状で万端といえる準備をして、初のエクストリームアイロンに望む事になった。

決行の前の日、僕は和室にあつたアイロンを充電にかけるとアイロン台を撫ぜる。

多分、嬉しそうな顔をしていたのだらう。
それを後ろで見ていた母親が首を傾げる。

「真一何やつてんの。あんた気持ち悪いよ

「ふむせい。構つものか。

僕はその日の夜、興奮してあまり眠れなかつた。

遠足に向かう前の日のあの期待に膨らむ胸の高鳴りがアイロン台
を抱えて眠る僕の胸を締め上げる。

殆ど一睡もできないまま、僕は朝を迎える事になった。
だが、しっかりと意識は落ちていたらしい。

「真一、起きてよーもうすぐ先生との約束の時間だよー」

いつ、眠ってしまったのだろう。

ふと気がつけばみかがパジャマ姿の僕の襟首を掴んでがくがく
と揺さぶっている。

時計を眺めていると既に十一時を回っている。

冷や水を頭からかけられたように意識が鮮明になり、僕は叫ぶ。

「やつべえ！」

「何やつてんの真一ー早く着替えてー」

僕はそこにもかが居るにも関わらず着替え始める。

「ばか！私が出てから服脱いでよー」

みかは顔を赤らめながら部屋を出る。

僕はそんなことに構わずジーンズを履くと、この間先生から貰つ
た皮ジャンに袖を通した。

溜めていたお年玉をはたいて買ったフルフェイスのバイクのヘルメットを二つ持ち、外で待っていたみかに片方を渡す。

「真一ーアイロンは?」

「あ、忘れてた」

「何やつてるのよもー」

苛立たしいみかの声を聞きながら僕はベッドの下に転がっていたアイロン台を掴む。

そして、急いでトントリとシャツとアイロンを手に右往左往している母親がアイロン台を抱えている僕をみつける。

「真一ー、あんたがアイロン台持つてつたの?お父さんのシャツにアイロンかけるからアイロン台返しなやー」

僕は親父のシャツとアイロンを母親の手から奪つと

「母さんがアイロン持つてたのかよ!今日使うのに昨日充電しといたんだから返せよ!親父のシャツも俺が使つからいいよー」

と、はたから聞いていたら訳の分からない日本語を言い残してそのまま家を飛び出した。

「ちよつと真一ー待ちなさい

「『めんなさいおばさん。説明はまた今度です!』

みかが母親に頭を下げながらもたもたしているのを急かすと僕は家の横に止めていたCB400のエンジンをかける。

一発で小気味良く吹き上がったエンジンだが、軽くアクセルを開き勢いをつける。

アイロンとシャツを皮ジャンの中に入ると、アイロン台を背負う。

ヘルメットを被り、後ろにみかが乗ったのを確認すると僕はキャスターを上げてクラッチを繋いだ。

アクセルを開き、バイクを加速させる。

みかが僕の背中から腕を回してしがみついてくるが、背中を圧迫するのはアイロン台の硬い感触だ。

アイロン台がなければ絵になるのだろうが、それが間に挟まっているかぎり、その絵は少し滑稽だ。

僕はアクセルを開き、ギアを徐々に上げていき先生の待っている約束の場所まで一気に駆け抜けた。

僕は軽く法定速度を超えて加速する。

「真ーーちょ、早い早い！」

「大丈夫だつて。これからもつと危ない事するんだから」「きやーー怖い怖い！」

後ろで悲鳴をあげるが僕はそれに構わずアクセルを入れた。

「死ぬ死ぬ死ぬ。怖い死ぬ！」

その悲鳴も、そろそろ風の音で消えそうだった。

そこはあまり車通りの少ない山道だった。

なだらかな登りになつてゐる山道は今回の舞台にはつづつけだつた。

車もすくなれば多少対向車線にはみ出しても事故の危険はそれだけ少ない。

それに、なだらかな登りは多少アクセルワークを間違えても速度を出しすぎる事は無く、速度の調節をするには最適だった。

山道に設けられた休憩所に先生は居た。

約束の場所に着いた時、既に先生は既に準備が完了していた。真っ黒なスカイラインGT-Rに頬杖をつきながら僕が来るのを待つていたのだろう。

僕がつくと先生は軽く手をあげる。

僕はそれに対して中指と人差し指を立て、敬礼する。

バイクを車の横に止めると、みかはよろよろとバイクから降りる。

「真一、帰りは安全運転で帰ろう? でないと命がいくつあっても足りないよお」

情けない声をあげ、みかは地面に座り込む。

ヘルメットを脱いだみかに嶋本先生はカメラを渡す。

「使い方はこの間教えたとおりだ。所定のポイントで俺と遠藤が走つてくるのを見て写真を撮ってくれ」

「どんな写真を撮ればいいんですか?」

「アイロンとシャツと遠藤が格好よく撮れてればいい」

えらく端的な説明にみかは不承不承納得しながらよろよろと歩いていく。

みかが遠く歩いていき、手を振った。

撮影ポイントに到着したのだ。

僕と先生はお互いを見合せると、お互いが頷いた。

先生が号令をかける。

「これより! エクストリームアイロンを実施する!」

「つ了解ツ!」

鋭い気迫でそれに答える。

「アイロン台、シャツ用意！」

先生の号令を受け、僕はアイロン台を先生のスカイラインのルーフの上に固定する。

ご丁寧にスキー・キャリアーを改造したものが取り付けられており、それがアイロン台をがっしりと固定した。

そして、更にそのキャリアーに親父の茶色のカラー・ワイシャツを挟み、固定する。

「アイロン台、シャツ、準備よおしつ！」

「ヘルメット装着！」

「ヘルメット装着つ！ よおしつ！」

僕がヘルメットを装着すると先生は車に乗り込む。

「エンジン点火あつ！」

先生のGTOのエンジンが唸る。

「エンジン点火あつ！ 準備よおしつ！」

僕のCB400がそれに答えた。

「アイロン、用意ッ！」

「アイロン、準備よおしつ！」

僕の手の中でアイロンが静かに僕の手の中で熱を持つ。

ゆらりと熱気がアイロンから滲み出る。

僕は今にもクラッチを繋ぎ、アクセルを解放したい衝動を必死に抑え、喉の奥から迸りそうな何かを堪えていた。

先生が僕に向けて拳を突き出し、親指を立てる。

僕も、親指を立ててにやりと笑つた。

ると不敵に笑う。

「行くぞ遠藤……」

「遠藤真一準備よおしお」

僕はアクセルを豪快に噴かして言葉無く答える。

「エクストリイイム」

確かにそれは僕の体の中で渦巻き、喉の奥までこみ上げていた。

「アイ」「オオオシ!」

獣じみた咆哮が僕の喉から迸る。

まずは、先生のGTOのか暴力的に加速する。

タバコを削り 白
発進の際
タバコを削り 白
タバコを削り 白

タイヤが叫び声をあげながらアスファルトを蹴飛ばすとGTOは風を切つて飛び出しだ。

その後を追う獣のようにCB400が咆える。

エンジンが獣のような唸り声をあげて咆える。

次の瞬間、首根っこから後ろに思い切り引き倒されそうな暴力的

な加速度が僕の体を引っ張る。

僕は必死にハンドルを握り、しつかりと股にタンクを挟み台風のような加速度をねじ伏せる。

先を走るGTOに僕のCB400は間を置かず追いついた。僕はブレーキを踏むことなく、体を左右に振り、バイクを右に、左にと揺さぶる。

あわせてタイヤが白煙を上げ、グリット痕をアスファルトに刻みながら咆え叫び、スラロームを描く。

GTOが所定の速度になつた後、僕はバイクをその左横につける。微妙なアクセルワークで一定の速度を保つ。

そして、GTOとCB400があと僅かで触れるところまで接近する。

僕はあの絶壁で感じた恐怖が背中を駆け抜けるのを感じた。

僕が次の瞬間、ハンドル操作を誤りGTOと接触したらまず間違いない僕は無事ではないだろう。

そして、先生だってその責任を負うだろう。

前に見たバイク事故の運転手のように膝の骨が肉を裂いて現れる。そんな恐怖を目の前に感じながら僕は最高の充実感を得ていた。僕は右手に掴んだアイロンをGTOに伸ばした。

先生はちらりとサイドミラーで僕の様子を確認し、親指を立てた。

僕は口から迸るそれを留める術を知らなかつた。

「エクストリイイイムアイロオオオオオオン！」

熱くたぎつた鉄の塊をシャツに押し付ける。

それは茶色のシャツの上で迸り、皺を伸ばす。

世の中の全ての不条理を消し去れるような凄まじいエネルギーの奔流を押し込んだアイロンがアイロン台の上で、シャツの上で迸る。

「アイロオン、ツイヤアアアアア！」

僕は叫びながら、駆け抜け、ただその瞬間、自分が生きている証を、皺のなくなったシャツと、余熱の残るアイロンに見出していた。

次の日、僕が誰も居ない屋上で弁当箱を開いて遅い昼を食べいるとそれはやつてきた。

隣のクラスの水下学だ。

水下は屋上のドアを開けて一直線に僕のところに駆け寄ってきた。

「遠藤！お前、凄い事になつてゐるぞー！」

「あん？」

僕は弁当箱の裏についた海苔を箸ではがしながら素つ頓狂な声を上げた。

水下はずつと興奮したまんまだ。

「お前、アイロン部つて作るんだって？今、中庭でバスケ部の金井と二ノ宮がビラ配つてるぞっ？」

「つづそー！」

僕は全身の血がさつと引いていくのを感じながら立ち上がる。

屋上のフェンスに駆け寄り、中庭を見下ろす。

そこにはグループを作つて昼飯を食べている生徒に、片つ端から声をかけながらビラを配つているみかと二ノ宮が居た。

というより、みかが無理矢理二ノ宮を引きずり回しているよう見えた。

「あーいつ……」

僕は舌打すると中庭に走る。

「アイロン部でーす！入部希望者募集しますー！」

「入部希望の方は一年A組の遠藤真一までお願ひしますー」

みかは通りすがる生徒にも片っ端から声をかけて回り、ギラを配つていて。その後ろで二ノ富がペニペニと頭を下げて回る。僕は一人に近づくと不機嫌な顔を隠そうともしなかった。

「なにやつてんだよ」

「なにって……部員の勧誘してるんじゃない？マネージャーとして当然でしょ？」

「バスケ部の正部員だらうお前は」

「でもアイロン部マネージャーも兼務してるもん。ねえ？遙？」

「はい！」

二ノ富が嬉しそうに頷く。

僕はこめかみの辺りを押さえ、難しい顔をしながら二人が配つているビラを見る。

そこには一番最初に先生とやつた断崖絶壁でアイロンをかけている僕の姿がプリントされており、そこでつかく「さわやかな青春」とシャツをあなたに」とロゴが斜めに入っていた。

そして、同じくらいの大きさの字で「金井クリーニング」とあつた。写真を撮るのを嫌がった昨日と態度が違う原因はこれが。そう、みかの家はクリーニング屋だった。

「お前、何勝手に人の写真で広告作ってるんだよ」

「商店街のおばちゃんたちには凄い好評だよ。いい男だつて

みかは悪びれる風もなく、笑うとまた、近くを通りすがつた男子生徒に声をかける。

「あ、すみませーん！」

僕は頭が痛くなるのを感じながら、『これから起りぬであるアトマブルを予想した。

「やつぱり……」

僕が放課後、ロープや資材の扱い方を練習する空きのプレハブ小屋に行くと、そこには山積みされた運動部の練習着が置いてあった。倒れてくればそのまま僕を飲み込むのではないかと思う程積み上げられたそれは、北星学園の生徒の青春の汗を吸つて、酸っぱく香つていた。

せめて洗濯してからこっちに持つて来いと言いたくもあつたが、みかが配つたビラが悪い。

これじゃあまるでクリーニング屋じゃないかと僕はつぶやいた。僕に遅れて入ってきた嶋本先生も苦笑を浮かべた。

「これじゃクリーニング屋だな。正式に部として認められたらアイロンだけじゃなくて洗濯機も要求しないとな？」

『冗談とも本気ともつかない事を言つ。

僕はため息をつくと、山になつた洗濯物を眺める。さて、どうしたものか。

僕が思案に暮れていると、そのプレハブ小屋に誰かが入ってきた。

「あの、アイロン部の部室つけていいよかつたんですか？」

「うん、ああ? 一ノ宮じゃないか」

そこには一ノ宮が居た。

いつもみかと一緒に居る一ノ宮が一人で居るのはシチュエーション的には珍しかった。

だが、僕はそれよりアイロンヒアイロン台を抱えているのに気がついた。

「一ノ宮、それ？」

「はい！先輩、私、アイロン部に入部します！」

「はあ？ 一ノ宮はバスケ部だろ？？」

「いえ、今日バスケ部は正式に退部してきました！私、アイロン部の正部員になります！」

一ノ宮は口早にそうまくしたてた。

なんだろう、一ノ宮ってこんな子だったっけ？

なんか、こう、もっとおとなしい子だと思っていたが、違ったみたいだ。

「嶋本先生……女子にはちょっと危ないんじゃないじゃないですかね……」

「いいんじゃない？ アイロンかけるのに男も女も関係ないだろう。今男女差別とかでうるさいけど絵的には女の子がアイロンをかけている方が絵にはなるからな？」

先生はあくまで楽天的だ。

僕は少々不安になりながらも、認めざるを得なかつた。

「遠藤真一ファンクラブ第一号として、アイロン部に入らない訳

にはいかないですかー。」

「はあ！？」

今度こそ僕は驚いた。

「知らないんですか？先輩、今一年生の間で人気なんですよ？ホラ、毎朝こつそりランニングしてるじゃないですか？あの姿に憧れる人、多いみたいですよ」

確かにこつそりランニングはしているが、それを知っている人が居る事に驚いた。

「ま、私が言いふらしたんですけどね」

言つて二ノ宮が笑う。
その直後だ。

部室のドアを開けて水下と、あと一人誰か知らない男子生徒が入ってきた。

「二ノ宮さん、洗濯機ここでいいのかな？」

「あ、伊藤先輩、水下先輩。それ、外に置いておいて下さい」

思い出した。水下と一緒に居る男子生徒は三年A組の伊藤新吉先輩だ。

確かに、校内の学力テストで三年生で一番を取つた人だ。新聞部の作った校内新聞「北星タイムズ」で見たことがある。

小さな眼鏡が、その丁寧な口調とあいまつて爽やかな印象を与える人で、うちのクラスの女子にも人気が高かつた筈だ。

しかし、水下が一緒に居る事も不思議だった。校則で指摘されている茶髪に、ピアスが伊藤先輩と正反対なベクトルに位置する、典

型的な不良学生だ。確か、軽音楽部の部屋によく入り浸つてた筈なのだが。

「水下、お前どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたも、入部するに決まってるだろ？ アイロン部でお前だけ女子にモテモテになるなんて間違ってるじゃないか。何でお前のファンクラブが出来てるんだよ」

「どうやら一ノ宮の言つとおり、本当に僕のファンクラブが出来ているみたいだ。」

「一体どのくらいの規模のものか気になるが、今はそれどころやなかつた。」

「それで遙ちゃんに入部したいって言つたらどうあえず伊藤っちゃんと一緒に洗濯機運んでくれつて言われてよ？」

「どうも」

伊藤先輩は人のよさやうな笑みを浮かべて僕に対して頭を下げた。

「ええっと、伊藤先輩ですよね？」

「あ、今度アイロン部に入部する事になりました。遠藤部長。よろしくお願ひしますね」

校内一の秀才にそう言われて何かむずがゆく感じたが、それよりも、伊藤先輩も入部する気でいるらしいという事がわかつた。

昼にビラを配つて、その放課後にこれだけの人数が集まつた。部としては好調なのだろうが、みんな、アイロン部が何をするところかわかっているのだろうか？

一ノ宮はこの間、僕が絶壁でアイロンをかけているのを知つてゐるからいとして、他の一人は分からない。

「えっと、水下も伊藤先輩もアイロン部って何するところかわか
つてる？」

「あれだろ？クリーニング屋の真似事だろ？男の中にある母性。
それが運動部の女子にウケるんだる？」

と、水下。

「アイロンの歴史か何かを勉強する部活ですか？」

とは伊藤先輩。

僕は一応、二人に対しアイロン部がするのはクリーニング屋の真似事ではなく、また、アイロンの歴史を調べたりするものでもない事を告げ、そして、エクストリームアイロンについて簡単に説明した。

「はあ！そんなの聞いてねえよ！ばっかじやねえの！」

「それは危ないですな」

水下と伊藤先輩は思つたとおりの驚きを顔に浮かべる。
水下あたりはもう帰り仕度をしてくる。

「そんなアブねえアイロンがけやるなんて遠藤お前馬鹿じやねえ
の？俺は抜ける」

「水下君はやめるんですか？」

伊藤先輩は残念そうに水下を見る。説明を聞いても伊藤先輩は残
る気でいるみたいだ。

「女の子にモテると思つて入ろうと思つたのに説明を聞いたらた

だの馬鹿じやねえかよ、やつてられつか

水下はさう残してプレハブを出て行ったとした。

その時だ。

「真一ーー遙にちに来ていなー?」

みかが勢い良く部屋に走り込んできて、部屋を出ようとした水下
と思いつきりぶつかつた。

「……つたあ

額をぶつけて水下は仰向けに倒される。

骨と骨のぶつかりあう、がつんという大きな音が鳴っていた。
みかは額を押さえながら涙目になりながら、僕を睨む。

「真一ーー遙に何を吹き込んだのーー今日部活に出てみたら遙が退
部してアイロン部に入つたつて言つてたよー!」

「僕もびっくりしてるよ

当の本人である一ノ宮は僕の後ろに隠れるよつにして、みかを見
る。

「あの、金井先輩怒ります?」

「なんで私なんの相談も無いのよー?」

どうやらみかは怒つていいよつだ。

そりやそうだろう、いつも一緒に居たのだ。落ち着いていなけ
れば、裏切られた感覚もあるだろつ。

「……でも、決めたんです」

二ノ宮はこいつもの二ノ宮らしくおとなしく控えめな、しかし、それでもはつきりとそう言った。

みかは何かを二ノ宮に言おうと口を開く。

二ノ宮は肩をすくめ、その形相に怯えるが、しつかりとみかを見つめていた。

この二人の間に何があるのかはあんまりよくわからないが、みかはそこで何かを二ノ宮に感じたようだ。

「……わかったわ。納得はいかないけど納得するわよ。ただし、私もマネージャー兼務してるんだから遙に何かあったら、真一！あんた責任取つてもらうからね！」

みかは僕を睨んでくる。僕は訝然としないものを感じながらも、とりあえずはのろのろと起き上がる水下に手を貸した。

「水下、大丈夫か？」

「……ってえ……金井がマネージャーって本当かよ？」

「ああ、とりあえずはバスケ部と兼務らしいけど……」

水下は複雑な顔をする。

「金井って……一年女子ランキング一位の？俺、もつちゅうとアイロン部に居てみよ！」

そんなランキングがあるのは初耳だった。

僕は一抹の不安を感じながら、この面子を見渡す。

昼の騒動からほんの僅かで集まつたこのメンバーが当面のアイロン部のメンバーなのだろう。

僕が嶋本先生を見ると、先生はテーブルの上に座つたまま満足そうな笑みを向けてきた。

「頑張れよ。部長」

「嶋本先生……」

いつの間にかアイロン部は形となつており、僕はその部長の座にすっぽりと収まつてしまつていた。

「じゃあ、部長、今日はまず、どうしますか？」

二ノ宮が僕に対し何をするかたずねてきた。

水下や伊藤先輩、みかが僕が何を言つのか待つっていた。

僕は咳払いすると、とりあえず部室の隅に押しやつた洗濯物を指差した。

「とりあえず、コレ、なんとかしよう。でないと臭くてどうじょうもない」

青春の汗を吸つた、洗濯物の山は酸っぱく黄色い匂いを徐々に部室の中に広げていた。

第二章 “アイロンと仲間”

「エクストリームアイロンは一九九七年、イギリスのレスターといつ町で生まれた。趣味であるロッククライミングの最中に平凡でないアイデアとして、アイロンがけを取り入れた事で始まったスポーツだ。ウェブサイト上で普及し、それが現在に至る」

アイロン部の面々は放課後、部室に集まるとき嶋本先生の軽い講義を聞くと次に、トレーニングを始める。

作業着に着替えると、嶋本先生を先頭にし、一列に縦隊を組む。スリングや、ハーネス、ヘルメットをつけ、更にフォースレスキューというレスキュー隊が使う、これ一本で車一台が壊せますという売り文句のハンマー・ピックが一体になつた工具を背負つてランニングを始める。

「ツチヨーツチヨーツチヨーツトーレ！」
「ツチヨーツチヨーツチヨーツトーレ！」

本当は歩調、歩調、歩調取れと言つてゐるのだが、これを声の限り叫ぶことになる。先生が叫んだ後にみんなが続いて叫び、歩調を合わせる。

「ツチヨーランシーツチヨーランシ！」
「ツチヨーランシーツチヨーランシ！」
「エクストリーム！」
「アイロン、イヤアッ！」

ここまで掛け声をかけると一番最初に叫ぶいわゆる前半呼称者が

先生から僕になり、順に部員で回しながら三十分近く走る。

これは先生がレスキュー隊員時代にやつていたランニング方法で、装備を抱えたまま大声で叫びながら走ると相当疲れる。

だが、実際、断崖にぶら下がつたりすると隊員同士で距離が離れたり、悪天候の為、声が通らなかつたりする場面を想定すると、普段から最悪の状態で声を出せる訓練をしておかないと、いざというときに危険を知らせあう事ができないからこのように訓練するらしい。

おかげで、はじめの頃はみな喉がつぶれ、二ノ宮が呼吸困難に陥つたり伊藤つちゃん……伊藤先輩はそう呼ばれる方がいいと言つ……なんかがお昼を戻したりしていた。

それが終わると今度は補強運動をする。

補強運動といつても嶋本先生レベルの補強運動であり、普段から鍛えてる僕でも少々厳しい筋トレであり、他の部員に対しても酷としかいいようの無い内容だつた。

腕立てをするときは部員の首の上に自分の足を乗せ、四人でスクウェアを組んで実施する。女子である二ノ宮あたりは目の端に涙を溜めていたが、泣き出さず、よくこんな厳しいトレーニングに耐えていると思う。

それが終わり、クタクタになると、今度はロープワークの練習になる。

「もやい結びラン!、はじめ」

これも酷いトレーニングで一人でペアになり、片方が50メートルをダッシュした後、鉄棒にもやい結びをして戻つてくる。

そこで交代した相方が、ダッシュでそれを解きに行き、急いで戻り、相方の胴体にもやいを結ぶ。

それで遅かつた方がペナルティで腕立て伏せをする。

もちろん、結び方を間違えた場合も同じようにペナルティだ。

「アイロン部つてアイロンをかけるんじゃなくて、鉄の男を作る部活なんじゃねえの？」

水下がそっぽやくのも無理はなかつた。

僕らはあれから一度もアイロンに触つてないし、Hクストリームアイロンをやっていない。

二ノ宮や伊藤っちゃんあたりは部活が終わる頃にはふらふらになつており、みかが迎えに来て僕に対し

「なんでちやんと遙の面倒みないのよー。」

と拳を飛ばす事もしばしばあつた。

僕もみんなも徐々に疲れてきており、ストレスを溜め始めていた。

「のままではいけない」と思いながらも何にもする事ができずにつ時間がストレスを積み上げていつた。

そんな練習が一週間も続く頃、恐れていた事態が起つた。

「いんな部活やつてらんねえよ」

ロープワークをやつてこるとき、水下がついに音を上げた。水下はスリングを地面上に吊りつけるとそれを蹴つ飛ばした。

僕は怒つた。

「水下！スリングは一寧に扱えよ！網目に砂でも噛んでみろ！それ一本で一トンは支えれるものも、そのせいで弱つて切れたりするんだぞ！こぢりつて言うときに命を預ける相棒を粗末にすんなよ！」

「俺はロープワークや体を鍛えるためにこんなところに入つたじゃねえよ！アイロン部つたつてアイロンかけた事もねえし、女に

モテる訳でもねえし。やつてられつかよー！」

水下は僕の襟首を掴み、唾を飛ばしながら怒鳴った。

水下は女にモテたくてアイロン部に入つた訳で決してエクストリームアイロンをしたくて入つた訳じゃない。

むしろ、これだけのしごきがあつて、これまでついてきたのが不思議なくらいだった。

しかし、これとそれとは話が別である。

僕も最近、アイロンをかけれずにイライラしていたし、それより、不真面目に人生を生きている水下のような奴が嫌いだった。

何かとキャラキャラして鼻につく野郎だったし、こいつが未だに部活に残っている理由がみかがマネージャーで顔を出すからだった。

「これぐらいのシゴキで音をあげてんじゃねえよ。実際、絶壁でやろうがどこでやろうが危ないんだよエクストリームアイロンは。そこで僅かでもその危険を減らすためにこうやって訓練してんじゃねえか」

「俺は楽してモテれりやそれでいいんだよ」

水下が鼻で笑う。

ふざけた野郎だ。

かつとなつて、僕の口が水下を罵倒する。

「お前なんかモテる訳ねえだろ！何にでもすぐ飛びつくけどすぐ飽きて何でも乗り換えるじゃないか。軽音楽部だつて、サッカー部だつて結局長続きしないで辞めたんだろう？何か一つに本氣で打ち込んだ事あんのかよ！根性なし！」

言つてから、しまつたと思った。言い過ぎた。

水下が僕の顎に、拳を叩きつけ、がちんと火花が僕の目の前で弾けた。

「ありえねえ場所でアイロンかけてる馬鹿野郎にそんな事言われる筋合いねえよ！氣色悪いんだよてめえわ！」

言われて僕もかつと来た。

僕も水下の腹に蹴りを入れる。

水下はグラウンドに倒れ、頭を打ち付けたようだ。目をしばたかせ、僕を見て怒鳴る。

「やりやがったな遠藤！」

僕と水下は取つ組み合いその場で殴りあいをはじめめる。

「部長！水下君やめやう！」

「先輩、やめてください……わあ！」

二ノ宮と伊藤っちゃんが慌てて止めに入るが一人の声は聞こえなかつた。

たまたま通りかかったみかが仲裁に入らなければ僕らはいつまでも殴り続けていたかも知れなかつた。

「居なくなりやがれ！この根性なし！」

僕は吐き捨てるように水下にそう叩きつけた。

……僕は自分が打ち込んでいるものを否定されて凄く、腹が立つていたのだ。

水下の方が喧嘩慣れしていたのだろう。

僕が少し手加減したのが原因かもしれないが、客観的に見て怪我が酷かったのは僕の方だったみたいだ。

僕は必要ないと言つたのだが、みかは無理矢理僕を保健室に引っ張り込み、簡易ベッドに座らせると消毒液とガーゼを持ってきた。

「ホントに真一は心配かけるんだから！」

憮然とする僕の横にみかは腰掛けるとガーゼに消毒液を含ませると僕の右目之上に押し当てた。

熱を持っている右目の周りに冷たいガーゼが押し付けられ、鋭い痛みを感じて顔を引いた。

「真一、じつとしてなさい」

まるで母親みたく、みかは強く言つてガーゼで僕の目の周りを拭いていく。

どうやら、目の周りが切れていたようだ。白かったガーゼは血を吸つて赤く滲む。

「どうして、水下君と喧嘩したの？」

「関係ないだろう

「関係あります。一応、マネージャーだから

「……バスケ部と兼務の癖に

「真一って可愛くないねえ」

僕がむつとしているとみかは呆れたようにため息をついた。

「あんた一応、部長なんでしょう？なら部員の面倒みないと駄目じ

やない。遙だつて相当疲れてるじゃない」

「仕方ないよ。先生の話、聞けば聞くほど危険なスポーツだつてのがわかるし、そうなればあれだけの訓練を事前にしておかないと下手したら死んじまうよ」

結局のところ、結論はそれなのだ。

危険だから、それ相応の訓練をする。危険すぎるから訓練もハドになるのだ。

「それはわかるけど……でも、エクストリームアイロンって何も断崖絶壁や車で走りながらするだけのものじゃないでしょ？人ごみの中でもやつたり、家庭でアクロバティックにやつてもエクストリームアイロンなんでしょう？」

みかは兼務のマネージャーの癖に勉強している。確かにその通りだ。

「勉強してるでしょ？ 兼務でも」

僕の表情を見てわかつたのか、みかは得意げな顔をする。それがちょっと悔しかった。

そして、みかは更に痛いところをつく。

「真一がさ、最近アイロンかけてないからイライラするのはわかるけど、みんなが一定水準になるまで危ないから先生はきっとエクストリームアイロンをしないんじゃないかな？ 部長ならやつぱりその辺を理解してあげないと

理解していた。

先生は僕一人であれば何かあつた際に、サポートできるだけの技

術はあるが、一ノ宮や水下、伊藤つちゃんが加わって、それぞれがトラブルを起こした場合に処理できるだけのスーパー・マンじゃない。だから、それぞれがトラブルを起こさない一定水準になるまで過激なエクストリームアイロンをしないのだ。

それを僕は頭の中では理解しているのだが、結局、考え方が子供で、どこかで納得していなかつたのだ。

僕は水下に対し、それを説明し、納得させなければならなかつたが、それができなかつた。

部長としては失格だ。

また、それをみかに叱責された事についても腹が立つ。腹が立つのは自分に対してだ。これをみかに腹が立つようであれば僕は人間として終わっている。

「……みか、悪かつた」

「謝る相手が違うでしょ」

みかはため息をつきながら笑うと、傷テープを僕の額に貼り付けた。

「とりあえず、何とかして状況を良くしないといけないかな? 水下君は私が部屋までなんとか引っ張るから、後はあんたが何とかしなさい」

みかはどんと胸を叩くと、にっこり笑う。

僕は情けない部長としての自分と、兼務とは言え、立派にマネージャーを果たしているみかを比べ、頑張らねばと思った。

「そんかし、こんどバナナクレープ奢つてもらうからね」

みかはペロリと舌をだして笑うと勢い良く飛び出していった。

次の日、僕は嶋本先生に企画書を持っていった。
無論、エクストリームアイロンの実施計画書だ。

今ある人材と技術、そして装備を勘案し挑めるエクストリームアイロンだ。

嶋本先生はそれをしばらく難しい顔で眺めていた。
僕はごくりと唾を飲み込んだ。

先生は計画に対し厳しかった。命を懸けたスポーツをするからだ。
それは重々承知していた。これまで何度も企画書を提出した事はあるが、ことごとく却下された。
どれもこれも

「お前は、この計画で失敗した時、死んだ人間の責任を取れるか？」

そう言われゴミ箱に投げられた。

だが、今回、先生はそれを僕につき返してきた。

「遠藤。お前、その計画に水下や二ノ宮の命、乗っける事ができるか」

「はい」

僕は静かに答えた。

僕はその計画書には自信があった。

嶋本先生はしばらく僕を眺めると、満足げに頷いた。

「よし、なら今日、ミーティングで発表しろ。それでお前が音頭を取つてエクストリームアイロンを実施してみる」

僕は背中にずつしりと重たいものを感じて先生の前を立ち去った。

その日、部室に入ると、凄い重苦しい雰囲気と沈黙が辺りを支配していた。

小さな椅子に二ノ富が座り、装備資器材のチェックをしている。伊藤先輩は自分の訓練着にアイロンをかけていた。

そして、その向こうで水下がスリングを弄び外を眺めていた。どうやらみかは約束をちゃんと守ってくれたようだ。

後は僕が頑張らねばならない。

だが、この雰囲気は少し重かつた。

僕に水下のような器用さがあればこの雰囲気を和らげる事ができたのだろうが、あいにくとそんな器用さは持ち合わせていない。この間の一件のせいだろう、二ノ富と伊藤っちゃんは僕と水下の顔を交互に見て、何かを言おうとして口を開じている。

僕は水下をちらりと見ると、部室の黒板に歩み寄った。

水下は僕と目を合わせる事なく、部室の小さな窓から外を眺めていた。

僕は咳払いをすると、みんなに告げた。

「えっと、これから重大な発表があるから聞いてもらえるかな？」

みんなが顔を向ける。

僕はもう一度咳払いすると告げた。

「来週の日曜日、エクストリームアイロンを実施する」

僕がそう告げると、みんな目を丸くした。

「先輩、でも……」

二ノ富が心配そうに声を上げる。

二ノ富が心配しているのはみんなの技術や体力の問題だろう。訓練すれば訓練するほど、自分の体力や技術を正確に把握でき、それに対しできる事とできない事が分かつてくる。だが僕は続けた。

「やるといつたらやるんだ」

僕はきつぱりとそう告げると黒板に計画を書いていく。

「実施は日曜日十六時〇〇分、集合は駅前に十四時。実施場所は鳥山八景で二ノ富は知ってるだろ？けど、一番最初に実施した場所だ。」

僕は時間と場所をすらすらと書いていく。

「装備は登山装備を一式使う。ただ、長ロープは三つ……予備も含め四つ持つていぐ」

必要な装備も黒板に書き込み、それから一番大事な事を書き始めた。

「今回は断崖絶壁にアイロナーとテーブルの二人、それにピクサーの合わせて三人が降下する。まずはピクサーが降下し、その後を追つてアイロナーとテーブルが降下する」

テーブルとはアイロン台を持つ人の事で、ピクサーは写真撮影者。どちらも、僕が企画書を出すときに呼称している「ードネーム」のようなものだ。

「先輩、あと一人はどうするんですか？」

一ノ宮が指折り数えながら聞いてきた。

僕を含め、部員は四人、それだと一人余る事になる。
僕は頷くと答えた。

「不測の事態に備えて上で先生と一緒にサポートに回ってもらひ、このサポート役には二ノ宮にお願いしたい。いやとこう時はレスキューの経験がある先生の指揮下に入つてもらひ。だから、何かあっても落ち着いて先生の指示に従ってくれ」

体力的に二ノ宮にはこのレベルの断崖絶壁を降りれるだけのものが無いのが正直なところだ。

僕は崖の絵を描き、その上に二ノ宮と嶋本と書いて丸で囲む。

「そして、ピクサーは伊藤つちやんにお願いしたい。伊藤つちやんはカメラの経験があるんだよね？」

「おつせん」

伊藤つちゃんは自前でミロンのデジタルカメラを持つている。)
いつ荒場で使うのには少々不向きかもしけないが、そこは操作に慣れた伊藤つちゃんに任せるとしかない。

「アイロナーとテーブルは僕と水下でやりたい。アイロナーを…
水下、いいか？」

僕はもうじょとマシな言葉が出ないものかと自分がもどかしくなつた。

水下は面倒くさそうに僕の方を見ると、ため息をつきながら頷いた。

「テーブルは僕がやる。テーブルが下になつて、アイロナーがその上に位置する。」このとき、ピクサー、アイロナー、テーブルのお互いのロープが絡まらないようにしばらくは互いの間隔は三メートルは保持するよう心がける事。そして、所定の位置についたら、念図するから、そこからこいつをひいてフォーメーションを組む

僕が黒板にフォーメーションを描く。

水下の下に僕が入り、その横にピクサーである伊藤つちゃんを書く。

「撮影は逆光を利用したいから、東側から伊藤つちゃんに撮影してもらう。で、肝心なのが水下だ。水下は所定の位置についたらそこから体の上下を反転してもらう。この際、ロープに足を絡めたり、他の人のロープに絡まつたりするとトラブルになる恐れがあるから、気をつけてくれ。水下がもし、落下した場合、テーブルとして下に位置している僕も危なくなる」

水下がはじめて口を開いた。

「遠藤、それだったら技術も体力もあるお前がアイロナーをやつた方がいいんじゃないかな?」

それは正直僕も悩んだ。

何時間も悩んだ。

水下の体力は正直、僕よりあると思つ。

ただ、性格が災いして、伊藤っちゃんや二ノ宮と違い、ロープワークやラペリング技術は僕らの中では一番下手だった。

だから、成功率としてはテーブルを水下に担当してもうひつた方が高くなる。

水下が更に攻める。

「いつも先生やお前が言つてるじゃないか、エクストリームアイロンは危険なスポーツだつて。生還率は98パーセントじゃ、だめだ。限りなく100パーセントに近くないといけないって。それだつたら俺がアイロナーになるよりテーブルの方がいいじゃねえか」

みんなの顔を見ると、二ノ宮や伊藤っちゃんも表情でそう訴えている。

だが、僕は迷わず言つた。

「僕は水下を信じている。アイロナーは水下でテーブルは僕だ」

シンと空気が重くなつた。
僕はみんなに告げた。

「今週一杯は体力トレーニングより部室の壁や校舎壁を使ったラペリング技術を中心にトレーニングする。以上」

学校の壁でトレーニングした結果、どうしてもフォーメーションがうまくいかなかつた。

移動の際にロープを絡めたり、水下が上下反転する際にロープを放したり。

正直、絶望的といってよかつた。

三度目の失敗の時、水下はロープを放し、下に居た僕を巻き込み落とした。

嶋本先生の激が飛んだ。

「水下あーこれが本番ならお前は遠藤と一緒に死んでるぞー。」

僕の上で水下が唇を噛んでいた。
目の端に涙を溜めている。

「つはあー！」

ながばやけくそ気味な返事をして水下が立ち上がる。
その日、フォーメーションは一度も成功しなかった。

次の日、やはり、フォーメーションは綺麗に成功しない。落下はせず、一応アイロンは成功するが、ロープが絡まるようじや成功とは言えない。

先生の激が水下に飛び、今日は先生の手が水下に飛んだ。

「水下あーもひとつ真面目にやれー本気で取り組まないと死ぬぞー。」

心配して二ノ宮が部活の後、部室で着替えてい僕にこいつそり相談してきた。

「先輩、アイロナーはやつぱり先輩がやつた方がいいと思います。
なんなら私がやりますよ」

「二ノ宮には体力的にちょっと厳しいだろう。気持ちは嬉しいけどこの配置は換えられない。」

僕はあつぱりと言い切った。

「でも」

食い下がる二ノ宮。そこに伊藤つちゃんが入ってきた。

「あら、揉めてたんですね？」

「いや伊藤つちゃんどうしたの？」

「多分、二ノ宮さんと一緒にです。水下君の技術では正直成功するとは思えません。厳しいでしょうが僕は配置変更を提言しますよ」

伊東つちゃんは物腰で柔らかだが、言葉は本気だった。

「……水下か」

僕はため息をついた。

「これじゃまるで先輩が水下さんを虐めてるよ！」しか見えないですよ。水下さんだつて今日、先生に殴られてたし。正直、見てられない

れません」

「だけどなあ！」

僕は声を荒げた。

その時、丁度、水下が部室に入ってきた。

作業着を收めに来たんだろう。

僕は舌打した。

水下は疲れた体を引きずりながらロッカーに自分の作業着をロッカーに收めると鞄を持って帰っていた。

「聞かれたかな？」

「多分……聞かれましたね」

伊藤つちゃんと二ノ宮が顔を見合わせる。僕はすぐに水下を追いかけた。

外に出て、帰ろうとしていた水下の肩を掴む。

「水下あ！」

水下は僕を振り返ると今にも泣きそうな顔をしていた。

「俺はお前が言つよつて何やつても本気になれねえ人間だよーっくそ！」

水下は吐き捨てるよつて言つてグラウンドを走つていった。
今になつてわかつた。

水下はそれを誰よりも気にしていたんだ。

水下は本気になれた物が無い。前の僕と同じよつて本気になれる物が見つからなくて悩んでいたんだ。

だから、僕は、水下を見てイライラしていただんだ。

昔の僕とどこか似ていて。

だけど、僕は叫んだ。

「水下あー俺は信じてるからなー！」

僕は叫んでいた。

水下が一瞬止まる。だが、水下はそのまま走り去つていった。

「信じてるからなああー！」

水下に聞こえると信じて、僕は叫んでいた。

僕は計画を入念に見直した後、やつぱりプランを変える事はしなかつた。

僕は装備の点検を終えると部室の鍵を閉めて出る。

あたりはすっかり暗くなっていた。

僕は体をもてあましていたので、フォースレスキューや背負うと、ランニングしながら帰ろうと思つた。

だが、部室を出るとそこにはみかが待つていた。

「よつー。」

「バスケ部、こんな遅かったのか？」

「真一を待つてたのよ。いろいろぴつのクレープ奢つてもうりつ約束でしょ？」

「もうこんな時間だろ？いろいろぴつ閉まってるよ

みかは商店街にあるいろいろぴつとうクレープ屋のバナナクレープが大好きなのだ。ことある事に奢らされではいるが、一度も奢つて貰つた事は無い。

だが、時計の針を見ると八時を過ぎておりもう店は閉店している時間だ。

「しそうがないなあ。じゃあまた今度にしよつか？」

「帰り、ランニングするから付き合つか？」

「ええー？制服が汗臭くなるから勘弁してよ

それも可哀想だと思い、僕はフォースレスキューを部室に置いてきた。

僕とみかは久しぶりに一人で帰る事になった。

「真一、最近たくましくなったんじゃない？」

「そうかな？……そうだろ？ あんな訓練してればそつなるよ」

僕はダラダラと無目的に生きていた一ヶ月前と比べると、確かに逞しくなっている自分を見て、ちょっと感激した。

変われば変わるものだ。

「最近、遙はどうなの？」

「女の子だから、少し体力的には厳しいけど、それでも技術の飲み込みは早いよ」

「へえ……いの成せる技かあ」

「ん？」

みかがしんみりと何かを呟いたが初めの方は聞こえなかつた。みかは首を左右に振るとそのまま歩き出した。

「みか、バスケ部の方はどうなんだ？」

「ん。地区予選ね、準優勝」

「あ……」

「試合、終わっちゃつた」

そう言つたみかは少しだびしそうだった。

そうだ。エクストリームアイロンの実施計画が立てからずつとそればっかりに頭が働き、みかのバスケ部のことを考える暇がなかつた。

「真一、なんか忙しそうだったから先週に終わっちゃつたよ」

「「」めん

「応援に来て欲しかったなあ……」

「え？」

「いや、何でもないよー」

みかは急に走り出す。

僕はそれを追いかけた。

「真一、アイロン頑張つてね！」

みかはぐるりと回るように振り向くと笑っていた。

僕はずしんと背中に重いものをふと感じた。

みかは僕の横に並び、ゆっくりと歩調をあわせてくれる。

「真一、悩み。あるんでしょ？」

「何でだよ」

「あんた馬鹿だからすぐわかる」

昔つからみかはそうだった。

僕が何か考え方をしていたらそれが手に取るようにならかってしま

う。

僕は言つべきか迷つた。

「言つてもいいのかな？」

「言つて楽になるなら聞いてあげるよ?？」

僕はその誘惑に負けそうになつた。

正直、あと数日しかないのに、このままでは命を落としてしまう

それで怖い。

僕は口を開こうとして、やっぱり閉じた。

これは水下の問題であつて、僕の問題じゃない。僕は信じないと

言ったんだ。

「駄目だ。やつぱり言えないや」

「……そつか」

みかはそれ以上、聞いてこなかつた。

僕は空を眺めて、明日に这么い風が吹くよつに祈つた。

「ね、真一、少し、公園寄つて行こう？」

「え、ああ、あ、いいよ」

急にそんな事を言われるもんだから、僕は少し返答するのに戸惑つた。

まあ、少しくらい夜風に吹かれるのもいいかもしない。僕とみかは一人でさくら公園に行くことにした。

さくら公園には昼のよつ子供の喧騒は無く、心地よく肌寒い風と静寂が漂つていた。

僕は自販機で暖かいコーヒーを買つと、みかに一本渡した。

「無糖がよかつた」

「齧つてやるから文句は言うなよ」

僕はしつかり無糖のコーヒーを買つと、それを持つてベンチに座る。

みかもなつてベンチに座り、僕の顔を少し覗き込んだ後、俯いた。

「……最近、遙どお？」

「明るくなつたんじやないか？ 前はお前にべつたりつて感じだつたからね。前より可愛くなつた感じの氣はするよ」

僕は「一ヒーを囁りながら正直に答えていた。僕がもうちょっと大人であれば隣に座るみかの微妙な反応にも気づけたのであらうが、まだ、僕はそこまで精神的に成熟していなかつた。

僕とみかはしばらく黙つて椅子に座つていた。

しばらく忙しかつたから、こつやつてのんびりできるのも心地いい。みかが昔、ダラダラとしている僕を羨ましいといった気持ちが良く分かる。

「あのね……真一……ちょっとといいかな？」

「ちょっとどこひか好きなだけぞ」

僕は冗談めかして言う。心地よい夜風が僕の頬を撫ぜる。僕はこのまつたりとした雰囲気にどっぷりと浸かり、みかの顔に浮かぶ表情なんてまったく目に入つてなかつた。

「えっと、うん。あのね、私ね……」

みかが口の中でぶつぶつと咳いでいる。僕はそれにせりとて気をとめず、聞き流していた。

だが、突如、みかは大きな声で

「ひょとしたら私、真一の事……」

その時、みかの声を遮るように物音がした。
どすん。と、バスケットコートの方からあからさまにボールやそんなものと違う落下降がした。

僕はそっちの方が気になり立ち上がる。後ろではみかが複雑な表情をしていたのだろうが、僕はそれを見ることができなかつたし、

見えたとしても大人ではないからその表情の意味するところがわからなかつただう。

「何だらう

僕がバスケットゴールを見てみると、バスケットのゴールの支柱の首の部分にロープが結び付けられており、その下で人がゆっくりと起き上がろうとしていた。

「あれ、水下君じゃない?」

みかがその人影を見てそう呟いた。

街灯の下、浮かぶ姿は間違いなく水下だった。

水下は顔に擦り傷を作り、鼻血を流していた。

多分、顔から落ちたのだろう。水下は鼻血を着ている作業着の袖でぬぐうと、ロープを掴んだ。

ロープをハーネスに固定し直し、支柱を上ると、小さく何かを咳いていた。

「アイロン……準備よし……フォーメーション……フォーメーションよし! ピクサーよし! テーブルよし! ……アイロン準備!」

水下はぐぐもった声で一つ一つの動作を確かめるように、呼称する。

そして、水下はロープにぶら下がつたまま反転する。だが、もう腕の筋肉がついていかないのだろう。また、水下は頭から落ちてしまった。

「水し……」

飛び出してこいつとしたみかを僕が引き止めた。

「…………くあ…………」

水下はまた噴出してきた鼻血を拭いながら立ち上がる。コートには落ちた鼻血が茶色い染みを作つており、水下はコートに座り込むと頭を振つていた。

多分、軽い脳震盪を起こしているのだろう。だが、水下はそれでもまた、ロープを掴んだ。

「アイロン……準備よし……フォーメーション……フォーメーションよし…ピクサーよし…テープルよし…アイロン準備！」

水下が震える腕を必死に撓ませ、膝の間にロープを挟み、頭を下にロープにぶら下がる。

そして、腰につけていたアイロンに手を伸ばし、それを頭の下に掲げると最後の掛け声をかける。

「…………エクストリーム…………アイロン…………イヤアツ…………」

僕は目の中が熱くなってきた。

僕はみかの腕を掴むと、その場に背を向けて立ち去つた。後ろをちらりと振り返ると、また、落ちた水下が再度ロープに手を伸ばしていた。

着ている作業着はぼろぼろに擦り切れてる、顔は血だか泥だかがわからんようになつていて凄い、汚い。

だけど、それでもロープに手を伸ばす水下はとても、格好よかつた。

「みか」

「ん？」

「……水下は格好いいよな」

「……そうだね」

なんか、視界が歪んできた。

僕は目に浮かんだ汗を拭うと、とにかく、頑張ろつと心に決めた。

「……エクストリーム－アイロンイヤアツ－」

うまくいった。

嶋本先生や、二ノ宮、伊藤っちゃんが見守る中、僕と水下のフォーメーションはうまくいった。

誰も文句は言わなかつた。

水下の下でアイロン台を掲げ、僕は静かに頷いた。

水下の顔は青く腫れており、そして、伊藤っちゃんの号令を待つ。

「ピクサー！撮影よおし！撤収準備！」

「撤収準備！」

水下がアイロンを腰に收め、反転し、フォーメーションを解いてシユミレーションは終了した。

「凄いです！今まで一番綺麗です！」

二ノ宮がぱちぱちと手を叩く。

先生は頷くと僕や水下のラペリングフォームについて若干の注意をして終わった。

「水下やつたな！」

僕は嬉しそうに水下の肩を叩く。

「まあ、当然だな」

水下は青く腫れた顔で笑つた。

精一杯の強がりだろう。でも僕はそれがまるで自分の事のよう
に誇らしかつた。伊東っちゃんも同じように喜んでくれている。
後は本番まで僕らはそれを繰り返した。

本番の日、僕は例の「とく寝坊した」

「真一、いい加減にしなさいよ。あんたはいつも本番の日に遅
れるよね？」

みかに叩き起され準備が整つと借りつ放しのCB400で駅前
に向かう。

もう既にみんな集まつており僕とみかが一番最後だった。

「先輩おつそーい！罰払ジュース」

「部長、」馳走様です「

二ノ宮が少し膨れて僕を攻め、伊藤っちゃんがそれに乗る。僕は
みんなに謝ると罰払でジュースを買ってきた。

アイロン部として始めて計画したエクストリームアイロンだ。
危険だとはわかつてはいたが、何かピクニックに行くようなそん
な楽しさがあった。

嶋本先生は今日はチエロキーで来ており、僕以外の人はチエロキーに乗る事になると思つたが、二ノ宮が

「先輩のタンデムに乗つてみたいなー？いつも金井先輩は乗つてるんでしょ？私も乗せてください！」

と、せがまれ、山の駐車場まで二ノ宮を乗せる事になった。

みかが複雑な表情をしていたが、僕は別段構わずタンデムに二ノ宮を乗せた。

駐車場につく頃には精神的にへとへとになつた二ノ宮を降ろすとみかが笑つていた。

「先輩、帰りは安全運転でお願いします」

みかとまつたく同じ事を言われ僕は苦笑すると、装備を持つて山に入った。

僕らは男子と女子に別れて着替えると、ハーネスを装着したり金具をチェックしたりした。

「水下、お前、ハーネスの金具大丈夫か？」
「大丈夫っス」

嶋本先生が水下のハーネスの金具を少し気にしていたが水下は大丈夫だと言い切つた。

ハーネスの金具には予備がなく、またハーネスに固定されているものだから変えようがない。

「最悪、スリングで座席作つてそれでやる方法も考えろよ？」
「ええ、でも、大丈夫っす」

そうなのだ。ハーネスが無くてもスリングでハーネスの代わり「座席」を作る方法がある。僕は一応、先生が作ってくれたロープワークの読本に目を通し確認しておく。

水下も気がつけば座席の作り方の確認をしていた。

まあ、何度も練習し、体が覚えている事には間違いない。

伊藤つちゃんはカメラの準備をしており、二ノ宮は間隔を取つてロープを木の幹に縛り付けていた。

先生が二ノ宮の張ったロープをチェックする。万が一結び方に間違いがあれば結び目にかかる力は変な掛け方をして、結果、そのロープに命を預ける僕らの生死に関わるからだ。

嶋本先生は満足そうに二ノ宮のロープの結び目を見て頷いた。

「先輩、雑毛布敷いて来ますね」

「一応、命綱つけていkeyo」

「はい」

二ノ宮は胴にもやい結びで輪を作ると近くの木に反対側のあまつた部分をもやいで固定した。

そして、ザックの中から汚れた毛布を取り出し、崖の淵に敷く。あれはロープを垂らしたとき、崖の角とロープの摩擦を柔らかくし、ロープが切れるのを防ぐものだ。

たかが、アイロンをかけると侮るなれ。エクストリームアイロンの真髓はその周到な準備にある。

僕はヘルメットを装着すると、水下と装備の点検をお互い実施した。

確かに水下のハーネスは少し磨耗してるかもしれない。水下は僕らが帰った後、一人、さくら公園で練習していた。これはその時についた傷だろう。

僕はあえて気がつかない振りをした。

「ハーネスよし！スリングよし！」

「ハーネスよし！スリングよし！」

伊藤っちゃんが二ノ宮に装備を見てもらっている間、僕はシャツを固定したアイロン台を背負った。

何かあつたときのスリングを肩からかけると、僕はみんなを集めた。

嶋本先生がみんな一人一人の顔を見ると告げた。

「お前たちの努力は、きっとお前たちに答える。努力はした奴にだけ、微笑む。大丈夫だ。頑張れ」

体の奥から、熱くなってきた。

みか以外の部員が一列に並ぶと僕は厳かに告げた。

「これより！エクストリームアイロンを実施する！」

「了解！」

皆が鋭く返答する。

「これより各人の任務を指定する！」

任務指定の号令は形式的なものだが、これが、僕らの動きにメリハリを与える。

「アイロナー、水下に指定する！」

「水下、了解！」

「ピクサー、伊藤に指定する！」

「伊藤、了解！」

「補助、二ノ宮に指定する！」

「二ノ宮、了解！」

それぞれに対し、指をさし、任務を分担する。
そして、みんなで円陣を組んだ。

僕が腹の底から、声の限り叫ぶ。

「北星学園ア・イ・ロ・ン・部ウウウウウ！」

「ツヤアアアアアアアアアアアアア！」

びりびりと大気が震える。

多分、十二人の高校野球児が集まって円陣を組んでもここまで
声は出まい。

いまここで声を出している連中はこれから死地に赴く連中だ。
気合の入れ方が違う。

「ハイッ！」

「オウッ！」

「ハイッ！」

「オウッ！」

「エクストリイイイイイイイイイム！」

「アイロン！ツイヤアアツ！」

周囲の木が倒れそうな程の気合を炸裂させると僕らは走つて
自分の所定の位置についた。

「アイロナー準備！」

「ピクサー準備！」

「テープル準備！」

号令と共に皆がまるで精密機械のように同じ手順でハーネスの金

具にロープを通す。

皆が皆、ロープを通すと命綱を結ぶ。

今回は上にみかを含め、三人残る形になるので命綱を木の幹に繋いでいる。

もし、途中でトラブルがあつても、最悪落下して死亡する事は避けたかつた。

そして、ロープ、命綱が準備できると、それに体重をかけてみる。その動作まで伊藤つちゃんと水下、僕はユニゾンしていた。

あの厳しい訓練を、それこそ気が狂いそうになるまで繰り返したんだ。これくらいの芸当は造作無い。

たつた、数週間の訓練だがお互いがこの厳しい訓練の乗り越えた仲間として、数年ダラダラと友達をやっていた人間に比べ、遙かに厚い信頼関係が僕らにはあつた。

「ロープよし！ 確保よし！ アイロナー水下準備よおしつ！」

「ロープよし！ 確保よし！ ピクサー伊藤準備よおしつ！」

「ロープよし！ 確保よし！ テーブル遠藤準備よおしつ！」

それぞれ、お互いが準備ができた事を確認しあうと、僕は皆に号令をかけた。

「降下アツ！」

「アイロナー降下！」

「ピクサー降下！」

「テーブル降下！」

僕らはそれぞれ落ちれば即死の断崖絶壁の降下を始める。

学校の外壁より高いが、僕らには積み上げられた訓練があつた。

一番最初、先生に連れられて無理矢理降下したときとは違う。繰り返し積み上げた訓練は危険に対する余裕を僕に生んでいた。

危険の上に身を置いてその危険を自分の支配下に置いている充実感はまた、今までの恐怖だけのエクストリームアイロンとは違う充実感を僕に与えてくれた。

伊藤つちゃんも水下も危なげなく、降下していく。

「ツチ、ニイ・ツチ、ニイ！」

お互い、指令をかけながら降下スピードを合わせる。お互いが同じ高度に居た方が装備にトラブルがあった場合に対処がしやすいからだ。

僕らはもういいだろ？と思いつゝ高さまで降りると指令を止めた。

「降下やめえ！」

その指令を受け、水下と伊藤つちゃんは止まる。

「フォーメーション！用意ツ！」

「フォーメーション了解ツ！」

一人が了解すると、僕らは高度を調整する。アイロナーである水下を一番高い位置にして、ピクサーである伊藤つちゃんを真ん中に、そしてテーブルである僕を一番下に置く。

「テーブル、準備よおしつ！」

「ピクサー、準備よおしつ！」

「アイロナー、準備よおしつ！」

それぞれが位置につくと息を飲む。

「フォーメーションツ！」

僕が号令を飛ばす。

「フォーメーションッ！」

聞こえてはいるのだろうが復唱する事で聞こえている事を教えてくれる。また、聞こえていない人にその号令を伝えてくれる。基本ではあるが、これが一番大事な事である。

これからが本番である。

基本の繰り返しを本番でも繰り返す。

練習ではうまくいったが、本番でうまくいかなればそれは無意味である。

僕らのこなしてきた訓練を信じるしかなかつた。

そして、僕らがあ互いにしてきた訓練はこの死地においても搖るぐことのないお互いへの信頼をもたらした。

一人でやるエクストリームアイロンとは違つ、皆でやるエクストリームアイロン。

僕は今までに無い感動と、胸の置くからこみ上げるエネルギーが口から迸りそうになるのを堪えながらフォーメーションを取る。僕はアイロナーである水下の下に崖を蹴つて慎重に移動する。長いロープが絡まり合わないように最新の注意を払う。そして、練習と同じようにフォーメーションが成功する。

「ピクサー、準備よし！」

伊藤っちゃんが親指を立てて僕に合図を送る。

僕はそれを受けて右手でロープにブレーキをかけると、左手でシヤツを固定したアイロン台を掲げた。

「テーブル、準備よし！」

そして、水下がそこで転回した。

その様子は危なげなく、水下が流した血と汗に裏打ちされた努力が、成功を導いたかのようだった。

「アイロナー、準備よし！」

全部の準備が整った。

僕らの気持ちはこの瞬間、一体となつた。

「エクストリイイイイイイム」

極限な状況における、アイロン掛け。

「アイロオオオオオン！－！」

僕らの咆哮が大気を揺るがす。

吹きすがぶ風も、僕らのエネルギーの奔流がかき消していく。

「イヤアアアアアアアアアアアツ！」

アイロン台の上に水下の熱くたぎつた鉄の塊が押し付けられる！

「ツダアアアアアアアアアアアツ！」

僕はその熱いアイロンを受け止める！

熱い咆哮がぶつかり合い、アイロン台の上で暴れる！

シャツの上で迸るアイロンの熱さはさながら水下の、僕の、伊藤つちゃんの、そして、上で僕らのサポートをする一ノ宮の。

僕らのどこにも行き場の無いエネルギーを爆発させてるよつだつ

た。いや、爆発させていたんだ！

僕と水下の目が合つ。

僕が不敵に笑うと、水下も口の端を吊り上げて答えた。

シャツターを切る音が、風の音より激しく僕らの耳を打つ。

「ピクサー！撮影完了！撤収ウ！」

「撤収つ！」

その号令がかかり、僕らはアイロンとアイロン台をしまった。そして、撤収準備に取り掛かる。

だが、その時、それは起こつた。

鈍い金属音がした。

「あ……！」

水下のハーネスが壊れた。

先生が指摘し、僕が見逃した金具が、壊れていた。

その光景は僕の目の前でスローモーションの様にゆっくりと、鮮

烈に目に焼きついた。

「……つ！」

声にならない悲鳴を上げて、水下の体が宙に舞う。

僕は咄嗟にアイロン台を放し、両手で水下の体を受け止めていた。

僕の体も宙を舞う。

だが、僕はまだ、ハーネスに吊るされた命綱があった。上で支えてくれるだろう二ノ宮を信じて叫ぶ。

「二ノ宮アツー！」

僕の体の落下が止まる。

二ノ宮が命綱を支えてくれたのだろう。

だが、命綱には僕と水下の二人分の体重がかかつていて、僕のハーネスの方がこのままでは先にやられてしまう。

僕は胸の上に水下を抱えるように抱くと、急いでロープを握り、ロープに体重をかける。

水下は僕の胸でゼイゼイと息を上げ、がくがくと震えていた。

「水下、大丈夫か！」

「あ、ああ？ あ、ああ……」

水下はパクパクと金魚のように口を動かす。

「俺、生きてるのか？ 生きてる？ ああ、生きてる……」

水下はかなりのパニックに陥っていた。

僕もつられてパニックになりそうだったが、僕は訓練どおりやるべきことをやることに勤めた。

人間、困ったときは繰り返し練習した事が自信になる。

「アイロナーのハーネスが破損したあ！」

僕が大声で上で待機する二ノ宮や先生にも報告する。

伊藤つちゃんが同じ高度まで降りて慎重に近づいてくる。

僕はパニックにならないように落ち着きながら次すべき事を考えた。が、考えるより先に訓練された体が動いていた。

繰り返した訓練は、僕の口を借りてすりすりと次にすべき事を指示させる。。

「これよりアイロナーはスリングにて座席を作成！ テーブルはそ

の補助に入る！ピクサーはカラビナの設置補助！

「りよ、了解」

伊藤っちゃんはブレーキを駆りながらハーネスに吊るした予備のカラビナを外す。

「……くそ、結局、何やつても俺は中途半端なのかよ

水下が悔しそうに泣いていた。
パニックに陥ったんじゃない。

こいつは自分の努力が、たった一つの事故で無駄になつた事に泣いているのだ。

僕は知っている。

水下はいい加減な奴で、何事にも眞面目になつた事が無い奴だった。

それは水下自身もわかつっていたのだろう。
だが、僕はそれでも知っていた。

あの夜のバスケットコートで水下はぼろぼろになりながらも一人で、何度も何度も這い上がつた。

腕が震え、顔が血に染まり、泥だらけになりながら、それでも、頑張っていた。

それは水下の本気であり、水下はそれをこの一週間繰り返したのだ。

「水下あ！」

僕は叫んでいた。

「僕は言つただろう！水を信じてるって！お前の技術にはミスは無かつたし！手順、スキルにもミスは無い！今のは事故だ！单なる

事故だ！まだ誰も死んでない事故だ！」

僕の口から出てくる言葉は思考で編み上げられたものじゃない。
ゆえにそれは僕の本心だった。

「僕は信じてるからな！こんな事故にあつても、なお、僕らにはそれをどうにかできるだけの訓練をしてきた！それだけの技術を身につけたんじやないか！お前は誰よりも頑張ってたじやないか！絶対生きて帰る！」

水下が泣きながら抱えた。

水下は叫びながらも、自分の肩にかけたスリングを解き、自分の腰に巻きつける。

始めた。

何度も繰り返し編んだ座席はしつかりと水下の腰で固定される。水下は全体重を僕の胸に預けて座席を編んだ。

よつが無い。

しつかりと固定された座席に、伊藤っちゃんから受け取った代理金具であるカラビナを固定し、それにロープと命綱を固定する。そして、ロープと命綱の固定をしつかりと確認すると僕から離れた。

「アイロナー！復帰！」

「アイロナー復帰了解！撤収ッ！」

「撤収ッ！」

今度こそ僕らは撤収した。

水下が流した涙は風に吹かれて消えていた。

常に死と隣り合わせであるエクストリームアイロンの本当の恐怖を皆は初めて感じただろう。

それでも、崖を上りながら水下がふと、僕らに向った。

「…ありがとう。俺、アイロンやってよかったですよ」

それは僕らの心に、確かに響いた。

第4章 „アイロンと海“

「先輩い。辛いですか」

一ノ宮がもじもじとした人形の中で悲鳴を上げていた。

「エクストリームアイロン……いえー」「いえー！」

そう、熱い。僕も溶けそうな意識をなんとか繋げながら一ノ宮を励ます。が、その励ましにもいつもの霸気がなかつた。

もうすぐ、七月を迎えようとしていた。

アイロンと出会いつてから駆け抜けるように春を終え、僕とアイロン部は熱い夏を迎えるとしていた。

一学期の期末テストもなんのその、記憶の隅に押し込むと、まるでそんな事など無かつた事にして僕らはアイロン部の更なる発展の為の活動をしていた。

電気屋の家電販売コーナーで僕らはアルバイトを兼ねてエクストリームアイロンをしていた。

象を模したイメージキャラクターのぬいぐるみを着てアイロンをかけていた。

人びとのなかで注目を浴びアイロンをかける事は、酷い羞恥の中という極限の状況でのアイロンかけという事で、エクストリームアイロンの一つの形態として成していた。

逆に言えば普通じゃない場所でアイロンをかけねばそれがエクストリームアイロンになる。

まあ、いわゆる、店頭デモでかけるアイロンは初歩的なエクストリームアイロンである。しかも、部費も稼げて丁度いい。

アイロン部は正式な部では無いので当然部費等無い。だが、アイ

ロン部の総意として絶対に夏合宿はしたい。いや、しなければならないといつ事で、既でその費用を稼ぐ事にしたのだ。

僕はふらふらで倒れそうな二ノ富の背中を軽く叩くと、新たに部の装備として購入した無線機のマイクで励ます。

「二ノ富、頑張れ。今日の汗は明日の糧になるんだ。一緒に夏合宿行くぞ」

「……はい！一緒に、合宿了解ですっ！」

何故だらう。二ノ富が急に元気を取り戻した。

無線機マイクから外部マイクに切り替え、くるくるとまわりながらマーチャルを開する。

「はーい！これが、ナソナルの新製品！強力スチームミストのN1232！一クロムメッキの新ミラーマジで今までの一倍のすべり！コードレスで使い方簡単！綺麗なクリスタルグリーンと、可憐なジュエルピンクの二つの色が選べるよー！」

演技がかつた声で通りすがる客を集めめる。

そして、アイロン台にシャツを載せ、その上で軽快に滑りせる。

「ほら、シャツの上でアイロンが踊りながら皺をとつてこきます

よー！」

ぬいぐるみを着た二ノ富の手の中でアイロンは踊り、荒れ地のようなシャツの皺を純白の雪原のよきらめきを伴つ皺一つ無い生地へと変える。

僕は通りすがりの子供に蹴飛ばされながら、二ノ富の手腕に惚れとする。

二ノ富はアルバイトが始まる前に店の人につづっていた。

「このアイロン台でスチームアイロンの宣伝をするなんて間違つてます。」これじゃあチームがアイロン台を抜けずシャツに戻り敝ができます。私のアイロン台を使わせてください

そう言つてアイロン台を取り替えると店の人より上手にアイロンをかけてみせた。

アイロンを丁寧にかけるところにおいては二ノ宮遙はうちの部員の中では群を抜いていた。

家が本職のクリーニング屋であり、その手伝いもしているみかだつてアイロンを持たせれば目を見張るものがあるが、二ノ宮はその上を言つていた。

つまり、本職のクリーニング屋より上手にアイロンをかけているのだ。

右腕、左腕、右ヨーク、左ヨーク……ワイシャツの袖のポケットも流れるようにアイロンが滑つていく。

僕や伊藤つちゃんが半ば力任せにアイロンをかける中、やはり、女の子。シャツというスケートリンクの上を走るフィギアスケートのようにアイロンが舞う。

程なくシャツには魔法がかけられ、敝がなくなると、綺麗に置まれた。

その惚れ惚れするようなシャツはえてしてアイロンの性能ではなく、それを扱う者の日々の研鑽に裏打ちされた技術、そして、アイロンより熱い情熱が織り成す芸術である。

だが、二ノ宮の魔法を、魔法使い二ノ宮が手にした魔法のアイロンによるものと誤信したお客様は、その魔法のアイロンを手に入れようと財布を次々に開く。

あつという間に、デモ台の上にあつたアイロンの箱は飛びよつて売れてゆき、程なくして、僕らは交代に来た水下と伊藤つちゃんに後を任せて倉庫に引っ込んだ。

「ふあー、疲れましたね
「ぬいぐるみって暑さがるんだよな」

僕と二ノ宮は段ボール箱が山積みにされた倉庫の中に設けた仮設休憩所のパイプ椅子に座り、一息つく。
ぬいぐるみを脱ぐと僕は汗でシャツがグッショリと濡れているのに気がついた。

「先輩、タオルです！」
「ん、ありがとう」

二ノ宮が冷えた水を含んだタオルを手渡してくれる。二ノ宮は凄い氣の利く子でこういう心配りも忘れない。

また、手渡してくれたときの笑顔もどきつとする程可愛い笑顔で、無防備に近づいてくるもんだからじぎまぎする。

バスケ部に居た時とは違い、凄い活発になつた。それは二ノ宮に以前と違つ魅力を与えていた。

「先輩、何か飲みます？」

「いや、いいよ。それより二ノ宮凄いな。僕や伊東つちゃんじゃあれだけ綺麗にシャツにアイロンをかけられないよ」

ちなみに、皺取りランギングをうひの部でつけるとするならば、二ノ宮の次に来るのは意外や意外、水下で、その次にみか、伊東つちゃん、残念ながら部長の僕は一番皺取りが下手である。

褒められて二ノ宮が嬉しそうに笑う。

「体力はやっぱ負けちゃうから他で頑張らないと悔しいですか
うね

僕と二ノ宮は少し、その場で息をつき休む事にした。
ふと、二ノ宮が僕に聞いてくる。

「先輩、金井先輩の事、どう思います？」

僕はみかの話を思い出し、少し言葉を選ぶ事にした。

「うーんと、まあ、腐れ縁のかなあ。ちつちつやい頃から一緒にだ
し」

「でも仲、いいですよね」

「まあ、そう見えても仕方ないよ」

僕は当たり障り無いように答える。

二ノ宮がいたずらめいた笑みを浮かべて僕を見る。

「じゃ、私はどうですか？」

「え？……うーん」

流石に少し考える。

確かに二ノ宮は可愛いし、彼女にしたいと田舎の一ノ年生、三年生
も多い。

現に二ノ宮目的で入部してきた学生も何人かは居たがとてもなく
くハードな練習と、二ノ宮以下の体力であることで男としての自尊
心を碎かれ次の日には来なくなる。

そんな子にまあ、曲がりなりにも好意を寄せられて居るところの
はある意味、凄い僕は幸せ者なのだろう。

そういえば激しい練習と言えば伊東つむぎさんはよく辞めないよな
あとも思つ。何か理由があるのでどうか、今度機会があれば聞いて
みよう。

僕の思考が関係ないとこに入り込むと、一ノ宮が痺れを切らして身を乗り出してきた。

「先輩？」

ふと、汗でシャツが張り付き女の子の生々しいラインが浮き出ている一ノ宮を目の前に来ており、女の子特有の清潔で、だけど、扇情的な匂いを嗅いで心臓が跳ね上がる。

「ああ、あ、可愛いんじゃないかな？」

「……本当にそう思つてます？」

一ノ宮は僕の返答に至るまでの長かった沈黙で、可愛いという表現を嘘と取つたのか顔を膨らまして身を引いた。だが、その仕草もまた、可愛い。

「最近筋肉ついてきたからなあ。やっぱ筋肉質の女の子って可愛くないかなあ」

「贅肉がついてるよりいいじゃないか。女人の筋肉つて逆に体が締まつて見えるから僕は好きだけどなあ」

「本当ですか！」

一ノ宮はぱつと顔を輝かせる。

「大丈夫だつて。一ノ宮は自信もつて大丈夫だと思つよ」

「先輩にそう言われると自信持っちゃうなあ」

一ノ宮はそんな事を言つて僕の隣に椅子を引き寄せる。バスケ部の時と違つて一ノ宮は積極的になつた。正直困るくらい

「あ、そろそろ交代の時間だ。行かなきゃ」

「えー。もうちょっと先輩と二人で居たかったのに

「アーチャーの魔術は、英國の魔術の頂點だ。」

じゃ一ノ宮だけが頼りだ

「エクストリームリヨーカイです……今度、先輩のシャツもかけ

たげますか?」

「機会があれば頼むよ」

「期待しますから」

氣恥ずかしさを覚えるような事を言いながら、一ノ町はぬいぐるみを被る。

い二か二、富のバイロンをかけた鉄の無いシャツを着る事があるのだろうか。

逆に、二ノ宮が僕以外の人と付き合つて皺の無いシャツを他の男に手渡す姿を想像すると、ちょっと悔しくも感じながら僕はぬいぐるみを被つた。

まずは夏合宿だ。あのHケストリーマンソンは絶対に夏のバーチュアルにやらなければならない。

「エクストリイイイーム！ アイロンッ！ イヤアアアア！」

波のしじまを、進る咆哮が打ち消す。

サーフボードの上に固定されたアイロン台に乗った水浸しのシャツの上、水下はアイロンを押し当てて叫んでいた。

水下は去年の夏からサーフィンをはじめており、僕らの誰よりも

早く湯を揃え、湯の上でアイロンをかけました。
水下の横では、これでもう六度目になるが、伊藤つちゃんがサー

フボードの上から投げ出され、海中に沈む。

「遠藤お！」

「水下あ！」

僕は慣れない操作で水下のサーフボードの磷に位置づけると、アイロンを水下に伸ばす。

水下はシャツを乗せたアイロン台を僕の方に突き出し、僕のアイロンがシャツの上に押し当たられる。

「アイロン！ イヤアアアア！」

「イヤアアアア！」

海岸では水着姿の一人富がカメラのシャッターを切りながら僕らに手を振っている。
僕はそれに手を振つて返そうとして、バランスを崩して海に落ちた。

僕が水面に顔を出すと、水下が僕の方を見て笑っていた。
そう。僕らは海に来ていた。

夏合宿と称し、あの、Hクストリームアイロンをするため。元合宿初日、僕らは先生の車に必要な装備資器材を載せ、海に来た。資器材を宿泊先であるペンションに置くと、初日くらいは海で遊ぼうという事で海に遊びに出た。

そこで水下が

「せっかくだからサーフィンでやらねえか？ アイロンを」

と言つたものだから、僕や伊藤つちやんは二つ返事で頷くとサーフボードをペンションで借りた。

経験のある水下にサーフィンを教わると、僕らは早速それでエク

ストリームアイロンをやつていた。

一旦、昼を食べるのに陸に上がる。

僕はペンションのシャワー室から出ると、バスタオルで体を拭きながら部屋に戻ろうとする。明日のHクストリームアイロンの為、もう一度プランを見直さないといけない。

その時、たまたま伊藤つちやんの部屋のドアが開いていたもんだから僕は中を覗いて見た。

さすが、北星学園一の秀才。ここに来てなお、参考書を開き、ノートにシャープペンシルを走らせていた。

「伊藤つちやん、勉強？」

「あ、部長。お構いなく」

「いや、凄いなあ。やつぱほこの普段からの努力が伊藤つちやんが北星学園で一番という地位を築いているんだろうなあ

「あはは、流石に一学期は九番に落ちましたけどね」

それは初耳だった。

「ちょっとと親の方からも発破かけられて、少し勉強しそとないと危ないなあつてのが本音です。まあ、一応駆験生ですから」

伊藤つちやんは屈託無く笑う。

「でも、アイロン部だと勉強する時間つてあんまし取れないんじやないですか？」

ちなみに、僕と水下の期末試験の結果は酷い事になつていた。

「そうですねえ。でも好き好んでやつてる訳ですか。自分でやつてる」とのツケくらーは自分で払わないと

伊藤つちやんが言うと嫌味なところがまつたく無い。勉強はできるがそれを鼻にかけるところがないから、僕は好きだつた。

水下と正反対のような性格だが、実は意外に水下と伊藤つちやんは凄い仲がよかつた。

「そういえば、伊藤つちやんはアイロン部になんで入るつと思つたん？」

伊藤つちやんはシャープを止めて考える。

「そうですねえ……ぶつちやけ、勧誘のチラシ貰つたとき、馬鹿だなーと思つたのがきっかけですね」

「馬鹿とは失礼な。正論過激で反論できないのが痛いけど

あのチラシは今でも金井クリーニングの壁に貼られており、僕らが活動すればそれに伴い最近はそのバリエーションも増えた。

伊藤つちやんは苦笑する。

「でも、楽しそうだったと思つたんですよ。だつてそうでしょう？あんな命懸けのありえない場所でアイロンをかけるんですよ？一度、自分もそんな馬鹿をやつてみたいと思つたのが動機ですかね？」

「そうですかー」

僕は頷いた。その時、丁度水下が僕らに気づいて入ってきた。

「伊藤つちやん？ 何勉強なんとしてるの？ 海だよ海。参考書間違つてるよ君？」

「いやいや、水つちやんコレ僕の本業

「いやいやいや、認めなによ。わ、水着娘ナンパしに行くよ水着

娘。今日ぐらいいは楽しもつ

伊藤つちゃんを無理矢理引っ張つていきそつな水下に僕は苦笑しながら言つ。

「伊藤つちゃんは僕らと違つて受験生だから」

「あーなら尚更息抜きしなきや。遠藤も来る?ナンパ」

「僕は明日の調整を先生とすつから後で行くよ」

「そか!金井と二ノ宮が怖いもんな!」

水下は僕の肩をバンバンと叩くと伊藤つちゃんを引きずつていいく。僕はその後姿を見ながら部屋に戻つた。

僕は鞄の中から計画書を取り出すと先生の部屋を尋ねた。

先生は部屋の中で、学校の残務をしていた。

先生は僕を認めると机の上のファイルを片付ける。

「先生、明日のプランなんですが……」

「おお、それで俺も話があつた」

僕らはそこでしばらくプランについて話を煮詰める。

だが、もともと夏休み以前から立てたプランなのであまり変更するところも無くその話も終わつた。

「しかし、遠藤も一気に成長したな」

嶋本先生はタバコを口に咥えると火をつけながらそつと話つた。

「俺と初めて会つた時の駄目人間が今じゃこうしてアイロン部として部長してんだもんな」

「先生がエクストリームアイロンなんて馬鹿なスポーツを僕に教

えるからつスよ」

「俺もまさかお前がここまでめつこむとは思わなかつた」

「まさか、自分もここまでエクストリームアイロンにのめつこむと思わなかつたスよ」

嶋本先生は苦笑した。

「アイロン楽しいか?」

「生きているつて感じがしますね」

僕は照れずに答えた。

「じうじょうも無い危険な場所やありえない場所に居てアイロンかけてると、何でこんな事してんだろうっていう馬鹿を加減と、こんな馬鹿してるの自分達くらいなもんだりすると考えると楽しいですね」

「馬鹿と一緒にやつてくれる仲間もできたしな?」

僕と嶋本先生は目を合わせて苦笑する。

僕は嶋本先生に前から聞いてみたい事があった。

「嶋本先生はどうして僕にエクストリームアイロンを教えてくれたんですか?」

先生は難しい顔をして少し考えた後に答えた。

「昔の俺に、似ていたからな?」

「昔の嶋本先生ですか?」

「俺、昔レスキューやってたって話、しだらう~それ自体はとても誇りのある仕事だつたんだけど親が先立つて、自立してない兄

弟の面倒を見るのに里に帰らなきやなんなくなつて辞める事になつたんだ」

先生は苦笑していた。

「大学に居た頃に教職免許だけは取つていたから教壇に立つて兄弟食わして、その兄弟がなんとかなつた頃には、もつ、やる気がなくなつてたんだよな」

「レスキューを辞めたからですか？」

「お前もわかるだろうけど、苦楽を共にした仲間は下手な家族より信頼できる生涯の家族だ。それを全部捨ててきた後悔もあつたんだろう。先立つた両親を恨むのもどうかとは思つが、まあ、色々とごちやごちやした感情があつたのは事実だ」

嶋本先生はタバコを灰皿に押し付けると冷蔵庫からビールを取り出した。

僕にも一本渡して、蓋を開ける。

「嶋本先生」

「未成年だらうと構うものか。お前はそんじょそじのレスキュー隊員よりも使える。その手の職業なら食つてくれる。だから大人だ」

「んな無茶苦茶な」

僕に構わず、先生はビールを煽ると話を続けた。

「それでよ。兄弟が自立した後、一日、教壇を退いてだな。イギリスに留学したんだよ」

「イギリスですか」

「ああ。そこでよ。英語を勉強してたらよ。そっちでできた俺の友達が、一彦はガツツがないとか言ってきて俺にアイロンとアイロ

ン台を持たせやがった

そう言って苦笑する。

「で、お前と一緒に崖の上から突き落とされた。それが俺とエクストリームアイロンの出会いだな」

「そうだったんですか……」

「だから俺もお前をみた瞬間、アイロンとアイロン台を持たせて崖から突き落としてやろうと思つたんだよ！」

嶋本先生が僕の首を太い腕で挟み込み、頭にビールの缶をぐりぐりと押し付ける。

そこにやつてきたのはみかと二ノ富だつた。

二人とも妙に気合の入つた水着を着ている。

「あー！ 真一はっけーん」「

「せんぱーい！ 海行くよ！ 海！」

と申し立てるは扇情的な赤のビキニの金井みか姫。

と申し立てるは清楚な白のハイレグの一ノ富遙姫。
二人は僕の腕を引っ張ると嶋本先生から引き離した。

「先生真一借りますねー！」

「せつかく海に来たんだからエクストリームアイロン以外でも遊
びましょー」

「おう、気をつけろよ」

先生が苦笑する。

僕は竜巻のような勢いの一人に引きずられるよつとして海にまた行く事になった。

昼は海で散々遊びつくし、夜は砂浜でバーべキューと洒落込んだ。先生は昼間の酒が抜けてないのか皆にビールを振る舞い、二ノ宮に酒を買ってこさせる始末である。

皆、程よくアルコールが回ると、途端に馬鹿になる。アルコールが人生を駄目にするとの格言があるが、それは、飲んだその場で人間が駄目になるからだろう。

「私、二ノ宮遙わあ！遠藤真一に一言物申す！」

「私、金井みかわあ！遠藤真一に一言物申す！」

「私、伊藤新吉わあ！遠藤真一に一言物申す！」

「私、水下学わあ！遠藤真一に一言物申す！」

この後、ミーティングをしようと思つてた僕はアルコールをセーブしていた事からまだそんなに酔つておらず、彼らの格好の肴となつていた。

「部長のいいとこ見てみたいいい！」

二ノ宮が叫び、それにみかが続く。

「男遠藤頑張ります！」

次いで伊藤つちゃんと水下が続く。

「ヒクストリイイイイイーム！」

「イツキでイハハハハハ！」

皆に羽交い絞めにされ、無理矢理ビールを口の中に流し込まれる。みんなとこいつやって馬鹿な事ができるのもあとどれくらいなのだろうか。

—先輩愛してます! —

「おお、おお！」

「うるさいに絡まりあい、もみくちゃにされながら僕の意識も酔いの中に落ちてゆく。
まじろんでいく意識の中、僕はふと、この連中とこつまでもこいつした馬鹿をしていたいと思い、それが叶わぬ事と思い少しあびしくなった。

遠くで先生が僕らを見て苦笑している。
いつかは僕らも大人になってこの時の事は、こんな馬鹿をしたな
と笑う、思い出と変わらぬだろう。

たたでも、今はこの瞬間を大事にしようと思つた。

「水下あー！俺もお前を愛してるぞーー！」

僕は飲んだ勢いで水下に口づけし、ビールを水下の口の中に流し込む。

「先輩私もお！」

止む事の無い喧騒の中。

高校一年生の夏、アイロンと出会っていた僕は誰よりも充実した青春を送っていたに違いない。

僕が目覚めたのは自分の部屋のベッドの上だった。頭が割れるように痛い。時計の針を見ると十時を過ぎたあたりを指していた。

「お、気がついた」

ベッドの横にはみかが座つており、僕を笑っていた。

「あれ？みんなは？」

「先生が運んでったよ？今頃自分の部屋で寝てるんじゃないかな？」

「お前は大丈夫なのか？」

「私は大丈夫なんだな。だから、真一に悪戯しに来た」

僕はのそのそと起き上がる。

「あー、まだ、頭がぐらぐらする」

「大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ、ちつとも外でも散歩するか？」

「うん。そのツモリで来た」

僕はテープルの上にあったパークーをシャツの上から羽織るとみかと一緒に夜の浜辺を歩く事にした。

夜の浜辺は昼の喧騒があるで幻だったかのような錯覚を覚えるほど、静かだった。

闇色のキャンバスに散りばめられた宝石箱の中身のよつた星空が投げかけるやわらかい光の中、潮騒の音が静かに響く。

みかは僕の後ろをゆっくりと歩いてくる。

「なんか、楽しいね」

「そうだな」

「こんな馬鹿やれるの今の「うちだけなんだろうねえ」

「来年になつたら僕らも伊藤つちゃんみたく受験だからねえ。こんな事もできなくなるよ」

「伊藤つちゃん、凄いよねえ。受験生なのにアイロン部の訓練してるんだもん」

「そうだよな。成績も下がってるみたいだし、大丈夫のかなあ」

「でも、うちの学校推薦枠も強いから伊藤つちゃんは推薦で大学行くんじゃないかな？前にそう言ってたし」

「そうなん？」

知らなかつた。

「真一は大学どこにするの？」

「一応、親には進学するように言われてるからね。考えてはいるよ」

「まだどこに行くかは決まってないんだ？」

「まあ、そういうね」

僕はぱりぱりと頭を搔く。

今が面白いから将来の事を全然考えていない。自分で言つのもなんだが、まずい兆候だ。

「ところでみかは大学どこに行くか決めたの？」

「ううん。まだ」

「そつか、みかは僕と違つて頭はいいからどこでも行けるだろ

？」

「それが、最近アイロン部のせいで勉強してないから成績下がりっぱなしなのよ。どうしてくれんのか、アイロン部部長」「知らないよ。そんなの自分の責任じゃないか」

僕らは苦笑する。

ふと、みかが僕の側に寄ってきた。

「ねえ、真一、遙の事、どう思つ?..」「積極的だよな? 可愛いし」「そつか……じゃあ、私は?」「珍しいな。お前がそんな事僕に聞くなんて」「……そうかな?」「今まで聞かれた事ないから考えた事ないなあ」「……そつか」

みかは少し寂しそうにそづ、呟いた。

僕はそれに促されるまま、座った。

みかは僕のパーカーの袖を引っ張ると砂浜に座りつと小さく言った。

みかは星の海と交じり合つた水平線を眺めながらポツリと呟いた。

「綺麗だね。なんだか、ドラマのワンシーンみたい」

みかは畠を細める。

「なんだか、隣に居る真一が格好よく見えちゃう」「もとから格好いいだろ?」「アイロンかける時は見てて面白つけどね」「言つたな」「

僕はみかを軽く小突く。

みかは小さく舌を出して笑つた。

僕は星の光に揺れては返す海を見ながら、その先に自分の行く道を見つければ少し不安になつた。

みかが僕の方を見つめて、形のいい唇を開いた。

「ねえ、真一……」

僕は、叫んでいた。

「ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

みかが驚いて田をぱくぱくつむいでいる。

「何か、叫びたくなつた」

みかは少し、残念そうな苦笑を浮かべたが、立ち上がりつて海に向かつて叫んだ。

「真一の調理やうめいをうかがつてみた。」

僕も立ち上がり叫ぶ。

「みかのあんぽんたあああああん！」

「アイロン端末」「スマートフォン」「タブレット」「PC」

僕らは見つめ合うと心の底から笑いあつた。

少し気恥ずかしい気がしたが、それでも今はこんな時間を大切に

したかった。

僕らはペンションに戻る事にした。

みかがそつと僕の手を握る。

僕はみかのその手を握り返す。

やわらかく、気持ちのいい時間が過ぎていく。

ただ、そんな時間は長くは続かなかつた。

ペンションに戻ると、水下が知らない男女一人に怒鳴つていた。

ペンションのロビーで一人の男女と水下、伊藤つちゃんが対峙して何か揉めているようだつた。

「はあーだからあんたら何言つてるの？」

四十台半ばだろうか、品のよさを感じさせる夫婦だろう。その夫婦が顔に少し怒りめいた色を浮かべ、完全に顔を怒らせている水下を見んでいた。

水下の後ろには伊藤つちゃんが複雑な顔をして立つてゐる。

僕とみかは状況がわからずぽかんとしていると、水下が口早にまくしたてた。

「伊藤つちゃんの親だかなんだか知らないけど、何？部活やめて戻つて来いつてあんた一体何様なのさ？伊藤つちゃんは好きでここに居るんじゃねえか。別にこここの旅費だつてあんたの金じやねえんだから何も言われる筋合いねえぞ」

「水下君、いいよ。これは僕の問題だ」

「だけどよ！」

「ありがとう。でも、いいんだ」

伊藤つちゃんが水下の肩を掴み、静止した。

その夫婦は伊藤つちゃんが水下を止めると堰を切ったようにまくし立てはじめた。

「新吉。お前は今こんなところで遊んでる場合じゃないだろ？」「今、自分がどんな時期にあるか考える。大学に行くんだから大学に行つた先を見据えて勉強しなきゃならないだろ？」

「そうよ。新吉。あなた聞けばとても危険な遊びをしてるみたいじゃない。怪我でもしたらどうするの？将来はうちの病院を継いで貢うんだからしっかりしてもらわないと。今からでも遅くないから夏期講習に行きなさい」

どうやら一人は伊藤つちゃんの両親みたいだ。

伊藤つちゃんは僕とみかを見つけると少し気まずそうに頬を搔いた。

「見苦しいところを見られましたね」

「どうしたの？」

「うちの両親が今頃になつて予備校の夏期講習に行けと言つんですよ。僕は前に断つたんですけどね」

伊藤つちゃんがそつそつと、伊藤つちゃんの父親が怒鳴る。

「私はそれを認めてない！」

伊藤つちゃんは苦笑する。

「父上。僕はずつとあなた達の言つとおりにしてきました。あなたの方の望む結果を出すため、勉強し、大学も推薦で入学できるだけの物を得ました。無論、大学に行つた後もあなた方の望むように

医者になるための勉強をするつもりです

伊藤つちやんの母親が眉を吊り上げて怒鳴る。

「なら、なんで夏期講習に行かないの？」「してる事が無茶苦茶じゃない」

「でも、今はアイロン部としての活動を認めて下さー」

伊藤つちやんはきっぱりと言った。

しかし、伊藤つちやんの父親が黙っていました。

「そんなに遊びたければ家を出て行け！お前のよつな親不孝者は帰つてこなくていい！それでいいんだなー」

「あなた。新吉にそこまで辛く当たらなくとも……」

流石にこれには母親の方が父親を諫めていた。だが、伊藤つちやんは涼しい顔で言った。

「いいですよ。父上。僕もしばらくは戻りません。それでいいですか？」

「新吉ー！」

母親が伊藤つちやんを諫めるが、父親の方が母親の腕を引っ張つてペンションを出て行く。

「行くぞ」

「あなた……」

立ち去つていぐ一人の後姿眺めながら伊藤つちやんはため息をついていた。

そして、両親が居なくなると僕らに対して苦笑した。

「すみませんね。少々過保護なところのある親ですか？」

「伊藤っちゃんはこれでいいのかよ？」

水下が心配そうに伊藤っちゃんに尋ねる。

「まあ、仕方ないですよ。アイロン部でいくら頑張ったところで
の人達が僕に求めているものとは全然違うんですからね」

「でもよお」

「僕はね、今までずっとあの人の言いなりになつてきた。勉強
だってずっと一番であり続けたし、望みの大学への進学も決めた。
だから、ここに来て僕は自分でやりたい物をみつけようと思つたん
ですよ」

伊藤っちゃんはロビーにある椅子に僕らを座るよう指示し、また、
自分も腰掛ける。ほつりほつり、と語り出す伊藤っちゃんの顔には
何か吹つ切れたような爽やかさがあった。

「はじめは親に対するさやかな反抗のシモリだったんですよ。
辛い訓練も親への面倒だと考えれば全然苦にはなりませんでした。
ところが、やつてみると段々面白くなつてきましたね。みんなと
馬鹿やつてるのが凄く楽しくて仕方が無い」

だが、水下はあくまで伊藤っちゃんを心配する。

「でも家を勘当されて大丈夫なのか？」

「そういえば今まで一度も自分の親に対してもがままつてのを通
した事無かつたですね……」いつのまに結構いいもんですね

伊藤つちゃんはまるで人事のように笑う。

水下が頭を抑え、ため息をつくと呟く。

「つたぐ、伊藤つちゃんも無茶しやがんな。合宿終わつたひづりすんのよ?」

「まあ、バイトで稼ぎながらサウナでもほじこしますよ」

「……そんなんだつたらウチに来な?うちはオフクロに捨てられたダメ親父しかいなかからどうにでもなるし」

「いいんですか?」

「放つとけるかよ」

水下が照れくさそうにそっぽを向く。

「うう見えて水下は仲間思いのいい奴だつたりする。フォースレスキューを抱えたランニングで二ノ宮や伊藤つちゃんがドロップアウトしそうな時、真っ先にフォースレスキューを代わりに持つてやるのが水下だつた。

水下が言わなければ僕が伊藤つちゃんを引き受けたと言おうとしたが、大丈夫のようだ。

「うういつとき本当に思つ。

中途半端な友情より、一緒に苦渋を舐めた者同士の連帯は、何よりも強い。

「これから、今回のHクストリームアイロンのプランについて説明する」

次の日の朝、一日酔いで頭痛を訴える二ノ宮や嶋本先生を無理矢理僕の部屋に連れてくると、みか、水下、伊藤つちゃんを交えて今回のおクストリームアイロンのプランについて説明する事とした。

「今回のエクストリームアイロンは海中エクストリームアイロンだ」

「海中って……水の中？」

「そうだ」

みかが不思議そうに僕を見つめる。

「でも、海の中だとアイロンに熱がこもらないんじゃない？」

「うん。僕もその点を調べて回ったんだが、その場合、アイロンで力一杯プレスする事によつてシャツの皺は伸びるんだ。自宅の風呂場で実施して確かめたから間違いない」

「間違いなく、もう一度洗濯が必要だね」

「問題はシャツの皺ではない。海中でアイロンをかけるという事だ」

僕はみかの突っ込みを軽く流すと、自宅から持つてきたホワイトボードに計画を書いた。

「今日はレンタルで借りたボートに装備を積み込み、エントリーポイントまで行く」

僕がこの付近の海岸図を描き、エントリー・ポイントをバツで示す。エントリー・ポイントとは海中にダイブする地点の事を言つ。

「今回は水深二十五メートルのポイントで実施する。本来なら公式記録に挑戦するために四十メートル以下でチャレンジしたいところだが、僕らには十分な訓練を積めるだけの時間が無かつた。正直、二十五メートルでも危険なチャレンジである事には変わりない」

僕はバツの横に二一十五と書く。

「今回の活動域は一十五メートルでの活動となるから、減圧停止を要しない限界潜水時間は一十五分となる。今回は限界時間を使って実施する。それ以上の活動となつた場合は水深五メートルの地点で減圧停止時間を五分設ける事とする」

「なら、潜行、浮上にかかる時間も勘案すると、約十八分の活動ですね」

「減圧停止はしないが、安全停止は一応しよう。安全停止時間を含めると十五分弱と考えた方がいい」

伊藤つちゃんが自分のダイブテーブルの中にスケジュールを鉛筆で書き込む。

「先輩、反復潜水は実施するんですか？」

「潜行から三時間の休憩後反復潜水を実施する。その時はそうだな……同じく一五メートル地点において一十分の活動にしよう」

「了解」

みんな自分のダイブテーブルにスケジュールを書き込む。

「アイロンとアイロン台は各自で把持していく。カメラはバディで一台持つて行けば交互に撮影できる。問題は……」

「誰と誰がバディを組むかだろ?」

嶋本先生が腕組みして考える。バディとはダイビング中におけるペアの事で、海中でトラブルがあつた場合、このペアに助けてもらつたりする。

「俺がダイブマスターだから俺が一番経験の少ない奴と組むとし

て……金井を除いて俺、遠藤、伊藤に水下、一ノ宮でバディを組むと一人余る。誰か一人にボートで残つて貰わなきやならない」

それが一番酷だった。みんなこの夏合宿恩このエクストリームアイロンのためにアルバイトし、過酷な訓練に耐えてきたのだ。

それをボートで待つてろなんて酷くて僕はとても言い出せなかつた。

僕はこの時まで、反復潜水時に誰かと代わらうと考へていた。

「それなら私が加わればいいんじゃないですか？」

その時、みかが手をあげた。

「馬鹿。水中は危ないんだぞ？ 水圧による身体への影響にしたつて、正確な知識が無いと危ないし、スキュー・バの装備だつて正確に扱えないといざというとき、誰も自分を助けてくれないぞ？」

「知ってるわよそれくらい。一応、ナウイのオープンウォーターの資格はあるんだから」

みかは胸を張つて答える。

皆が驚く。ナウイとは、スキュー・バダイビングの資格認定機関の一つで全世界的に認められている機関である。

オープンウォーターとは一番最初の段階の資格であるが、基本的な装備の扱いやプールでの講習、海洋講習を経なければ獲得できなものである。ちなみに嶋本先生はナウイのダイブマスターの資格を持っている。

「いつの間に取つたんだ？」

「あんた達が夏合宿つて言つてるから次はダイビングだなーって思つて、こつそり資格取りに行つたの。一度、エクストリームアイ

ロンやつてみたかったし。ちなみに、B Cとかも全部一式、揃えて持つてきてるから大丈夫」

「用意周到だな……じゃあ誰が誰とバディを組むかな……」

みんなが顔を見合わせる。

二ノ宮が手をあげる。満面のどこか悪戯めいた笑みを浮かべている。

「えっと、水下先輩と伊藤先輩は体力的、技術的にも同レベルなのでペアで組んでもらって、技術的に余裕のある部長と先生に女子のサポートに回つてもらつた方がいいと思います」

「なら、真一と組もつかな?……オープン取つてるから一応、技術的にも余裕あるし」

みかがそう言つた時、二ノ宮が首を振つた。

「金井先輩、ナウイでオープン取つていいとはいえ、その他の連携とかでまだアイロン部とは余裕が無いと思うので先生と組んだ方がいいんじゃないですか?私が遠藤先輩と組みますよ」

ぴしりと空気が軋んだ氣がした。

みかが笑顔を作る。それも、どこか怖い笑顔だ。二ノ宮も白々しい笑顔で応ずる。

「大丈夫よ。海洋での実施経験は遙よりかはあるから。遙こそ先生と組んだ方がいいんじゃない?」

二ノ宮も頑として譲らない。

「いえいえ、やっぱりアイロン部として先輩は譲れません」

もつ、理屈こすらなつてなかつた。そのやり取りを見て嶋本先生が苦笑する。

「よつし、じゃあ、遠藤、お前が選べ」

「ええ！」

僕は顔一杯に困惑の色を浮かべているのだろう。水下と伊藤つちやんがニヤニヤと笑いながら僕を見ている。

一方、二ノ宮は「もちろん私ですよね」と今にも言わんばかりの顔で僕を見るし、みかは憮然としながらも自分を選ぶように僕を睨んでいる。

僕は助けを求めるよつて水下に視線を送つたが、水下は相変わらずニヤニヤ笑いながら

「遠藤はモテるねえどっち選んでも苦しいんだから自分の好きなよつてしきよ」

なんて言いやがつた。

僕はどうしようか迷つた挙句。

「じゃあ、二ノ宮が僕のバディだ」

と答えた。

「やつたあー！」

と喜ぶ二ノ宮。一方、みかは表情に驚きを隠せないでいた。

「……水中はとても危険だ。だから、なるべくなら万全の状態で

望みたい。特に一ノ宮はハイパーベンチレーションの気が多いし、エアも多く使うからいざというときエアの使い方の上手な僕が近くに居る方がいい。それにみかは正直どのくらいの技術があるかわかんないから先生の側に居る方がいい

「……了解」

みかは納得いかないような表情で俯いてしまった。僕はちくりと心に痛みを感じた。

だが、それとこれとは話が別。命懸けのスポーツに私情は挟まない。

「……いいかな？じゃあ、出発は十時、それまで各自ウェットスuits、BCJ、レギュレーター、ダイブコンピューターのチェックをしておく事。あと、体調が優れない、副鼻腔に異常を感じる者はすぐ申し出る事。でないと減圧時に鼻腔が破裂して血だらけになるからね」

「了解

「よっし、解散」

僕らは早速準備に取り掛かった。

ボートでエントリーポイントに到着すると僕らはお互いの装備をチェックしあつた。

浮力調整装置であるジャケットタイプのBCJを着てボンベを背負う。

レギュレーターの残圧計を確認し、お互いの装備に不備が無いか確かめる。

みんなの装備が整つたのを確認すると僕はみんなを集めた。

「集合！」

「了解！」

そして、僕は一同を集めると即ち令を飛ばす。

「これよりエクストリームアイロンを実施する」

「了解！」

もはや儀式のような物だが、これは即ち令する方も即ち令を受ける方も気が引き締まりまた、気分も高揚する。

「バディの確認！水下、伊藤！」

「水下了解！」

「伊藤了解！」

水下と伊藤つちゃんが鋭く答える。

「嶋本、金井！」

「嶋本了解！」

「金井、了解。でいいのかな……」

「ういう即ち令に慣れていないのだろう、みかの返答だけ締りが無い。後で文句を言つてやる。」

「遠藤、二ノ宮！」

「二ノ宮了解！」

「本工クストリームアイロンは水中での実施となる。各自エラー残量、潜水速度、浮上速度に十分注意してくれ。各自、エキジット ポイントの再確認を怠るなよ？水中ではお互いのバディから離れず

ぎないよに留意、また、ダイブマスターは嶋本先生だ。バディ同士で解決できないトラブルがあればライトで知らせる事

「「了解」」

「では時刻あわせ

皆がダイブコンピューターの時計を合わせる。

「よし、各回コントリー準備!」

「「了解」」

皆がボートの舷側に腰掛ける。

「マスク準備!」

「「マスク準備よおしつ!」」

皆がマスクをかける。
そして、僕が大声で叫ぶ。

「北星学園ア・イ・ロ・ン・部うう!」

「「ファイフ・オウ!・ファイ!・オウ!」」

皆が声を出し、通りすがりのピットが好奇の目で僕らを見てくる。

「「エクストリイイイイイイム!」」

「「アイロン!・イヤアアアアアア!...」」

叫んで一番端に座っていた二ノ富からドアへ倒しのよひ順次、エントリーしていく。

背中のタンクの重さを利用して後ろ向きに倒れるよひに海の中へ落ちる。

海面が白い飛沫をあげて、僕らを飲み込む。

僕はレギュレーターから圧縮された酸素を大きく肺に吸い込みながら辺りを見回した。

エントリー時の気泡が僕の目の前を覆つており、その気泡が徐々に晴れていくと、そこに広がる光景に僕は目を奪われた。

海の中は物凄く綺麗だった。

空から差し込む光が、海の中を泳ぐ宝石の様な魚の体に反射し、まるで昼間の星空みたく輝き、その星の輝きが手を伸ばせば届くような位置にあった。

僕はバディである二ノ宮を見つけると、順に水下と伊藤ちゃん、みかと嶋本先生の姿を確認する。

嶋本先生が皆、居ることを確認すると親指を立て、それを下に向ける。潜行を示すゼスチャーだ。

僕らは同じゼスチャーで返し、潜行を開始する。

僕はBCのエアを抜き、浮きもしない、沈みもしない中性浮力となるように調整するとフィンのついた足で水を蹴った。

紐で繋がれた二ノ宮が僕の隣まで来て笑いかける。その笑顔が、陽光の差し込む海の中、まるで御伽噺の人魚が急に目の前に現れたようでドキッとする。

二ノ宮は紐で僕を引っ張るように海の底へ誘つ。

二ノ宮は少し浮かれているのだろう。訓練の時より動きが多い。ダイビングの時はなるべくゆっくりとした動作を心がけなければならぬ。でなければタンクの中の圧縮酸素を多く吸わなければならず、エアの減りも早い。深く早い呼吸を繰り返す状態であるハイペーベンチレーションの状態になれば、体内一酸化炭素の量を誤り、呼吸のリズムが崩れ失神する事もある。

特に二ノ宮にはそういう悪い癖があつたので僕は紐を引っ張り二ノ宮を引き寄せるとスレートにその旨を書いた物を見せ、諫めた。

二ノ宮は拳で自分の頭を軽く小突いて小首を傾げる。反省しているのかしていないのかわからないが、とりあえず理解はしてくれた

ようだ。

遠く、そんなやり取りを見ていたみかが複雑な表情をしていた。僕はみかと目が合つてしまい、同じように複雑な表情となる。

みかは僕から田を逸らすと、再び潜行を始める。僕も後を追うように潜行した。

水の中を潜つて行くと、鼓膜が圧迫され、不快な痛みを感じる。専門用語で言うならスクイーズが僕を襲つた。

水圧が僕らの生活するレベルの気圧を超えると体の各所に圧力をかける。特に体の中の空洞である鼻腔、副鼻腔に圧力がかかりこれを放つておくと色々な疾病が起きる。

僕は鼻を押さえ、口をつぐむと息を強く吐く。ふちつと耳の奥で何かが繋がるような音がした。すると耳の奥に残る不快感が消える。バルサルバ法と呼ばれる鼻腔内の圧平衡を保つ為の技術でダイビングの基礎技術である。

僕は潜行し、水圧が掛かるたび、こまめにバルサルバ法で圧平衡を保つと、ゆっくりと潜行していく。

先ほどまで綺麗な水色だった水の中は潜つて行くほど鈍く暗くなつていく。日の光が届きづらくなるからだ。

そして、程なくしてそれは僕らの前に姿を現した。

一面、真っ白いじこまでも広がる砂漠のような砂の海底。小魚が白い絨毯の上で翻る。

泉に投げ込んだ銀貨が揺らめくように小魚が煌き、僕はその光景にしばらく目を奪わっていた。

万物の生命が生まれた海。

その中はまるで沢山の神祕が詰められたおもちゃ箱のよつだ。ひっくり返せば無限の神祕が目の前に飛び込んできて、僕らを飲み込んでいく。

ひとつひとつ僕の前をウミガメが通過していく。まるで僕ら等そこに無いかのように悠然と通り過ぎる。

一ノ宮が僕の肩を叩く。僕がはつとして一ノ宮の方を向くと、一

ノ宮は防水ケースに入ったカメラを携え、僕の胸に括りつけられているアイロン台とアイロンを指差す。

そうだ。僕はエクストリームアイロンをやりに来ているのだ。

僕は海底に辿りつくと、アイロン台を設置する。

僕の周りに、みかと伊藤つちゃんが寄ってきて一列に並ぶようにアイロン台を設置すると皆がアイロン台の上にシャツを載せる。その目の前を魚が通り、好奇の目で僕らを見て通り過ぎて行く。僕はアイロンを手に取ると、それをシャツの上に押し当たった。

「エクストリーム……アイロン……」

緩やかな光が投げ込まれる海の底。

アイロン台に揺らめくシャツに冷え切ったアイロンを押し付け、僕は熱い感動に胸を震わせていた。

辛い訓練を経て、皆でアルバイトをして、そして、この許された者だけが踏み込む事のできる領域で僕は何をしているかというと、アイロンをかけている。

ああ、アイロン……なぜ、こんなに僕を狂わせる……

揺らめくシャツの袖に、魚が入り込む。袖から入り込んだ魚は袖を通りぬけ、シャツの首から抜けて行く。

その様を見てシャツターを切る二ノ宮が笑う。

冷たく、鈍く光るアイロンが水の中で揺らめくシャツの上、ゆっくりと滑る。

生命の生まれたゆりかごの底でアイロンをかけるという背徳感じみた感動が僕の胸の中で弾けていた。

僕は一通りシャツにアイロンをかけ終わると、二ノ宮と交替した。僕は海底に正座し、シャツに丁寧にアイロンをかけている二ノ宮をファインダーに收め、シャツターを切る。

二ノ宮が僕の方を見てピースをする。

僕が苦笑すると、僕の隣でみかが面白くなさそうな顔をしている。

僕はエアの残量を確認すると、先生の方を見た。先生は僕に対し頷くと浮上のサインを出した。

僕はそのサインを確認すると、皆にも同じように指示を出した。僕はアイロン台とアイロン、シャツを体にべべりつけると、若干、B.C.に空気を入れ浮力を得ると、早過ぎないペースで浮上を開始する。

高圧窒素が体内に残留している状態で急速浮上をすると、体の中で高压窒素が弾け、血管の中に気泡を作る。

振った「一」の二酸化炭素が蓋を開けた瞬間に泡を吹くのと同じ原理だ。

その気泡が血管を塞ぐと、血が頭に上らなくなり死に至るケースもある。

ゆっくつと浮上し、急に体の中で圧縮窒素が沸騰しないように留意する。

「…………？」

皆が浮上する中、バディ同士を繋ぐ紐の先に感触が無く、僕の中が一気に冷えた。

僕は浮上して辺りを見回す。

僅かに浮いてくる気泡を頼りに二ノ宮を探す。呼吸をしているのであれば必ず気泡が僅かであろうとも浮いてくれるからだ。程なく、二ノ宮の姿を見つけたが、僕は心臓を驚撃みにされたような心地になつた。

二ノ宮はあるで糸の切れた人形のように水の中に漂つている。近くによつて顔を覗き込むと、目を閉じ、明らかに意識が無かつた。

やばい。とても危険な状況だ。僕は早鐘のように鳴る心臓に落ち着くように命じると、落ち着いて状況を確認しようとした。マスクを外し呼吸を確認する。微弱ながら息はある。

残圧計を見てもまだエアはある。

最初はタンク異常によるエア枯済かと思ったが違うようだ。

僕は二ノ富のウェイトベルトからウェイトを外し、自分のウェイトも外す。

レギュレーターを二ノ富の口に戻すと、僕は急速浮上にならない程度の、ぎりぎりの速さで浮上した。

水面に出て、二ノ富を仰向けにし、マスクを外す。

「二ノ富あ！」

マスクをはずし二ノ富の頬を叩く。再度、二ノ富の呼吸を確認するが、二ノ富は呼吸していなかった。

すぐに脈を取る。

脈拍は確認できた。心臓は動いている。

先生や水下の姿は見えない。

遠くにボートが見える。僕はぱしゃぱしゃと水面を叩き、ボートに対し緊急事態があつた事を伝える。

上手に伝わっているかどうかはわからない。

だけど、今は二ノ富を助ける事が先決だった。

マウストウマウスによる人工呼吸を訓練どおり実施しようと。何はともあれ、呼吸が無い場合、酸素を供給してやらねばならない。

が、不覚にも二ノ富の顔を見てしまった。

「……」

一瞬ドキリとする。

田を閉じ、日の光を受ける水面に浮かぶ二ノ富まるで御伽噺のお姫様が眠っているような美しさがあった。

僕はこれから、この可憐な唇にこれから口づけするのだろうか？

「一ノ宮の唇を奪つてしまつていいいのだらうか？」

「やるしか、ねえよな」

僕は頭を振つて雑念を振り払つ。あくまでこれは救命行為だ。命が無ければ後で一ノ宮は怒る事もできない。

「気道確保……」

首を持ち上げ、気道を確保する。

僕は一ノ宮の鼻をつまむと、唇から空気が漏れないよう、自分の唇を覆いかぶせるように一ノ宮の唇に押し当て、息をゆっくりと吹き込んだ。

一ノ宮の胸が僅かに隆起する事を視認。肺に空気が入つてるのを確認し、唇を離す。

ゆっくりと胸が元に戻り、肺から空気が無くなるのを確認すると再び人工呼吸を実施する。

何度もその行為を繰り返していると、ボートが僕らの側にやってきた。

「遠藤！大丈夫か！」

舷側からロープを投げながら先生が叫ぶ。

「一ノ宮の意識が無い！脈はあるけど呼吸がない！」

「そのまま人工呼吸を続ける！回収する！水下！近くの再圧チャンバー施設に連絡を入れろ！最悪減圧症の恐れも考慮する！」

「了解！伊藤っちゃん、金井！先生のフォロー入ってくれ！」

「みかさんは酸素ボンベを用意して！僕と先生で一人を引き上げます！」

船の上がとたんに騒々しくなる。僕は先生の投げたロープに捕まり船の舷側まで来ると先生と伊藤つちゃんの助けを借りて、意識の無い二ノ宮をボートの上に引き上げた。

みかが酸素ボンベを持ってくるまでの間、僕は二ノ宮に人工呼吸を続けた。

みかが酸素ボンベを手にその様子を見て呆然としていた。
僕は呆然としているみかに語氣荒く

「みか！酸素ボンベよこせ！早くしろ！」

と怒鳴る。

みかは慌てて僕に酸素ボンベを手渡す。僕は酸素ボンベを二ノ宮の口にあてがう。

B Cをはずし、タンクを外すと、甲板に横たわらせ、楽な姿勢をとらせる。

程なく二ノ宮は薄く目を開くと僕の姿を見つける。

「二ノ宮！」

僕が呼びかけると二ノ宮はうわ言のように咳く。

「……先輩が居て……私にキスしてくれてた？……先輩……こ
こ、天国ですか？」

僕は全身の力がどつと抜けて、甲板に腰を落とした。
立ち上がりない。

緊張が解け、安堵を噛み締めると、腰が、砕けていた。

夏休みはあつとこいつ間に終わり、気がつかば一学期になつていて。あの海での一件依頼、二ノ宮は積極的になり、みかとは気まぐくなつた。

みかに声をかけても何か意図的に僕を避けるよつな気がし、二ノ宮はこれを好機と積極的に僕に言ひ寄つてくる。

僕は相談がてら毎食を一緒に食べるため、水下のクラスに来ていた。

水下の席には既に先客があり、伊藤つちやんと珍しくみかが居た。みかは僕の姿を見るや、水下と伊藤つちやんに手を振り

「ありがとうね。じゃ、私、行くね」と逃げるように立ち去つていった。

「みか」

「真一、今日バスケ部あるからけよつと放課後アイロン部に行けそうにないか。」「めんね」

みかは申し訳なさそうに田代の前で手を合わせるとそのまま走り去る。

僕が頭を搔いてそこで立ち去つてみると水下が僕を座るよつて顎でしゃべつた。

「何か僕、避けられてるのかな?」

「そこまでの自覚があるならまだ、見込みアリだな」

僕が呟くと水下がにせんじと笑つ。

「何だよ。結構真剣に悩んでるんだぞ？」

伊藤つちゃんが肩をすくめる。

「どっちを選ぶかで悩める身分なんて羨ましいですねえ」

「ホントによ。何か腹立つ」

水下は僕の頭を小突く。僕は憮然とした。

「だけど正直針のムシロに座つてるのは気分だよ。だからいつして水に相談しに来たんじゃないかな」

最近、伊藤つちゃんが水下の事を水つちゃんと呼ぶようになつてから僕は水下の事を水と呼ぶようになつていた。

水下は腕を組んで得意げな顔をすると答える。

「じゃあどっちか選べばいいじゃないか。一ノ宮か金井か。もしぐは両方選んで納得させるか、両方捨てて納得させるかだ」

「それができれば苦労しないよ」

僕は椅子にもたれかかり天井を仰ぐとため息をついた。伊藤つちゃんが笑う。

「リズつちゃん。それじゃ部長は選んだりできないよ。もう少しつと判断しやすいような言い方してあげないと」

「そうか、じゃあ、どっちとやりたい？」

「はあつ？」

僕は素つ頼狂な声を上げる。水下が怪訝な顔をする。

「何も難しい話してる訳じゃねえだろ。遠藤はセックスするなら金井と二ノ宮のどっちと、または、両方か、どっちともとやりたいのかって事で聞いてるんだよ。まあ、まず間違いなく俺なら両方だけどね」

「そう来たか」

僕は眉間に押さえ考える。水下はニヤニヤとやらしい笑みを浮かべる。

そして、伊藤っちゃんに抱きつぐ。伊藤っちゃんも伊藤っちゃんで水下を抱きしめる。

「真一！ハジメテだから優しくしてね！」

「先輩！私をスキーシテ！」

気持ち悪い裏声をあげながら、僕が当惑するのを見て楽しんで居た。

その時丁度、二ノ宮が教室の口を開けた。

「あ、遠藤先輩みつけ

二ノ宮は僕の姿を見つけると満面の笑みを浮かべて僕の側に寄ってきた。手には大きめな弁当箱が提げられており、可愛らしくウサギのプリントがされたナップキンで包まれていた。

「水下先輩、伊藤先輩、遠藤先輩を借りていいですか？一緒に昼食べたいんで」

「いいとも。一泊三日で二五〇円だ。毎月一のつく日は一週間で百円だ。だけど二ノ宮だからタダでレンタルしよう」

「どこのレンタルビデオだよ

僕が水下に突つ込みを入れるが、それを待たずに僕の腕を一ノ富が引っ張つていく。

「じゃ、屋上に行つてますので」

僕は一ノ富に引きずられるように屋上へ運ばれる。

僕の後ろで水下と伊藤つちやんが確かにこつ囁き合つていた。

「でも、この間ナンパした子がやーぐらんしようとして言つてるんだよね」

「じゃあ遠藤部長はハブにしまじょい。なんか腹立つから」

僕はアイロン部の鉄の結束が存外もうかつたのに気がついた。

秋の空は憎ららしいほどに晴れ渡り、僕の胸を乾いた風が吹き抜ける。遠く見える赤く燃える山は僅かな秋の匂いと共に、駆け抜けた夏の終わりを僕の胸に運ぶ。

思えばアイロンと出会つてから僕の日常は万華鏡の様にめまぐるしく回り、あつという間に過ぎ去つていった。

アイロンに出会いつてから僕は変わったのだろう。多分、それは僕だけでなく、水下や伊藤つちやん、そして隣に座る小柄で愛らしいこの娘も変わったのだろう。

「はい、先輩。じゅうべ」

一ノ富は甲斐甲斐しく僕にお茶を汲む、

僕は困惑した表情を浮かべるが一ノ富は一向に気にしていない。

「二ノ宮。あー……どうしてここまでしてくれるかな？」

「だって、先輩は命の恩人ですから」

言つて二ノ宮ははにかみながら俯くと頬を桜色に染める。両手を胸の前に組みもじもじとする様は男の胸の中にある黒い欲望の鎌首をもたげさせるには十分な魅力を持つていた。

僕は目をそむけ、理性でもってそれを抑えると渡されたお茶を口に含んだ。

僕はなるべく二ノ宮を傷つけないように言葉を選んだ。
さつき、水下に相談して覚悟が決まった。

僕には二ノ宮の気持ちを受けるだけの覚悟がない。そんなの詭弁かもしれないが、僕にとって二ノ宮の気持ちは重い物だった。

「でも、もし、あれが水下でもみかでも僕は同じ事をしたよ？」

遠まわしに、僕は二ノ宮を他の部員やみかと同じ立場の人間である事を示唆する。

二ノ宮はちよつと傷ついたような表情をした。僕は良心がすきずきと痛む。

二ノ宮は可愛い。正直僕なんかじゃもつたいないくらいだ。正直、僕の心に先客が居なければ、二ノ宮と付き合つてしまいたいくらいだ。

先客？僕は自分が考えていた事にはたと氣づく。だが、それより早く、二ノ宮が顔を上げた。

「私、バスケ部辞めてアイロン部に入つたの、遠藤先輩のせいですから！」

田じりに涙を僅かに浮かべ、頬を染ながら睨みつける。

「私、遠藤先輩の事、好きですからー。」

もはや半分やけっぱなしじゃねえだよ、僕の胸にずしんと響いた。

「私、中学の頃からずっと金井先輩と笑ってる遠藤先輩が好きでした。金井先輩が憎くなるくらい……」

僕が呆気に取られてると、二ノ宮は口早にまくし立てる。

「いつも金井先輩の後ろに居て、全然自分の気持ちを伝えられなかつたんですけど……私、先輩がアイロン部作るっていう話を聞いた時、自分を変えようと思いました。厳しい訓練だつて、先輩と一緒に居れば耐える事ができました。正直、あの訓練は女子である私については辛かつたですよ。でも、訓練の度に私に声をかけてくれる先輩の優しさがあつたからここまで来れたんです。」

「二ノ宮のどこにこんな勢いがあつたのだろう。二ノ宮は泣きながら、それでも精一杯僕に思いをぶつけてきた。

「たとえ先輩が今、私だけを見ててくれなくとも私、いつかきっと先輩を振り向かせてみせますから！前までは金井先輩の後ろで先輩を見るだけでしたけど、今は金井先輩と違つて水下先輩達と同じ仲間のラインでアイロンかけてますし、次は先輩の隣に入つてみせますからー。」

「じらじくもそつ宣言する二ノ宮。僕はその思いを受け止め切れず、ただ、呆然とする事しかできなかつた。

その時、屋上に思わぬ闖入者が現れた。
みかだ。

「真ーー……え、あ、遙?」

血相を変えて屋上に駆け上がってきたみかは僕らの姿を認めるや、まるで金魚のようにパクパクと口を開ける。

二ノ宮は弁当箱を閉じると、僕の隣を立ち上がり、ずんずんとみかに詰め寄る。

「……私、金井先輩に負けませんからー。」

みかに指をつきつけ、宣戦布告する二ノ宮。僕は正直、どうしていいのかわからずそこで事の成り行きを見ていた。

みかは目に涙を浮かべて、今にも泣き出しそうな二ノ宮を見て何かを言おうと口を開き、そしてそれを閉じる。そして、僕と二ノ宮を交互に見比べて、何かを言おうとした。

「わ、わたしだって!……」

「おい!金井!遠藤は居たか!……遠藤居るじゃないか!…まだ伝えてないのか!」

みかが何かを言つのを遮り、水下が駆け込んできた。先ほどのみかと同じように血相を変えてだ。

水下は対峙する二ノ宮とみかに構わず僕のところに駆け寄ると、一気にまくし立てる。

「遠藤大変だ!生徒会がアイロン部を潰しに来たぞ!」「……何だつて?」

僕は開いた口が塞がらなかつた。

生徒会室の前には人だかりができていた。

アイロン部は一学期でこそ認知のされていない部であったが、厳しすぎる訓練と、あまりにも常識はずれな活動、そして、商店街の金井クリーニングの宣伝のおかげで今やこの学園では知らない者の居ない部となっている。

アイロン部の活動は北星学園に居る者にとっては絶好のゴシック部だった。

「解散？アイロン部を？」

僕は人ごみを掻き分け、生徒会室の掲示板に掲示されたプリントを見て啞然とする。

生徒会室の掲示板にワープロで印字されたゴシック体の文字にはこう書かれていた。

「北星学園における同好会活動を実施中の『アイロン部』においては、その活動の危険性から早急に活動の停止を求める。これに従わざ活動を継続した場合、活動に従事した生徒を退学処分とする所存……」

そのプリントを眺め、僕は何がどうなっているのかさっぱり分からなくなつた。

水下が説明する。

「……伊藤っちゃんの両親がうちの理事長に直接かけあつたらしい。で、生徒会を通じて解散命令が出たんだ」

「そういえば伊藤っちゃんは？」

「理事長室に一人で乗り込んだ」

「バ……」

馬鹿野郎と叫びそうになり、僕は言葉を飲み込んだ。僕が伊藤つちゃんの立場でも同じ事をするだらう。

僕は騒ぎ立てる生徒の波を搔き分け、追いすがる水下と一緒に、理事長室に向けて一目散に走っていった。

「こんな事納得できない！僕らの活動にどんな問題があるんだッ！」

理事長室に飛び込むと、そこには今まで見た事の無い、憤怒の形相を浮かべる伊藤つちゃんが嶋本先生に押しとめられながら、理事長に向かつて唾を吐いていた。

「ふざけんなよ！遊びでやつてんじゃねえんだよ！命張つて活動してんだよ！それを何で！」

「やめろ伊藤！お前、自分の立場がわかつてんのか」

嶋本先生が必死に止める。

「……お前は推薦で大学に行くんだらう。ここで問題を起しきしたらお前の生涯に渡つて大変な事になるぞ！」

嶋本先生の言つ通りだ。伊藤つちゃんは優秀な成績で推薦入学を決めている。ここで問題を起しけば間違いなくそれは取り消しながらしてしまう。

だが、伊藤つちゃんは砲えた。

「だけど！僕はここで逃げたら一生逃げ続ける事になる！」

「アイロンは大学に行ってからでも、いつでもできる！今やる必

要は無いだろ？」

「いつでもできると思つてやらないでいれば、いつまで経つてもやれる訳ないでしょ！先生、あんたが一番わかつてるんじゃないですか？あんたが一番アイロンやりたくて！それでもいつでもできるからといって誤魔化してきたんじゃないんですか！」

嶋本先生が唇を噛む。そのやり取りを見ていた理事長が咳払いをする。

榎本理事長。北星学園を総括する人物で生徒には理解のある人だ。アイロン部も当初は問題視されていたが、この人の鶴の一聲で放置する事が決まつたと、ちらりと耳にしていた。

「あー、嶋本先生、いいかな？」

嶋本先生は暴れる伊藤っちゃんを理事長室のソファに無理矢理座らせると、榎本理事長に向き直つた。

「確かに彼の言つところは分からぬでもないが、アイロン部の活動は少々危険すぎる。一学期中に鳥山八景でロッククライミングをしたり、夏休み中にはスキューバダイビングもしたみたいじゃないか。ダイビング中に一年生の女子が事故を起こしたとも聞いている。幸い、大事に至らなかつたからよかつたものの、もし生徒の身に何かあれば君は責任を取れるかね？」

「……理事長のおっしゃられる事は良くわかります。ですから、私は部の責任者として彼らに適切な訓練……本物のレスキュー隊員が実施しているような訓練を施し、事故の無いように万全を努めております」

「それは私も認めよう。だが、事故はいつでも起るのだ。野球やバスケットボールとは訳が違う。ともすれば人の命に関わる事になりますよ。私も君の過去を少し調べさせて貰つたが……どうだ

ね、彼らにも同じ事が起こりえた場合、君は責任を取れるかね」「

嶋本先生は黙っていた。

伊藤つちゃんが毒づく。

「どうせ、うちの親に何か言われたんだろう？じゃなきや、急に部を無くせだなんて言つはずが無いじやないか」

「伊藤！」

嶋本先生が短く叫び、それを制した。

理事長室に飛び込んだまま、呆然と立ちすくむ嶋本を見つけ、榎本理事長がため息をついた。

「君が部長の遠藤真一君だね？」

「はい」

僕は憮然とした面持ちで答えた。

「まあ、聞いての通りだ。北星学園としてアイロン部の解散は決定事項だ。これ以上の活動は他の生徒に対する煽動行為としてこちらも強制力行使せざるを得ない。私は構わないが君達が懸命な判断をしてくれる事を祈るよ」

榎本理事長ははつきりとそう言い放った。

それは、アイロン部として活動を続けるなら学校を去らせる。手心や慈悲は全く加えないという宣告だった。

嶋本先生は軽く頭を下げるが、僕らを理事長室から追い出した。

「……遠藤。俺はもう少し、理事長を説得してみる。お前たちは先に部室に行つてろ」

先生は苦虫を噛み潰したような表情で僕にそう言った。その表情から、説得が難しいという事を悟った。

「……大丈夫なんですか？」

「頑張つてみる」

弱々しく頷き、理事長室に戻る嶋本先生の後姿を見送り、僕は肩を震わせている伊藤つちゃんを連れて、部室へと足を向けた。

部室につくと、伊藤つちゃんは落ち着きを取り戻し、僕らに頭を下げた。

部室には僕をはじめ、アイロン部の部員、それとみかを入れた全員が集まり、伊藤つちゃんを囲むようにして机や椅子に思い思い腰かけていた。

「ウチの親が迷惑をかけます」

そして、ぽつぽつぽつと話し始める。

「夏合宿の時から水っちゃんのところに話になつてたけど……どうやら限界みたいですね」

昼間の弁当が同じビニ弁なので少し気にはなつていたが、あれからずつと伊藤つちゃんは水下のところでも暮らしていたみたいだ。

「この間、携帯に母親から連絡がありました。僕がこのままの生活を続けるのであれば親父が学校に掛け合ってアイロン部を無くし

てしまつた。まさか本当にやるとは思いませんでしたけど、いつなつてしまつたら僕も腹をくくるしかないですね」

伊藤つちゃんは優しく笑うと、僕の方を見つめてきた。

伊藤つちゃんは部を自ら辞めるツモリだ。せめて、僕らに迷惑をかけないようにする為に。

「んなの俺が認めないぞ?」

伊藤つちゃんの肩を掴んで、水下が怒氣を孕んだ声で言つ。

「伊藤つちゃんなんだつてさつき理事長室で言つてたじゃないか。今やらないで諦めていればこれから先、ずっとはじめる事なんて無いんだつて。それは本気でエクストリームアイロンをしてきたから言える事だろう? 僕が伊藤つちゃんと逆の立場だつたら俺だってあの場面でそつ言つた。俺も本気でエクストリームアイロンをしてきたから!」

「だからこそ、本気でやつてる水つちゃんに続けて欲しいから僕は自分で部を辞めるツモリだ。そうすれば最悪、活動は認められる。

「

「なら、逆の立場で俺や遠藤がそれを本心から願うかと思うつか? 一緒に反吐吐いて苦しんで、エクストリームアイロンをしてきた伊藤つちゃんだけをハイサヨナラで済ますと思うか?」

「それはわかりますよ……でも、僕にとつてもアイロン部は大切ですから」

伊藤つちゃんは天井を見て、大きく息を吸い込むと、皿の端に涙を浮かべた。

「前にも言ったとおり、僕は高校生活の思い出が勉強しか無かつ

たんです。それで推薦入学を決めてから、思い出の一つと思つて部活をはじめようとしたんです。本当は、アイロン部でなくてもよかつた。囲碁将棋クラブでもパソコン部でもよかつたんだ。ただ、アイロン部って名前が文化系のクラブだと思って間違えて入部したんですよ

伊藤つちゃんがぽつりぽつりと語りだす。

伊藤つちゃんは目端の涙拭うと辛そうな笑みを浮かべる。

「実際は、運動部が裸足で逃げ出すような過酷な訓練ばかりで辞めようとも思いましたけど、また、勉強だけの空っぽの生活に戻るくらいなら死んだ方がマシと思って死ぬ気で頑張りました。その苦労の先にあるエクストリームアイロンの達成感を知った時、正直涙が出ましたね。覚えてますか？一番最初。鳥山八景で部長と水っちゃんがやつたエクストリームアイロン。シャツラーを切りながら僕はこの世でもっともありえなく、馬鹿で、美しい光景があるとしたらあの瞬間だと思いましたよ。アイロンをかける為だけに血反吐を吐く訓練をして、命を懸けるんですからね」

伊藤つちゃんが自嘲気味に笑う。

「だけど、それを僕は誇りに思つてしまつた。結果はただ、シャツにアイロンをかける事だったけど、その過程はまぎれも無く、本物の努力と研鑽で、その結果があの瞬間ですから」

伊藤つちゃんは最後に、吐き出すように言った。

「……でも、もう十分です。高校時代の思い出には十分な程、色々な物をいただきましたから」

それはどこか悲しげで、切なく震えている声だつた。

だが、その伊藤っちゃんの横面に、水下の拳が飛ぶ。

盛大な音を立てて伊藤っちゃんが床に倒れ、水下が伊藤っちゃんの胸倉を掴み、今にも鼻先に噛み付きそうな勢いでまくしたてた。

「何テメエで自ゴ完結してんだよ！んな自分勝手許されつと思つてんのかよ！アア？オメエ本氣でエクストリームアイロンやつてたんじやねえのかよ？こんな形で取り上げられてお前納得できるのかよ！」

水下の皿じりにも、僅かに涙が浮いていた。

「俺は正直、エクストリームアイロンやるまで本氣で何かに打ち込んだ事なんてなかつた。でもよ！そんな自分が許せなくて俺はマジにエクストリームアイロンをやつてきたんだよ！そこまでマジになつてた物をこんな形で簡単に諦めれんのかよ！オマエはッ！」

「僕だつて諦めたくないよッ！でもしあうがないじゃないかッ！」

今にも殴りあいそうな一人。目の端に浮かぶ涙を見て、僕は胸が張り裂けそうになつた。

「二人ともヤメロッ！」

僕は叫んでいた。

「アイロンはアイロンだけじゃ掛けられないんだ。台とシャツがないとアイロンはただの熱い鉄でしかないんだ……だから、伊藤っちゃんの居ないアイロン部はアイロン部じゃない」

伊藤っちゃんが俯く。

水下が何かを僕に言いかけたが、僕はそれを制し、先に口を開く。

「絶対に廃部になんてさせない。こんな状況、崖や海の中でアイロンをかけるのに比べれば全然たいした事の無い状況だ」

僕は精一杯の強がりを言つてみせる。だが、そんなものは水下や伊藤つちゃんにはわかつてしまつている。

「だから、せめてもう少し時間を僕にくれ。絶対に何とかする方法を考えるから……それまで、各自、自主トレだけは欠かさずやっておいてくれ……今日は、解散だ」

僕はそれだけ言つと、泣き出しそうになるのを堪えて駆け出すよう部室を後にした。

誰も居なくなつた自分のクラスに戻ると、嶋本先生が教壇の上に座つて外を眺めていた。

僕はその様子から榎本理事長の説得がうまくいかなかつたものと判断した。案の定先生は僕の姿を認めるに、疲れた顔をした。

「ダメだった

「そうですか……」

僕は短くそう答えると、嶋本先生の前の机に向かい合いつつ腰掛けた。

「すまん。俺の力不足だ

「いえ、そんな事無いです……」

僕は嶋本先生に何か声をかけるべきだと考えたが、いくら考えて
も何も声をかける事ができなかつた。

しばらく、教室を沈黙が支配していた。

遠く、運動部の生徒の喧騒が聞こえる。ただ、それよりも壁の時
計が時を刻む音の方がはつきりと聞こえていた。

「なあ、遠藤」

「はい」

「これは俺の独り言だ。流して聞いてくれ」

嶋本先生は膝の上に肘を乗せ、組んだ手に額を押し付け俯きなが
らぽつりぽつりと呟き始めた。

「俺も一時期、エクストリームアイロンはいつでもできると思つて
丁度、これと同じ理由で辞めさせられたんだ」

僕はただ、黙つて聞いていた。

「その時は、エクストリームアイロンはいつでもできると思つて
いたんだ。だけど、そんな時間は一度と戻つてこなかつた」

嶋本先生はため息をつく。

「俺はお前たちをそんな目にあわせたくないが……どうせ、
それだけの力が無い」

嶋本先生は顔を上げて僕を見ると呟いた。

「こんな事なら、興味本位でお前をエクストリームアイロンなん

かに連れて行かなきやよかつたのかもな

「僕は先生を恨みませんよ」

「だけど、遠藤、覚えておけ。あるとき、お前は突如としてエクストリームアイロンを恨む事に遭遇する可能性も」

僕は先生が何を言おうとしているのかがわからなかつた。

「それは、エクストリームアイロンを辞めろという事ですか？」

「そうじやない……いずれ、そうだな、いざれわかる時が来る。でも、その時には遅い事だつてあるんだ」

嶋本先生が何を言わんとしているのが僕には良くわからなかつた。

「嶋本先生、何を言おうとしているのかが良くわかりません」

「……そうだよな。わからねえよな。俺だつてわかんねえんだ。わかるわけないよな」

嶋本先生は先生で迷つてるみたいだ。僕らにこのままエクストリームアイロンを続けさせるか、否か。

「すまん、遠藤」

嶋本先生のその言葉が全てを語つていた。

答えも出せないくらい迷つてゐる嶋本先生は僕らがいつも頼りにしていた嶋本先生とは違つていた。

僕は鞄を持つて立ち上ると教室を後にする。

「先生、エクストリームアイロン好きですか？」

「……ああ、大好きだ」

「なら、大丈夫です」

僕は何が大丈夫かわからないまま、そう答えた自分の全てがわからぬまま、逃げるよう教室を後にした。

「あんな事言つて、どうにかできるアイデアなんてあるの？」「ねえよ、そんなモノ」

すっかり日が沈み、暗くなつたさくら公園のベンチで僕は吐き捨てるように言った。

隣に座るみかが心配そうに僕の顔を見つめているが、僕には構つてやれるだけの余裕がなかつた。状況は絶望的と言つてもいい。

榎本理事長がああも強硬的な物言いをするのであれば、情に訴えて物事を進める事もできない。かといって、伊藤っちゃんが辞めて部の存続を取るのも、水下や一ノ宮が納得しないし僕も納得できない。

かと言つて魔法のように状況を改善できるアイデアなんて浮かんでこない。

僕は冷たい風の中、鈍く暗い空を仰ぐ事しかできなかつた。まるで、空からアイデアが降つてくるのをずっと待つ雨乞いのようだ。

「真一……もう八時だよ。そろそろ帰るつ？」

みかが心配そうにそう言つてくれる。公園の時計の短針は八時を回り、長針はまもなく一を指し示す。

まだ夏の残暑が残るとは言え、季節は本格的な秋を向かえ、夜になると身を震わせる寒さが降りてくる。

みかの吐く息が白み始め、組んだ指先が赤くかじかんでいる。そのうか、みかがぽつりぽつりと語りだした。

「真一……」の際、エクストリームアイロンやめちやおひよ

僕は耳を疑つた。僕が驚いてみかを振り返るとみかは俯いたまま、組んだ手をもじもじとさせる。

「だつて……本気でやつてる真一には悪いけど……前まで私の側に居た真一が凄い遠ことこりに行つちやつた気がする

みかは体を預けるように僕の肩に頭を乗せると寂しそうに囁いた。

「……これだけ近くても？ 真一、私を置いてどうか遠くに行っちゃいそ？ どうか遠くで大怪我しそうで怖い」

みかが僕の顔を見上げる。

「知ってる？ 私、真一がエクストリームアイロンしてるとこ、ずっと見てるんだよ？ 崖で水下君と一緒に落つっちゃうになつた時も、遙が危なくなつた時も……あがもし真一だと思ったら凄く怖くなつた……伊藤っちゃんの『両親が部を無くそうとする気持ち、す』』くわかつちゃう」

みかが僕の肩に額を押し付ける。

「ねえ真一……もし、やめてくれるなら、何でも言つ」と聞くから、やめてくれる？

みかの表情は見えないが、その声は震えていた。

僕は今まで周りが僕らをどんな目で見ているか考えた事が無かつた。

みかの言つとおり、僕らのやつしている事は端から見ればとても危ういものだ。一つ間違えば命を落とす行為であり、その行為の結果がただのアイロンがけ等、馬鹿馬鹿しい行為に他ならない。

もし、僕に息子が居ると仮定してエクストリームアイロンをしていれば僕は間違いなく辞めさせるに違いない。そう考えれば伊藤っちゃんの両親が強引にも部の廃止を求める理由もわかる。

みかが僕の着ているコートを握り締めてくる。みかのぬくもりと、肩にかかる吐息がじわじわと僕の心を締め上げる。それは打ちひしがれた僕の心を優しく手折る。

「……そうだな

」呟いた。だけど、僕は負けるわけにはいかなかつた。

僕はみかを振り払つように立ち上ると、ベンチの上に立つた。そのまま背もたれの上に、バランス良く立つた。

「やつぱは無理。エクストリームアイロン辞めらんないよ

」みかは俯き、顔を拭うと、笑顔で僕を見上げた。

「……だよね。やっぱり真一なうつて思つた！私じゃちよつとアイロンに勝てなかつたか……

無理におどけた笑顔が、痛い。僕はなるべくみかを見ないようこ空を見上げる。

「みかがもうちよつと可愛ければ勝てたかもしぬないけどな？」

僕もおどけてみせる。

「む、今でも十分可愛いじゃん。失礼な」

膨れるみかの隣に座ると、僕は苦笑する。

「何でだらうなあ。よりによつてこんなイカレたスポーツにイカ
レちゃうなんて自分でどうかしてるよ」

「大丈夫。真一は十分イカレてるから」

「……自分でもどうしようもないのがわかつてる。だけどどうし
ょうもないんだ。どうしようもなくやめる事なんてできない」

田を細め、吐き出すように咳く。

僕は再び立ち上がり、公園を歩く。遅れてみかが僕の後ろを歩く。
僕はバスケットコートに立っていた。

ひんやりとした空気がバスケットコートを包み、水銀灯の鈍い
光がコンクリの上に描かれたコートのラインが浮かぶ。

白い光に浮かび上がるバスケットのゴールは春、僕が登つて曲げ
たまま、傾いたままだった。

僕は苦笑する。

「真一……？」

「僕はここからエクストリームアイロンを始めたんだよな……み
か、ボール」

「え？」

「ボールだよボール。バスケットボール」

僕はきょとんとしているみかにバスケットボールを催促する。み
かはサブバックの中からバスケットボールを出すと僕に投げてよこ
した。

僕はバスケットボールをゴールに向かって放る。案の定、バスケットボールはゴールの板に当たつて落ちる。地面を跳ねるバスケットボールはみかの足元に転がる。

みかはそれを拾い上げると僕の方を見る。僕はみかに向かってゴールを示した。

みかは僕より遠い場所からゴールに向けてボールを放る。それは綺麗な放物線を描いてゴールネットに突き刺さり、揺らす。

「ないっしゅー」

僕がおどけてそう言つとみかは困惑した表情で僕を見返してきた。僕は足元に転がるボールを拾い上げると、地面に叩きつけ、タムタムとドリブルを始める。

そして、みかに対して指をくいくいと曲げてみせる。

「来い、みか」

「……つともう

みかは半ば諦めたようにため息をつくと、コートを脱いで僕の方に駆け寄つてくる。僕は半身を引いてみかをけん制する。

みかは必死に僕からボールを奪おうとするが、僕は右に左にと体を振る。前と违い体力だけは作ってきてるからみかも簡単に僕からボールを奪えない。

「真一の癖に生意気な」

「昔のままだと思うなよ」

だが、程なく僕の僅かな隙をついて、みかが僕のボールを奪う。そして、僕の脇をすりぬけ、ゴールにボールを放る。揺れるゴール眺めて、僕は笑う。

「ないっしゅー！」

僕は親指を立てる。みかは小さくガツツポーズして答えた。

「やつぱりバスケじゃみかには勝てないな」

「そりゃ年季が違うからね」

「そりゃそうだ」

僕は苦笑する。

「よ……っと…」

僕は半年前と同じように、ゴールに登る。昔は上の時に苦労したが、今では簡単に登つていける。

「あれから半年、変わったようで変わってなくて、でもやっぱり変わってる」

ゴール板の上に座り、ゴールリングの上に立つ。
吹く風が心地良い。

みかが呆れながらも微笑を浮かべ小さくため息をついた。

「真一、また叫ぶの？」

「ああ」

空に浮かぶ星が、僕の頭上で燐然と輝き僕の鈍く曇った心に差し込む。僕は力いっぱい叫ぶ。

「ワアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

叫んで笑う。そつだ、単純な事なんだ。僕はあの時からずつと、
そうだった。

「僕はね！アイロンでね！生きている事を証明したかっただ！極限の興奮と清潔なシャツ！誰も感じたことの無い感動で僕が僕である事を証明するんだ！」

僕は思い切り跳躍して飛び降りる。星空に近づき、そして風と一緒にになって地面に迫る。

地面を捉えた足から頭の芯にかけてびりびりと衝撃が走る。僕は精一杯踏ん張つて腹の底から叫んだ。

「ツ シヤアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

痛みも、苦痛も、楽しさも、全部ひつくるめて今ここに生きている僕の証明なんだ。僕はこの感動を両手一杯抱えて行く。

僕が叫んでいるとみかが後ろで苦笑する。

僕らは一人で歩き出した。

公園を出て家路に向かつその途中、みかがぼつりと呟いた。

「…………あれから半年かあ…………早いね」

「来年は受験だし、遊んでる暇も無いよ。だから、今の「ひじ」や
れる事をやりなくっちゃ」

「事件を知らなかった」

僕は大きく背伸びをする。こんな充実した日はもう、やつてこないのだろう。そう思うと少し寂しくも、そして誇らしくもある。みかもクスリと笑う。

「そつか、そだよね……そついえば真一、来週の文化祭、誰と一緒に見て回るの？」

「あれ？ 来週文化祭だったっけ？」

僕は文化祭という単語に首を傾げる。みかはまた、呆れたような顔をして僕の肩を小突く。

「本当に真一つでエクストリームアイロンならアイロンで一つの事しか頭にないよね。ダメだよそんななんじや……ホラ？ 去年覚えてる？ 音響車借りてグラウンドで軽音楽部が野外バンドして盛り上がりたじやない。全校生徒で沸いたよねえ」

その情景を思い出してかみかがクスクスと笑う。確かにあの時の喧騒は僕も覚えている。全校生徒が夜のグラウンドに集まり、ライトアップされた音響車の上で熱演する軽音楽部の音楽に負けないくらいの喧騒で騒ぎ立てる。

音楽に騒ぐのではなく、ただ、そこに居る事に騒ぐあの様は今まで印象的に覚えている。

「そつか……文化祭か……」

僕は俯き考える。文化祭、ともすればそれは現状を打破できる唯一ともいえる機会かもしれない……

隣でみかが俯きながら手をもじもじとさせ、口の中だけで「よしよし」と呟く。

「真一……もし、よかつたら……一緒に……」

僕は一つのプランを頭の中で練り上げ、それが明確な形となる前に叫んでいた。

「……よしつ！もうこいつなつたらやるしかないか！」

「はい？」

「アイロン部を潰さないアイデアがひらめいた。みかのおかげだ」
僕はみかの手を握り、ぶんぶんと振るう。
みかははじめあっけに取られていたが次第に本日何度目になるだら、呆れた表情を作る。

「……で、真一？文化祭、可哀想な真一と私が一緒に回つてあげようつて打診してるんだけど、大丈夫なの？」

「あん？何言つてるんだ。忙しくてそれどころじゃないよ。みかにも手伝つて貰うからな？アイロン部マネージャー」

僕が満面の笑顔でそう言つと、みかは顔を怒らせてわめき散らす。

僕の手を振り解き呆気に取られる僕に構わずまるで駄々つ子のようにわめく。

「バカじゃん！」

「バカじゃん！バカじゃん！バカじゃん！」

僕はその様を見ながら笑うと、家に向かつて走りだした。

「置いて行くぞ！みか！明日からめつむぢや忙しくなるから今日は

早く寝ておけよー。」

「バツカジやーーーん!」

僕は次の日屋上に全員を集めてそのプランを説明した。あれから色々な策を考えたが僕らが最終的に実行できる策はこれくらいなものだった。

「「れ……マジでやんの?」

水下が僕が渡したプリントを一読して驚く。

僕は静かに頷くと一同の顔を見渡した。伊藤つちやんあたりは愕然として声も出ないようだった。

「部長……この計画つひょつとして…」

「そうだ、北星学園文化祭最終夜ライブをアイロン部でジャックする。そして全校生徒の前に理事長を引きずり出し、そこでアイロン部を存続させる事を確約させる」

僕が厳かにそう告げると言葉押し黙った。

「……でも軽音楽部が許しませんよ」

伊藤つちやんの申し立てもまったくもってその通りだった。だが、

僕はそれに対しても何も考えていない訳ではなかった。

「水下、お前軽音楽部に友達居るだろ?」

「ああ、居るけど……」

「この別記計画書Aを軽音楽部に渡しておいて貰えるか?」

「渡すのはいいけど……どうすんだよ？」

「どうせなら、軽音楽部にも一役打つてもいいわ」

僕は鞄の中から中身の詰まつたA4の茶封筒を取り出すとそれを水下に手渡した。

水下はその封筒の中からアイロン部に手渡した計画書とは別の計画内容が書かれた計画書に目を通し、驚く。

「遠藤、コレ……本気でやるのか？」

「ああ。軽音楽部にアイロン部の歌を歌つてもう」

その場に居たみんなが唖然とした。

だが、僕は次に二ノ宮に別の封筒を渡した。

「遠藤真一ファンクラブ第一号の一ノ宮君」

「はい？」

「ナンバー一一から十六までは演劇部で構成されてくるね」
「いや、だから、この計画書を渡してもらえないかな？そして計画の確約をして欲しい」

二ノ宮が僕から手渡された計画書を見て水下と同じように驚く。

「これは……演劇部にアイロン部の歌でミュージカルをやれと？」

「軽音楽部とは一度、打ち合わせ練習が必要だらうが、その日程も組んである。交渉は難しいが君ならできる。僕はそう信じてる」

僕は二ノ宮の肩をバンバンと叩き、気合を入れてやると、伊藤つちゃんに振り返る。

「伊藤つちゃんは一時期生徒会に在籍していたんだよね？」

「ええ、まあ」

「今でも生徒会に顔は利くのかい？」

「まあ、少しあ……」

「なら、今回の計画、先生方に漏洩しないように生徒会内に内通者を置いて見張つて貰えるかい？」

「……生徒会内なら目は届いても、有象無象の生徒からの通報は阻止できませんよ？それに、各部だつてアイロン部の実情を知つてなお協力してくれるかどうか……」

「多少のチクリは覚悟の上だ。それに、この計画はあくまでアイロン部の活動ではなく他の部による活動であつて、アイロン部の活動ではない。各部の独自の活動だ。軽音楽部がアイロン部の歌を歌つて人を死なせる訳でもないし、演劇部がミュージカルをしたところで、同じく人は死はない……それに、今回は北星学園における生徒による自由を勝ち取る戦いだ」

僕はまるでどこかの政治家のような熱弁を振るひ。

「教師や理事長の一方的な都合で我々生徒が憲法で保障されている精神の自由が制限され、部活動を制限される前例を作つてしまえば今後、事あるたびにこの事例を出し、教師達は我々生徒の活動を制限するだろう。そうなる前に我々は戦わねばならない。僕らアイロン部はたまたま一番最初にその事態に遭遇しただけだ。ならば、一番最初に戦い、そして、勝つまでだ！」

だが、しかし、皆の表情は暗かつた。

二ノ宮がぽつりと呟く。

「でも……これだけでうまく行くのでしょうか？」

「多分、どの部活もこの話に乗つてこねえよ。だつて乗つたつて得しねえじゃん」

「先生達に睨まれるような事になれば、今後の学校生活だって大変ですからね」

僕はそこで不敵に笑う。

そして、先ほどから黙つて事の成り行きを見守っていたみかに振り返る。

「みか

「はい？」

「金井クリーニングはPTAに所属してるし、また、少年補導員や商工会議所にも繫がりがあるんだろう？」「

「ま、まあ、あるけど……」

「なら、PTAに対してアイロン部の存続の件について水面下で団結するよつ策を打つて貰つて、少年補導員の会合でアイロン部のポスターを配布し、補導員の方から連絡を入れさせるんだ。で、商工会議所にアイロン部のポスターを持つていて他のクリーニング店に対しポスターの掲示を依頼するんだ。で、電気屋のモーターテレビにこのエクストリームアイロンのデモテープを流して貰い商店街から、北星学園にアイロン部があるという事実を街に認知させると、この間の余つた部費でアイロン部のイラストがプリントされた商品券を作り、それで他の部に買収工作をしかける」

「ちよ、ちよっと待つて真一。うちの親にそんな事をせられないよー」「

「なら、仕方ない、親御さんには悪いがこう伝えておいてくれ。アイロン部は今まで無断で使用されたポスターの写真について肖像権の侵害で訴える覚悟がある。と

「あんた！私を脅す気！」

「……それほどこつちは必死なんだって事。みか、もう僕が頼れるのは君しかいないんだ。頼むよ」

僕は切なそうな表情を作る。みかは憮然とした表情をしたまま口の中できじょじょと何かを呟いていたが、僕はそれを肯定の意思と受け止め、みかに別の計画書を手渡す。

「これに、詳細な計画が書いてあるから。親父さんに渡せばわかるはずだ。わからなければ僕の携帯電話の番号載つけてるから連絡してくれ」

僕は皆に計画書をそれぞれ渡すと、メモ帳を取り出し、終わった工程にチェックをつける。

「さてと、みんな下地が終わったらそれぞれ僕の携帯に報告してくれ。で、何か不備な点があつたりしたらそれもそのままにしないでガンガン報告してくれ。もし、どうしても納得しない部とかがあれば、僕の方で空手部に掛け合つて実力行使の算段を取るから」

僕がそつまくしたてると、一ノ宮と水下が呆けたように呟く。

「遠藤先輩つて……こんな人でしたっけ？」

「結構、あきとい性格してたんだなあ」

僕は悪戯をする悪ガキのような笑みを浮かべる。

「ま、高校時代つてのは一度しかないんだから、こんなバカな事できるのも今しかないんだ。やれるつむにやれるだけの事、やっておけ」

僕はそう残すと、屋上を飛び出した。

まだまだやらなきや行けない事は沢山ある。
ぼんやりしている時間なんて僕には無かつた。

第六章『アイロン部と文化祭 後編』

あれからめまぐるしく毎日が過ぎる。

その日、僕は嶋本先生と酔いつぶれ、公園のベンチで寝ていた。正常でない意識を奮い起こし、何があつたかを正確に把握しようとする。

そうだ、たしかみかの親父さんと一緒に商工会議所の会合に出席したのだ。嶋本先生と一緒に。

僕らはそこで商店街でエクストリームアイロンを広報して貰えるように算段し、その代わりに僕らは学校の文化祭に入る業者の依頼を各商店街に卸す事で合意した。

明日からは生徒会にも顔を出して積極的にアプローチしなきゃならない。伊藤っちゃんのしてくれた報告では生徒会は文化祭関係で入れる業者を全て例年通りの業者で行うつもりらしいが、今日の商工会議所の会合で算段した見積もりを持っていけばコストの低さに腰を抜かすに違いない。それだけ、これはうちの学校にとっても有益な商談だった。

あとは以前までの業者との兼ね合いも勘案し、生徒会をどう説き伏せるかを頭の中で算段していたが、どうにも酔いの方が強くて頭が回らなかつた。

「遠藤う

嶋本先生が絡んでくる。

「俺はお前が羨ましいぞおー！」

ぐでんぐでんに酔っ払い前後不覚となつている嶋本先生はベンチで僕の首を締め上げながらそう叫んでいた。

「えくすとりいいいむ！あいろん！いええええええええええええ！」

「ええええええええええええええ！」

端から見れば酔っ払い二人が公園で叫んでいいようにしか見えない。多分、警察に通報されて補導でもされようものなら僕も先生もタダで済まされる訳は無いが、今の僕らにそこまで考えるだけの頭は無かつた。

先生はひとり僕の首を締め上げると急に傾いて泣き出した

「ああ」

「せんせえ！ どうしたんすかあ！」

ハカヤヌミニ 淚いてなんていふか——これは心の泣か——

先生はひとしきり嗚咽を上げると頭を上げる。

「これは独り言だからな！」

「独り言おうしゃえ！」

「俺はエクストリームアイアンで人を一人死なせたんだ」

僕は水を浴びせかけられるように急に酔いが引いてしまった。先生は嗚咽を繰り返しながらそれでも続ける。

「イギリスに居た頃、俺にエクストリームアイロンを教えてくれた人が居たんだ。その人は俺がたった一つのミスをしたせいで命を落とした。俺は正直、怖い。お前たちをこのままエクストリームアイロンの世界に引きずりこんでしまい、命を失う事になってしまつた時、もう後戻りできないと知つたら……俺みたいになつちまうと

考へるが、これが何でもない。」

先生は嘔吐と一緒に吐き出すよつに咳く。

「だから、俺は理事長に何も言えなかつた。説得できる言葉が俺の中に見つからねえんだよ。なあ、遠藤。お前ならどうする?」

中に見つからねえんだよ。
なあ、遠藤。お前ならどうする？

「僕は僕にできる精一杯をやるだけッスよ。僕はエクストリーム

アイロンがしたい。だからやるだけやるー。」

僕は酒の勢いに任せて口から出るだけ喋つてみた。先生はそんな僕の答えに満足したのだろうか、腹の底から笑い出した。

僕はそんな先生の顔が面白くて腹の底から笑う。自分でも馬鹿やつてんなーと思いながらも楽しかった。

「今日はもう帰つまシヨー」

「大丈夫かあ？」

嶋本先生はそんな僕の肩を抱き、しつかりとした足取りで歩き始

「……つたぐ、一丁前の事いうじゃねえか。まだ酒も飲めねえガ
キンちよの分際で」

「エクストリームアイロナーですかー！」

「よつし、後三年して二十歳になつたら一緒に酒飲むぞー。」

「もう飲んだじやないっすかあ！」

僕は先生の笑う横顔を記憶の最後にとどめ、混濁していく意識に身を任せた。

文化祭まで寝る暇も無く僕は方々を飛び回った。

頭がくらくらするが、昨日の酒のせいだけではないのだろう。僕が何かを算段しているのは教師の間でも認知されておりその様子を良く思つてない連中は居たが、少年補導員から連絡が行つてゐるのだろう。それがうまく働いて直接僕に何かを言う事は無かつた。僕は生徒会室での打ち合わせを終えると今度は各業者に飲料水やベニヤの合板の依頼の電話をしていた。

文化祭の一日前、もう既に全校生徒の間にアイロン部が文化祭の最後に何かをやらかすという話が触れ回っていた。だが、まだ何をやるかまでは知らないみたいだ。

その辺りまでは僕の計算の範疇に入っていた。
僕は相手先に携帯電話越しに頭を下げるといふ上でのため息をついた。

昼休みが終わるまで、まだ、十分以上あつた。そういうばあ昼を食べるのをすっかり忘れていた。

だが、これから演劇部と軽音楽部の様子を見に行き、また、良好な関係を築いておかなければならぬ。

それに、可能であれば各クラスの出店にも商店街が新たに作った、エクストリームアイロンをしている僕らが全面的に印刷されたクリーニング店の広告用ポスターの貼付を依頼しにいかなきやならない。

今日も昼食は放課後になりそだと思いながら僕は立ち上がる。元から昼の弁当は親に言つて頼んでない。いつも登校中にコンビニ

に寄つてパンを買つてくるからだ。

泥のように重い体を引きずりながら屋上から校内に戻る。たとき、丁度みかが入ってきた。

みかは僕を見つけると、満面の笑顔を浮かべる。

「真一、発見」

「なんだよみか。今忙しいんだ」

僕はみかの横を通り過ぎて階下に降りようとするが、みかはそんな僕の腕を掴んで屋上に引きずり戻した。

「真一ご飯食べてないでしょ？」

「食べてる暇がないんだ。これから演劇部と軽音楽部を見にいく

僕がため息をつきながら言つと、みかはクスリと小さく笑う。

「それと、広告用ポスターの貼付依頼？……水下君と遙がやつて
るし、ポスターはうちのバスケ部の後輩にやらせてるから大丈夫だ
よ」

「え？」

「だから、真一はここでお皿を食べるの」

みかは持つてきたサブバックの中から弁当箱を取り出し、僕につ押し付けた。

僕はそれを困惑しながら受け取る。

みかはそんな僕の様子に構わず、自分の分を開けて食べ始める。

「ホラ、急がないと昼休み終わっちゃうよ、何なら食べさせたば
よつか?あーんしなさい、あーん」

みかはどことなく怒っているようだった。

僕も弁当箱を開けて、食べ始める。

ふと、赤いウインナーを見て、少し吹き出してしまつ。 いまどき、「タ」ときた。

「これ、お前が作ったの?」

「笑うな」

みかは食べる手を休めないで平静を装いながらしゃべつた。

僕はそれを手早く食べてしまつ。

みかが作った弁当は女の子サイズなので僕がその気になれば三分钟かかりず、食べきつてしまつ。

「『』馳走様。 ありがとう

僕は食べ終わった弁当箱をみかに返すと、そのまま立ち上がる。立ち上がるが腕を引っ張られそのまま引きずり倒される。

「感想は?」

「美味しかった。 ありがとう」

「じゃ、少し休んで行きなさい」

みかは無理矢理自分の隣に僕を座らせる。

僕は苛立たしげに頭を搔き鳴るとみかに対して言葉を荒げる。

「あのさ? 一体何のシモリな訳?」

「だつて真一、私がお願いしても無理するから今度から無理矢理、引き止める事にしたの」

みかは「飯を食べながら平然とそう答えた。

みかはまだ」飯の残っている弁当箱を仕舞うと、ナップキンに包み鞄の中に仕舞う。

「昨日だつて嶋本先生とお酒飲んでたでしょ？」

「何でお前がそんな事知ってるんだよ」

「二人してゴミの中に倒れてるの見つけてタクシー呼んだのが私なの！バカじやん！」

僕にはどうにも記憶が無い。

みかは憤然として怒りながら、顔を真っ赤に染めて僕に詰め寄る。

「真一が頑張つてるのはわかるから今は少しだけ休んで」

みかは僕の頭を掴むと、無理矢理自分の膝の上に乗せる。僕は団らすもみかの膝枕の上で寝る形となる。

「……恥ずかしいな。こんな誰かに見られたらどうするんだよ」

「バカじやん！私だつて恥ずかしいわよ。この代金は高くつくからね。いろんなびつのバナナクレープ、三回」

「勝手に人の頭自分の膝の上に乗せて奢りを要求するなんてどこのヤクザよ」

「そんな事言つていいの？今からうちの親に手を返してもらつてポスターだとか商工会議所に働きかけて貰つてもいいんだよ」

「これはみかなりの僕への優しさかも知れない。僕は小さくため息をつくと、そこで少し横になつた。

みかはため息をつくと

「……つたく素直じゃないんだから」

と小さく呟いたが、僕は心の中で

「どっちがよ

「何か言った？」

呟いたツモリが声に出でていた。

そして、文化祭がやってきた。

文化祭初日は何事も無く、進んでいった。

例年通り、各クラスの出し物や、文科系クラブの展覧会等が校内の随所で行われている。

僕はみかと一ノ宮に振り回されるようにその出し物を見て回った。出店の多くに商店街に配布させたポスターが貼付され、行きかう人々がありえないアイロン掛けをしている写真に目を奪われる。そして、そこで買い物をする店員と明日の夜にアイロン部が何をするかもしれないという噂話をし、盛り上がっている。

僕はその様子に満足する。

僕は不満をあらわにするみかと一ノ宮をなだめつつ、文化祭回りを早々に切り上げると最終日の準備に取り掛かった。

夜の校舎の屋上に花火を仕掛け、グラウンドの照明関係の調節、そして、器材の搬送を実施する。

水下や伊藤っちゃんも手伝いその作業が終了した後、僕らは長らく使用していない部室で次の日の最終打ち合わせを実施した。

その場には軽音楽部の部長である田下部先輩や、演劇部部長である古川先輩も同席していた。

「これより、明日のHクストリームアイロンの実施計画を伝達する

僕は黒板に校舎の図と音響車の位置、そして、観客の位置を次々に記載する。

「今回のエクストリームアイロンは全校生徒を巻き込んだエクストリームアイロンだ。今回の最大の目的は、全校生徒を煽動し、みんなの前に榎本理事長を引っ張り出し、アイロン部の存続を認めさせる事が目的だ」

「「了解ツ！」」

アイロン部の怒号のような返事に、他の部の部長が驚く。無理もない。ともすれば軍隊と同じような場所なのだから。

「順番としてはこうだ。音響車の上では依頼した軽音楽部の最後の曲「アイロンハート」が流れ次第、演劇部が音響車の一段低い場所に設けられたステージに入つてミコージカルを実施。その間奏時に水下、伊藤、二ノ宮が音響車背後の校舎屋上からラペリングしながらエクストリームアイロンを実施する。左サイドから水下、右サイドから伊藤つちゃん。そしてセンターから二ノ宮がだ。脚本にあるとおり、その際、何でもいいから密を煽る一言を言つてくれ。全部が終了次第、僕が飛ぶ」

「「了解ツ！」」

皆が鋭く返事をするのを見て、僕は静かに頷いた。

「最後に……これは僕ら北星学園の自由を守る為の戦いだ。これに敗北すれば、僕らはこれから自由を奪われ続ける事になる。これから入る後輩達の為にも、このエクストリームアイロン、絶対に成功させるぞー！」

僕は言葉を切ると、部員と円陣を組む。

「北星学園ア・イ・ロ・ン・部ううううううううう！」

「ワアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

「ヒイツ！」

「オウツ！」

「ヒイツ！」

「オウツ！」

「ヒクストリイイイイイイイイイイイイ！」

「アイロンツ！ イヤアアツ！」

一同の叫びが狭い部室の中を震わせる。

僕らはお互い握りこぶしをぶつけ合つと、不敵な笑みを浮かべて解散する。

「よっしゃ、今日は早く休めよ」

僕がそういうと歎苦笑して頷く。

軽音楽部部長の口下部先輩が僕の方を見て、羨ましそうに言った。

「何か……いいな、お前ら」

僕は苦笑すると、親指を立てる。

「アイロン部、最高ッスよ」

文化祭最終夜。

噂は伝播し広がり、皆、この夜に起ころる出来事を期待していた。

PTAを含め、興味に思つた街の連中や学校のOBまでもがグラウンドに集まつていた。

星が綺麗に浮かぶ夜空の下に集まつた生徒の熱氣は薄ら寒い風を吹き飛ばし、ゆらゆらと、音響車をライトアップする光と一緒に天を焦がす。

大型のコンテナ車に、大型のスピーカーアンプシステムを積載した音響車はまるでロックフェスティバルのステージをそのまま運んできたかのような大きさだつた。

それがゆつくりと展開し、ステージを作つてゆく。

展開したコンテナの中からドライアイスの蒸気が吹き上がり、吐き出されるレーザー光線の中、軽音楽部の面々が姿を現す。

ベレー帽の三年生の女子をヴォーカルにしたユニットだ。彼らは奇抜な衣装を着るのではなく、あえて北星学園の制服を着崩し、格好よく見せている。

「北星学園！ 軽音楽部ウ！」
「エクストリイイイイイイ！」
「ミコージック！ イヤアアツ！」

昨日の僕らの真似だろ？ 彼らは声を上げると観客を沸かせた。スピーカーから生徒会のアナウンスが入る。

「北星学園文化祭もこれで最後のプログラムとなります！ 軽音楽部による最終夜ライブ！」

アナウンスの終了と共に、軽音楽部の楽器が鳴る。激しくビートを刻み、ヴォーカルの紡ぎ出す歌声がスピーカーの上で弾け、圧倒的な力量で持つて僕らを震わせる。

観客はその勢いに酔いしれ、プロでは無い、だがしかし、情熱を持った彼らの音楽に身を揺らす。

「イエス、主はここにいる。」

一曲、三曲とアップテンポな曲が続き、四曲目にバラードが入り、客を少しうるさいさせる。

そして、いよいよ、最後の曲が来た。

軽音楽部のヴォーカルの女の子がステージの前に出てきて大音量のマイクで観客に呼びかける。

「みんなー！北星学園を愛しているかー。」

全校生徒が歓声を上げる。

「北星学園に自由をオオオオオオ！」

それに答えるよつて旨が抱える。

そして、その女の子はその歡声からぐるを得て、泣き止んだ。

「……だけど今、この北星学園で一つの自由が奪われようとしています」

「やわらかく、観客がやわらぐ」だけではなくて、その子は静かな、そして力ある声で訴えかけた。

「……それは普段、私たちには関係の無い人達の自由かもしません。だけど、彼らは私たちと同じこの学び舎で自分たちの青春を命懸けで謳歌する、かけがえの無い仲間たちです。もし、この自由が奪われるのであれば私たちはこの後、幾星霜に渡る北星学園の歴史に自由を差し出した不名誉な記録を刻むことになります。私たちはそんな事を認めてはいけない。私たちは自由を守らなきゃいけない

い。軽音楽部は彼らの自由を守る為、皆をと一緒に最後のナンバーを歌いたいと思います」

全校生徒がざわざわと騒ぎ出す。眩しいライトに照りし出されたその子は自分の着ている制服のスカートの中に隠していたアイロンを掲げる。

「北星学園、演劇部とアイロン部、軽音楽部が送る最後のナンバー！」

軽音楽部の他の面々もどこからかアイロンを掲げ、ステージの前に並んで立つ。

「北星学園の自由の為に歌いますッ！タイトルは…アイロン部のテーマ！アイロンハートオオ！」

軽音楽部が観客に向かつてアイロンを掲げる。

観客の中で歓声が起き、方々でアイロンを投げる奴が居た。この騒ぎをあらかじめ察知して事前準備してる生徒も居たのだ。良く見ればそれは女子バスケ部の連中であつた事にも気がつく。

シンセサイザーの音が鳴り響く。

ドラムが軽快なリズムを刻む。

ギターのピートがそれに絡まり、観客席を熱くする。

ステージの上に制服姿にエプロンをつけ、手にはアイロンやアイロン台、シャツをつた演劇部の面々が集う。ヴォーカルの女の子が叫ぶ。

「アーコーレティイ！？」

「エクストリイイイイイイイームー！」

それに、舞台上に居る全員、そして全校生徒が答えた。

「「アイロンッ！イヤアアアツ！」」

ヴォーカルの子がマイクを振り乱し歌う。

「ツチヨー！ツチヨー！ツチヨー！トーレツ！」

それは僕らがいつもランニングする時に掛けていた掛け声だつた。作詞作曲は全部任せていたが流石に僕も苦笑する。

「ツチヨー！ツチヨー！ツチヨー！トーレ！」

全校生徒がそれに合わせる。

演劇部が走る演技をしながら踊る。

「北星学園アイロン部ううう！」

「ふあいお！ふあいお！」

舞台の上のヴォーカルが手にしたアイロンを虚空中にかけると、それがあわせて皆が舞台に向かいアイロンをかけるように手を振る。

「「イヤアアアアアアアアアアアアア！」」

僕の胸に熱いものがこみ上げてきた。

「右手にあるのは熱いアイロンッ！左手には白いシャツ！背中にテーブル背負つたら飛び出そう！胸にはアイロンよりもまだ熱いハートを持つて！」

「エクストリーム、アイロン、イヒヒツ！」

「崖の上でも海の底でも、空の上でもビリでも構わない…そこで僕は感じるから！アイロンより熱い青春を…」

演劇部の部員が台の上にシャツを広げ、アイロンを押しつけてる。

「白いシャツの上で踊れアイロン…」

「「アイロオン！」」

「僕の心よ躍れアイロン！…」

「「アイロオン！」」

熱く迸る咆哮が空を貫く。熱い熱気が僕らの体を貫き、体の奥底に鬱積していた何かを解き放つ。

「エクストリイイイイイイイ！」

「「アイロオン！イヤアアツ」」

びりびりと大気を震わせる。

全校生徒が咆える中、軽音楽部の楽器が鳴り響き間奏に入る。その間奏が鳴ると、音響車の後ろの校舎がライトアップされ、その左右に、作業服にヘルメット、ハーネス姿の水下と伊藤つちゃんが立っていた。

「「れより…」」

「「エクストリームアイロンを実施する…」」

全校生徒が歓声を上げる。

水下がワイヤレスマイクを放し、全校生徒の喧騒に負ける事のない大声で叫んだ。

「水下学はあー・マジになる物探してエクストリームアイロンやつ

てきましたあ！エクストリームアイロン最ツ高ツ！」

「「イヤアアツ！」

全校生徒が歓声で答える。

伊藤つちゃんが水下に負けないくらいの大きな声で叫ぶ。

「伊藤新吉はあ！学校生活に悔いを残したくないからエクストリームアイロンやつてきましたあ！エクストリームアイロン最ツ高ツ！」

「「イヤアアツ！」

全校生徒の歓声を受け、二人は屋上の縁に立つと、いつも同じようにロープのチェック、カラビナのチェックをする。

「ロープよし！ハーネスよし！水下降下準備よおしつ！」
「ロープよし！ハーネスよし！伊藤下降準備よおしつ！」

二人はお互いの顔を見合させて叫ぶ。

「「エクストリイイイム」

全校生徒が叫んだ！

「「アイロン！イヤアアツ！」

一人が物凄い勢いで降下し、校舎の壁に張り付きながらアイロンをかける。

ライトアップされる校舎の壁に張り付き、アイロンをかける二人の雄姿を間近に見た皆は声も無く、ただ、軽音楽部の間奏に聞きしれ、見惚れていた。

そして、照明が校舎屋上の中央に現れた二ノ宮に向く。

「アイロン部一年！二ノ宮遙ですッ！エクストリームアイロン実施しますッ！」

小柄な体に見合はない、大きな声で観客に対して砲える。

「私は！遠藤真一先輩が大好きです！遠藤先輩にアイロンより熱い私の思いを届けたくてエクストリームアイロンやってきましたあ！エクストリームアイロン最ツ高ツー！」

「「イヤアアツ！」

全校生徒の叫びの中にじかやけくせじみた響きも混じつてゐる気がするが二ノ宮は全校生徒に手を振ると屋上の縁に立つ。

「ロープよし！ハーネスよし！二ノ宮降下準備よおしつ！」

二ノ宮が叫ぶ。

「遠藤先輩いい！あ・い・し・て・まあまああす！エクストリイイイム！」

「「アイロン！イヤアアツ！」

二ノ宮が地面を蹴り、空中で一度、錐揉みすると校舎の壁に足を着ける。

そのまま校舎の壁を軽快に下ると、途中で停止し、アイロンをかける。

三人の雄姿をライトが照らし、浮かび上がるありえない光景に全校生徒が沸いた。

文化祭の最終夜のラストステージ。ありえない歌にありえない演

出、そして、ありえない場所でのアイロンがけを見せつけられて興奮しない訳がない。

タイミングよく間奏が終わり、再び、ヴォーカルの女の子が歌う。

「ただ僕らは謳歌したい！青春の一つの形としてさー・さあ広げようアイロン台ー・さあ広げよう白いシャツ！熱したアイロン手に持つたら！飛び出せばいいのさびこだつて！そこでかければそれは！エクストリイイム！」

「「アイロン！イヤアアーーー！」」

僕は体中から迸るエネルギーを押さえつけると、背中に背負ったソレを確認した。

さて、そろそろ行かねばならない……

「右手にあるのは熱いアイロンー！」

黒いバックパックの紐を僕は口に挟むと、右手に熱したアイロンを持つ。

「左手に白いシャツ持つて！」

左手に白いワイシャツを持つ。

「背中にアイロン台を背負つたら飛び出そつー！」

バックパックの上に背負つたアイロン台を確認すると、僕は屋上の奥、クラウチングスタートの姿勢をとる。今にも爆発しそうな衝動を押さえ込んで。

「胸にはアイロンより熱いハートを持つて！」

僕は走り出す。

「ヒクストリイイイイイイイイイ！」

僕の中で何かがはじけ飛び、それが僕の口から逃った。全身を駆け巡るエネルギーが地面を蹴飛ばし、先程、二ノ宮が降下した場所に設置された跳び箱で使う踏み切り板めがけて走りこむ。僕は頭の中が真っ白になる。

力いっぱい踏み込み、跳躍する。

「「アイロオオオオオオオオン！！」」

全校生徒が叫ぶ中、僕は飛んだ。

空中で錐揉みし、背中のアイロン台を膝の上に乗せる。アイロン台の上にシャツを広げ、そこにアイロンを押し当てる。

風が吹いた。僕は風となっていた。

僕の体は熱気で焼かれた空に舞つていた。

そう、僕は屋上からロープも何もつけず、踏み切り板で思いっきり跳躍し、飛び降りたのだ。

皆が僕を見ている。

紛れも無くロープも何も無く、空中で錐揉みし、膝の上でアイロンをかける狂人を見て驚いている。

僕は途方も無く生きている実感を感じ、口に咥えた紐を引いた。ばさりと僕の背中で何かが広がる。

それはパラシユートだった。

ベースジャンプというスポーツがある。ただ、飛び降りパラシユートを開くというスポーツだ。

「崖の上でも海の底でも、空の上でもどこにでも構わない！そこで

僕は感じるからー・アイロンより熱い青春を！

歌うヴォーカルの前に、僕はアイロンをかけながら悠然と降り立つ。

高度が足りない事から、パラシュートでの減速は足りず、落下のスピードは相当な物だつた。足から頭の先まで痺れるような衝撃が走つたが、それも、今は心地よい。

る。

僕はゆつくりと顔を上げ、呆然と僕の凶行を見ていた全校生徒を見渡す。

く
言
つ
た。

「エクストリームアイロン…………最ツ高ツ！」

皆、目の前で何が起きたかわからないような表情をしている。僕は不敵に笑い、熱気を放つアイロンを頭上にかざして、咆えた。

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

響き渡る咆哮が、熱気となつて全校生徒の頬を凧ぐ。

。 次の瞬間、その熱気は何倍にもなってアーリシの僕に帰ってきた。

た

びりびりと空が震え、何かが僕らの中で爆発していた。僕はマイクを持つたまま全校生徒に語りかける。

「遠藤真一！当年とつて十七歳！命を懸けて青春します！」

「「オオオオオオオオオオオオオオ！」」

全校生徒が答える。

「ただ、アイロン部は理事長命を持つてして、解散しなければなりません。」

皆がざわつく。

僕は間髪入れずに叫んだ。

「ンな不条理認めてたまつかあつ！」

「これから先はもう、台本に無い。」

後は僕の思いの丈をぶつけてやるしかない。

「エクストリームアイロンは危険だから中止しなさいだとお？命に関わるからやめなさいだとお？そんなモンこじりとうとつくに承知の上でやつてるんだ馬鹿ヤロウッ！」

だんとステージを踏み抜く勢いで足を鳴らすと砲えた。

「僕らの高校時代は今この瞬間しかないんだ！その瞬間に命を賭けて何が悪い！今この瞬間に命を賭けれないで、一体いつになつたら命を賭ける事ができる！後での時、やつときやよかつたって後悔するぐらいなら！死んでしまった方がマシだ！」

僕はそこで一度息を切ると、静かに告げた。

「そこのとこ、三四〇シク

皆が、答えた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオツ！」

学校が壊れそうな勢いの咆哮が響く。震える大気がびりびりと響き、僕の心に更なる勇気をくれる。

「榎本理事長！ 塾上へ！」

僕がマイクで榎本理事長を呼びつける。

だが、理事長は姿を現さない。ここで出てこなければ僕の計画は水泡に帰す。理事長もそのくらいの事は理解しているのだろう。

僕はじつとりと脂汗が額に滲むのが分かった。

生徒達は次の展開が無い事から、徐々に興奮という魔法から醒めかけている。

ざわざわとした喧騒が広がりはじめ、それと同時に僕の心にも失敗したという疑念が広がりはじめた。

だが、その時、

「理ツ事ツ長ツ！ 理ツ事ツ長ツ！」

女子バスケット部員の真ん中で誰かが理事長コールを始めた。

「理ツ事ツ長ツ！ 理ツ事ツ長ツ！」

足を鳴らし、一人で声の限り理事長コールを続けるそいつは、金井みかだつた。

みかにつられて、女子バスケット部員も理事長コールに参加する。

「「理ツ事ツ長ツ！理ツ事ツ長ツ！」」

次第にコールは伝染していき、全校生徒を巻き込み、そして、さらには来客していたPTAや一般客にすらコールは及んだ。

「「理ツ事ツ長ツ！理ツ事ツ長ツ！」」

大合奏となつた理事長コールを受け、人垣を搔き分けてスース姿の榎本理事長が苦々しい表情を浮かべながらステージにやってきた。

「「イヤアアアアアアアアアア！」」

皆が歓声を上げる。

理事長はなるべく平静を保とうとして、皆に軽く頭を下げる。そして、僕の方に歩み寄ると、誰にも聞こえない声で言った。

「やつてくれたな」

僕はしたり顔でマイクを理事長に渡す。

ここまでやつてアイロン部の解散を指示する事はできないだろう。僕は理事長が次に述べる言葉を待つた。

理事長はそれでも僕に対し不敵に笑つた。

「北星学園理事長の榎本です。全校生徒の諸君、お集まりの皆様。今夜は北星学園文化祭の最後にふさわしい若さの溢れる夜となりました」

僕は理事長の不敵な笑みにどうしようもない不安を感じた。

「さて、先日当校においてアイロン部に対し解散を求めた次第ではあります、今夜の催しを見て私も考え方を変えざるを得ません。生徒の自由は生徒の力で。この力はこれから日本を担っていく若者である皆さんの生涯の宝となるでしょう」

全校生徒が呟えた。

「「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オツ！」」

それは不条理な施策に対し、僕ら生徒が勝利した瞬間だった。
だが、理事長は僕の方を一瞥すると、続けた。

「ただし、エクストリームアイロンは非常に危険な競技である事には間違いありません。また、競技人口も少なく、部として認めるにはいかがなものか。と、私は思案し、部として認めるに際して、今年度の残り半年において、部としての活動実績を公式に残せた場合のみ、その存続を認めようと思います。なぜなら、他のスポーツクラブや文化部と対等に引け目を感じる事無く活動していただき、北星学園の名を世に知らしめて欲しいからです」

僕は全身から汗が吹き出るのを感じた。

理事長は鼻を鳴らすと、僕にマイクを返した。

公式の記録等、日本で大会をやつていない以上残す事はできない。
ここで安易に返答すれば大会の所存を問われるだろう。ありもない大会で記録を残すここで公言すれば僕は全校生徒に対する嘘つきとされ、学園に居られなくなる。

よつて、公式大会の無いアイロン部は必然的にこの場で廃部宣言をしなければならない。

「わあ、遠藤部長にアイロン部の抱負を語つて貰いましょう!」

全校生徒が煽る。

「ハニシ！」

僕はマイクに向かい何をしゃべればいいのか必死に考えるが、状況を打破する為のアイデアは浮かんで来ない。

方を見つめている。全校生徒は皆が期待に満ちた目で僕を見つめている。

そして、みがだけが、まるで天に祈るように手を組み俯いている。
僕が諦めて小さくため息をついた時だ。

「あー、ここで、全校生徒に重大な発表がある」

スピーカーから流れ出るその声は間違える事も無い、嶋本先生だ。照明が嶋本先生の姿を探すが、発見できない。

める。

が跳躍した踏み切り板から跳躍する。

唯柔かべ、漆の上でアイロンをかか、パ

テージに着地する。

僕とまったく同じエクストリームアイロンをこなし、悠然と立ち上がった嶋本先生の雄姿に皆、声も無く見とれていた。

「アイロン部顧問。嶋本一彦です。今度、ここに居る遠藤真一と一緒に、エクストリームアイロンの大会に出場します」

皆がどよめく。

「エクストリームアイロンは全世界で競技人口千人弱のマイナーなスポーツです。当然日本に公式の大会なんてありません。ですから日本では理事長の言うような公式な記録なんて残す事はできません」

嶋本先生はさも当然といった様な様子でそう皆に告げた。
全校生徒達の間にどよめきが更に広がる。当然だ。公式大会で記録が残せなければその時点では解散なのだから。
しかし、嶋本先生は不敵に笑う。

「しかし、日本には大会が無くても、世界に目を向ければ大会はあります！そして、先日、私と遠藤真一に、世界大会の出場要請がありましたアツ！」

嶋本先生のガツツポーズに全校生徒が呟える。

「「ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツー！」」

それは僕にとっても衝撃的だった。

嶋本先生はにやりと笑うと、続ける。

「詳しくはエクストリームアイロンの公式ホームページをご覧下さい。世界大会出場者欄に遠藤真一と私、嶋本一彦の名前が記載されています」

理事長は田を丸くして僕らを見る。嶋本先生は僕らの方を笑いながら一瞥すると、全校生徒に向けて叫んだ。

「我々は！北星学園アイロン部の看板を汚す事の無いよう！世界大会で優秀な記録を残して参ります！」

そして、手にしたアイロンを頭上に掲げる。

「エクストリイイイイイイイイイムー！」
「アイロン！イヤアアアツー！」

全校生徒が咆えた。

Hピローグ『アイロンと僕とこれから』

なぜ写真を撮るのか、今更ながら気がついた。

撮った写真是全てエクストリームアイロンの公式ホームページに送られそこでアップされる。

僕らの活動が世界中のエクストリームアイロナーに知られているのに気がついたのは文化祭が終わってからだ。

様々な活動の実態を見て、今年最後にイギリスで開催されるエクストリームアイロン世界大会への出場依頼が僕に来ていたのだ。

僕は両親にその旨を説明した時、母親は

「あんたバカじやないの？親をからかう暇があるなら勉強でもしないさい」

と一笑されたが、親父にその書面を見せたといふ

「まあ、春から色々やつてるみたいだから何があるかとは思つてはいたが……いい経験だ。行つて来なさい」

と存外、簡単に了承が得られた。

僕は出発当日、早めに家を出ると空港に向かつた。

部員の皆には学校があるだろうから見送りは要らないと告げてきた。本当は少々恥ずかしいのもあつたからだ。

僕は大きなスポーツバッグを肩から下げながら空港のターミナルで飛行機を待っていた。

僕はみんなに何をお土産で買って来ようか悩みながらぼんやりと時間を潰す。本場イギリス産のアンティークなアイロンあたりどうだろうと考えるところ、僕も相当アイロンに入れ込んでいる証拠だ。本当は英語のトラベルガイドでも読んで基本的な英会話でもマス

ターしておけばいいのだろうが、残念ながら一学期の中間試験も結果は酷い事になっていた。無論、そんなものだから勉学に対する向上心など皆無だ。

現地に強い嶋本先生と一緒に尚更だ。

場内アナウンスが流れ、僕が乗る便の搭乗手続きが開始されたようだ。

僕は荷物をもって立ち上ると、ゆっくりと搭乗ロビーのゲートに向かつた。

人の少ないゲートで並んでいると、僕の突如携帯電話が鳴りだした。

誰からだらう。僕が携帯電話に出ると、耳をつさざくような叫び声が聞こえた。

「真一今ビーハンじるのー！」

きんきんと耳の中で響くその声は紛れも無くみかのものだつた。

「空港だよ。今日出発するつて言つたじゃないか」

「家に行つても居ないんだもんー空港のどー?」

「空港に来てるの?お前学校は?」

「休んだに決まってるでしょーバカじやんー」

「はあー！」

「あ、居た居たーそこ動くなー！」

一方的に電話が切られると僕は辺りを見回す。遠く、小さな包みを抱えて駆け寄つてくるみかの姿を見つける事ができた。

「真一いつも大事な時には遅刻するくせビーハンして今日は間に合つてゐるのよー！」

みかが息を切らしながら僕を怒鳴りつける。

遅刻した訳でも無いのに怒られるのは厭然としないがそれを言つたら今のみかの怒りの火に油を注ぐようなものだ。それだけみかは凄い剣幕で僕に詰め寄っていた。

「つともうバカじゃん！」

みかは顔を難しく歪めて頭を抱える。

そして、ぞんざいに抱えていた小包を僕に手渡した。

「これは？」

「アイロン。今使ってるのもつ大分痛んでるでしょ？日本の代表なんだからぼろぼろなの使つてたらみつともないでしょ？」

僕が小包を開くと、そこには新品种の「一デレスアイロン」があつた。丁寧に外国用コンセントでも対応できる変圧器まで入っている。

「ありがとう、みか。助かるよ」

今使つているアイロンの外板がひび割れてたり、アイロン板が錆びていたりしてたから僕は心の底から感謝した。

もう搭乗時間まで間が無い。

だが、みかは何か僕に伝えたい事があるみたいだ。

「えとね、真一」

息を切らせたまま、顔を上気させてもじもじと呟く。多分走つてきたから喋りづらいのだろう。と僕は勝手に解釈していた。

「おう。他のアイロン部員の分までしつかり頑張つてくるから

「やうじやなくて……」

「土産も忘れないって」

「じゃなくって」

「ああ、健康には気をつける。夜更かししないで早く寝るし」

だが、みかは息を切らせたまま首を激しく左右に振る。

「やうじやなくて！ ああ、もう！」

「どうしたんだ？」

みかは僕の襟首を掴むと、耳元で大きな声で怒鳴った。

「わたしわあー・真一 の事が好きなのー」

「はあ？」

僕は思わず素っ頓狂な声を上げる。

周りにいる空港客が僕らのやり取りを見て吹き出している。
そりやそりや。若い女が男の胸倉掴んで告白するシーンなん

て滅多に見られるモンじゃない。

みかはその場で泣き出しながらわめき散らす。

「本当に今日は真一を家に迎えに行つて空港で飛行機待ちながらゆつくつとマーク作つてアイロン渡しながら告白するシモリだつたのに全然知らじやないー・どうしてくれるのでー・これじゃ私がバカじやんー！」

みかはその場で俯いて泣き出してしまひ。

「あなたの頭の中にはアイロンのことばつかしー・夏休み前からずっと昨日じよつとしてたのに全然聞いてくれないしー・心配してる私

の事なんか本当にどうでもいいくせに！告白の仕方だつて昨日寝ないで色々考えたし、せっかく枕でキスの練習までしてたのにどうしてくれるので…」

もう、ムードもへつたくれもない告白に僕がハトが豆鉄砲をくらつたような顔をしていると、みかが睨みつけてきた。

「ほんとにもう。これ以上やつたら私本当のバカみたいだからやめる！あんたなんかアイロンと死ねばいいんだ！」

田の端に涙を溜めて、顔を耳まで真つ赤にして怒鳴るみかの顔が面白いって、僕は吹き出しちまつ。が、みかは更に怒つてしまつ。

「何がおかしい！」
「おかしいだろ。遅刻してない事で逆ギレされて告白されるなんて多分、どんなドラマや小説でもありえないだろ」「

胸倉を掴み、もう少しで顔がくつつきそうな位置で僕は笑う。みかが憮然としたまま僕を睨みつけている。
僕は笑いながら言ひ。

「だけどさ。面白いのがそんな笑える告白それで素直に嬉しいのが面白いんだ」

僕は憮然としているみかの唇に軽く、唇を重ねた。

軽く、唇同士が触れ合う程度のキス。

僕はアイロンをはじめてずっとこのおかしな幼馴染みに抱いていた感情を理解した。

いつも突然だが、ずっと隣で僕を励ましてくれたこの娘に知らずに僕は恋をしてたんだ。

「みか。アイロンとは比べられないけど、お前の事好きだ」

みかが憮然とした顔を一度、驚きに塗り替え、また憮然とする。

「バカじやん！」

みかはそう言って今度は自分の胸から僕の脣に唇を重ねてきた。胸倉を引き寄せられ、がつんと歯同士がぶつかるぎこちないキス。僕はクスクス笑うと、みかも怒っているんだか笑っているんだかわからないような表情で笑っていた。

ひとしきり笑い合いつとみかは僕の胸倉を離した。

「真ーー絶対、生きて帰ってきてよー！」

少し、後ずさりながら、涙の残る顔のままみかが精一杯の笑顔を作った。

僕は苦笑すると、貰ったアイロンを掲げて答える。

「ああ。アイロンに恋に充実した青春送りたいからな？お互い

僕はたつた今、認め合った不器用な彼女に対してアイロンを振ると搭乗手続きを済ませた。

無論、アイロンは金属探知機にひつかかり、念入りにチェックをされる。本当は手荷物にしない方がいいのだろうが、みかの愛情がこもった、これから生死を共にする相棒を飛行機の腹で眠らせるなんて事はできない。

僕はアイロンを受け取るとバツクにしまつと飛行機に乗つた。飛行機の中には先に嶋本先生が来ており、僕の指定された席の隣の席に座っていた。

「よ。遠藤。金井との今生の別れは済んだのか？」

「見てたんですか？」

「あれだけ呼ばればな？」

先生は苦笑する。僕は気まずさに苦虫を噛み潰したような顔をしながら先生の隣、窓側の席に座った。

先生は既にビールの缶を開けており、アルコールの匂いをさせていた。

「俺も、本気にエクストリームアイロンを再開すっからな？負けねえぞ？」

「望むところですよ」

僕が苦笑すると、先生も苦笑した。
しばらくして、飛行機が動き始める。
滑走路を走り、離陸する。

「イギリスか……」

僕が咳ぐ。先生は苦笑する。

「俺にとっちゃ因縁の地だけど、お前にとっちゃはじめてなんだもんな。でも何かお前にお前と一緒に行けるとワクワクするよ」

「そつスかね？」

「まあ、死んだ友人にプレスしたシャツでも添えてやる事にするよ。それで俺も自分の中にケリをつける」

「エクストリームアイロナーラしいですね」

「エクストリーム？」

「アイロン、イエエ」

嶋本先生が握り拳を差し出す。僕がその拳に拳を軽く打ち付けると一人で親指を立てた。

一人で苦笑した。

僕が住んでいる街を眼下に離陸していく。

「何か、あつという間だったなあ……」

飛行機が大地を離れたとき、僕はこれから日本を出るのだなという実感を覚えた。よく、思えば、随分と遠くまで行くものだ。

僕は鞄の中からアイロンを取り出し、膝の上に抱いた。

これに出会ってから僕の人生は急に輝くものになった。

どんなドラマや小説にも無いような荒唐無稽な青春だが、どんな

ドラマや小説よりも輝いている青春である自信があった。

そして、これからも考える暇なんて無いくらい忙しく、苦しくても、最高な毎日が僕を急き立てるのだろう。

アイロンを握り締めながら、僕は苦笑する。先生が僕の横顔を眺めいたずらめいた笑みを浮かべて呟く。

「もうすぐ、北星学園の上を通りすぎるな?面白いものが見れるぜ?」

僕は窓を眺める。

眼下に、ミニチュアのおもちゃみたいな街が広がり、そこに僕が激動の十七歳を過ごしている北星学園があつた。

「あ!」

それは白いシャツだった。

北星学園のグラウンドを白いシャツが沢山集まり、アイロンの形

を作つていた。

目をこじらしてよく見ると、全校生徒が自分たちの着ているシャツを広げ、グラウンドにアイロンの絵を描いていた。

風にはためき、揺れる白いシャツ。

だが、僕は確かにそこに感じた。

アイロンより熱い情熱を、白い

誰もが今一瞬を、一の一瞬が渾く覺り出る一瞬がでかい

熱い風が、美の顎を焼く。

僕は聞こえる事の無い声を聞いた。

「エクストリイイイイイイイイイイイム」

僕はアイロンを掲げて答える。

そう、これからも、多分、ずっと

アイランより熱い情熱と、白レシャツの爽やかさを胸に。

「アイロン！ イヤアアアアアアアアアツ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7740y/>

アイロンより熱く、シャツより爽やかに

2011年11月30日21時54分発行